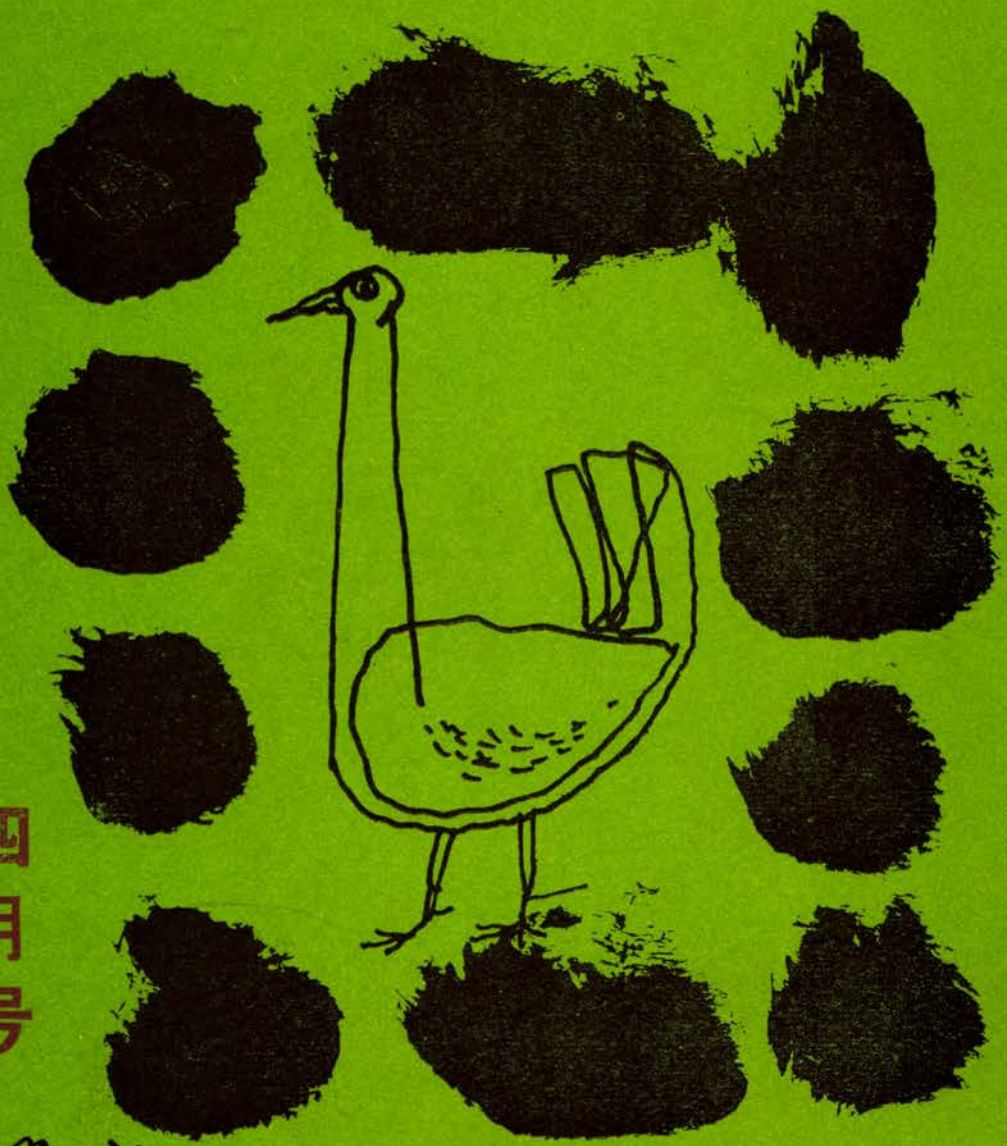
昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可　昭和卅六年四月一日発行三十六年四月号　（毎月一回一日発行）　創刊大正十三年・通巻四〇七号

川柳雑誌

麻生路郎☆主宰



四月号

Noji

No. 407

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

本社四月句会

三月から会場が変わっています。

日時 四月七日（金）午後六時

会場 関西会館 ㊐七四〇〇番
大阪市天王寺区上ノ宮町四八
（天王寺電話局東隣り）

道順 市電上本町八丁目下車（北へすぐ東側）
近鉄上本町六丁目南へ約百五十米東側

兼題 「事件」（二句）麻生路郎選
（路郎選に限り七時出句〆切厳守）
「ささやき」（三句）菊沢小松園選
「ぜいたく」（三句）八木摩天郎選
「桜」（三句）菊田いさむ選

席題 三題（当日発表）

句評 戸田古方

呈賞 ☆各題天位・☆路郎選天位に不朽洞賞カップ

会費 百円

幹事 紫香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・庸佑・狂二・与呂志・白水・水堂・すゝむ・薫風子・永断・柳宏子・舟遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円
同封（〆切四月五日）

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電・住吉㊐六〇八一

—5月本社句会—
〃兼題〃
夕焼け
レジャー
店番
小金

日本盛酒坊

灘の清酒
ニホンサカリ

和やかに まず一杯

東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰

不朽洞句帖

麻生路郎

もう死ぬと云うのに寄附を出し惜み

サギだそうな政治家のなれの果て

老らくのパンとチーズが続くなり

インテリの痩せられるだけ痩せている

白髪なり皺なり色気まだ捨てず

自動車代払わせ女巣に帰えり

養老院でも女化粧を忘れない

みだらに見える枕二つよ

川柳雑誌四月号目次

不朽洞句帖……麻生路郎……(3)
名句と難句……麻生路郎……(4)
短歌と川柳……八木摩天郎……(17)
「美しい」と「きれい」……戸田古方……(30)
東京座談会
柳界あれこれ……伊志田孝三郎・冨士野鞍馬・塚越迷亭・高須唖三味……(12)
思い出ずるまま……直原七面山……(32)
句会礼賛……長谷川三司……(30)

句評リレー……水客・日満・方大・麦彦……(25)

★現代柳人録……(19)
後家さんとチョンガー……東野大八……(15)
ある川柳大会で……木山遠二……(20)
饒舌の4B……麻生路郎……(18)
「西夏」文字……不二田一三夫……(40)
花と酒と女と……市場没食子・吉田圭井堂・若本多久志……(28)
江口の遊君……冨士野鞍馬……(16)
大萬川柳十周年記念大会……(34)
たぬきつきの話……酒井ひか平……(33)
河内弁……(27)
不朽洞の人々……文秋氏の巻……(39)

★川柳書架……(18)

★

川柳塔……麻生路郎選……(6)
同舟近詠……諸家……(29)
近作柳樽……麻生路郎選……北川春巣選……(20)
金泥集……麻生葭乃選……(40)
各地柳壇……(41)
柳界展望……(38)

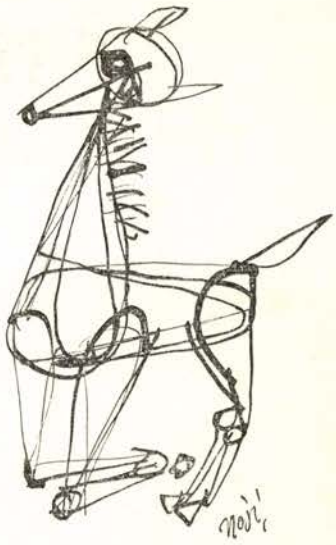
★不朽洞会から……(39)
「末席」……市場没食子選……(36)
「ブルジョア」……長野文庫選……(37)
「移り気」……菊田いさむ選……(46)

一路集

★柳樽室……(46)

▼ペンの散歩……(46)

題字……麻生路郎・表紙……野尻弘



川柳 名句と難句

麻生路郎

青春を無駄にし軍歌しか知らず

（清生）

たまたま歌を唄えば「暁に祈る」である。北支に南洋に引っぱり出されて、転戦又転戦、折角引揚げては来たが名もない会社の、それも下積みだ。

「一つお唄いなさいよ」

と云われても、自分は軍歌しか知らない。青春をムダにした人生のみじめさを今更のように悲しんでも追っつかないというのである。「軍歌しか知らず」で過去の大半を表現する妙味にはムダがない。

〔一四三〕

額ぶちと絵具と名前見てまわり

（六葉）

油絵の展覧会があると、ワンサと出かけるが、絵がホントに判る人はすくないものだ。この句のように、多くの人々は額ぶちと絵と名前を見てまわり、いかにも判ったような顔をして会場から吐き出されている。この句はこうした人間を皮肉ったのである。

〔一四四〕

小唄より英語を習うべきだった

（阿茶）

半生を顧みた時、この句のような考えがフトあたまに浮かぶが、その時にはもう遅いのである。これは小唄や英語に限ったこと云うまでもなく夫人の亡くなられた日である。

この前書がなかったら、単なる天然現象を詠んだ作者の感傷として見送ったであろう。その点この句には前書の重要さが思われる。「ささえ木がぽっくり折れた」と云う比喩法で、愛妻の死をしのんでいるところ、悲しみは細々として尽きないものがある。

同じ日に、作者は一縷ののぞみを捨ちながらも、

病人へこれが最後の撫でさすり

と詠んでいるし、

酸素吸入すでに覚悟をしたようす

と半ば諦めに近い心情を吐いている。その後の句をのぞいても、

佛壇へ頭をつけて敷く寝床

や、

〔一三九〕

霧の深さへ赤い手袋ふってみる

（水客）

山とか村とか云うよりも市街地のような感じがする。それは若い女性が朝霧のたちこめたバスの停留場での情景かも知れない。必ずしも愛人でなくとも同じ会社へ勤務している同僚と見てもいいだろう。「赤い手袋」が印象的で、この句のヤマだ。

〔一四〇〕

二月二十三日朝

ささえ木のぽっくり折れた日の寒さ

（風船洞）

この句は作者が多年苦楽を共にされて来た愛妻を喪い、悲しみの涙のまだかわかないうちに刊行された「しのびぐさ」から抬ったものである。前書の二月二十三日朝は

トーストも乳も仏とわけ合ってほとけさんの着てた蒲団でねると

と、夫婦愛のなみなみならぬものをひれきしている。

外出する際にも、

巻線香わたしのかわりたのみます

と、ユーモラスな表現ではあるが、しかも亡妻への細かい心づかいがしのばれ、涙なくしては読めない。

〔一四一〕

冬空へしがみついてる柿一つ

（七面山）

白い雲が走っている。

葉もスッカリ落ちた柿の木に柿が一つ残っている。それを冬空にしがみついてると見たところに詩情が湧いたのだ。

〔一四二〕

とではない。ここにこの句の穿ちがある。何の変哲もない表現ではあるが労苦よりは享楽へ走り易い人間性を哲学している句だと云えよう。

〔一四五〕

認証式取引すんだ顔で立ち

（若　菜）

各関係の認証式がすんで一同記念撮影となる。真面目くさった顔にも、ああ、やれやれと云うホッとした態度が見えるものだ。それを「取引すんだ顔で立ち」とは皮肉な観方だ。

〔一四六〕

退職金握り世間が恐くなり

（蛙　水）

退職金を握ったとなると、急に金を貸してくれと云うて来るかと思えば、共同で仕事をしようやないかと申し込んで来る。どこで調べたか、保険にはいってくれと云うて来る。そうかと思えば寄附を頼みに来る。イヤハヤ、これッぱかしの金へ、四方八方から、ねらっている眼、眼、眼を感じる。退職者心理を、極く大雑把につかんだ句だ。

〔一四七〕

雑居房しんとさせてる子守唄

（博　遊）

雑居房に這入っていても、母性愛には変りはない。彼女は子を眠らそうとする子守唄に余念がない。それを聞いたハタの連中もさすがに家に残した子どものことを思うと、しんとしたと云うのである。

作者がポリスマンであるだけに特殊な境遇における母性愛を巧みに描出している。

〔一四八〕

荒物屋元値を忘れそうに積み

（〇　丸）

何を聞いても、

「へい。あります」と云う荒物屋。

そこら中にぶら下げてあるし、棚という棚には積み上げてある。

あれでよく元値を忘れて損をしないものだと感心したのであろう。

一寸した発見の句だ。

〔一四九〕

お見合の感想服を脱ぎながら

（昭　夫）

「どうだった」と兄が聞く。

「そうだなア。どっちかと云うと、美人の方かなア。しかし、近眼かも知れないよ。なんだかまばゆそうにしてたから。あれでも少し背があったらなア」

「お前はどうだい」

「オレは欠点だらけだ」

「あまりゼイタクは云わん方がいいよ」

「そうか。ゼイタクかなア」

と云いながら服を脱ぎ、ワイシャツを脱ぐというところか。

極く平易に詠んではいるが、つかむところはつかんでいる句だ。

〔一五〇〕

足の裏見せて向うへばかり酌ぎ

（明　林）

宴会風景のスケッチか。「向うへばかり酌ぎ」は下ッ端のヒガミを婉曲に捉らえていて面白い。「足の裏見せて」のホライも巧みだ。

〔一五一〕

凱旋のように保釈が迎えられ

（十九平）

右翼がゾタマをもたげると、ヤクザまでが右翼らしい顔で巾をきかす。傷害事件で引っぱられても、すぐに保釈の手続きをする。そして堂々と帰宅する。それを凱旋でもしたように迎えられたというのである。迎える方も、迎えられる方も、単純なヤクザ気質が出ていて面白い。

〔一五二〕

プレゼントされたライターもう落し

（紫　光）

「あなた。アレは」

と愛人はマッチを擦ってくれながら訊く。

「その……」とおもわず口ごもる。

「そのって、落したの」

「その通り」

「ホントに詰んない。あれ、わたしの愛の象徴なのよ」

愛人のプレゼントであろうと、なかろうといずれにしてもライターはよく落すものだ。軽い穿ちの句として成功している。「もう落し」の「もう」が非常によく利いている。

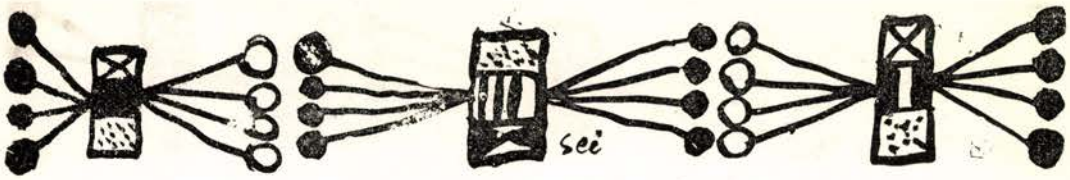
〔一五三〕

故郷の父候文で叱って来

（静　馬）

長い手紙の最後に、今後は絶対に送金は仕らず候というのであろう。今ごろ候文で叱られたところで、ピンと来ないが、そこに頑固なオヤジらしさが出ていて面白いと思う。故郷の父はクニの父と読む。

ビールは
アサヒ



川柳塔

豊中市　戸田古方

カンニングみつける役も役のうち

大阪市　市場没食子

倍増の春もやっぱり寝正月

戎さんすんでのんびり賀状が米

親戚T氏逝く

定年後の話相手が一人減り

大阪市　土井文蝶

朝酒の味は死ぬ迄飲むつもり

酒女いつ迄続く命やら

酒持って来い千円札の二三枚

うちの娘の自慢をするも女気の

女もう軽い財布と見抜いたり

西宮市　若本多久志

女丈夫が十七才の児を育て

解雇する禀議へ重い判を捺し

血圧は重役なみになっており

延着証明ゆっくり煙草喫う

今宵又獲物(えもの)をねらう厚化粧

大阪市　正本水客

今日はストやと歯医者から戻り

積りますなと葬式の朝の雪

靴はいているのにサヨナラサヨナラ

停電のあいだも女よく笑い

能面のごとき善意に歯がたたず

大阪市　丸尾潮花

猫の毛を払うて出てくる置炬燵

乗り遅れバスの尾燈を寒う追い

もう和歌(うた)も出ぬほど恋へ歳をとり

大阪市　西　いわを

縁のない人の遺骨を抱きしめて

生花を一列にしてかしこまり

堺市　八木摩天郎

ひえつき節の村にて

恋芽ばえ今なお村は那須の姓

旅に来て寿永の恋を聞くあわれ

車中にて

七分のトンネルジャズでゆく世なり

岡山市　武部香林

世情騒然撲りたくなるもの多く

猫だったのか誰も返事せず

白杖一本県の予算に引っかかり

大阪市　北川春巣

風邪マスク良家のボンのように見え

家建てる遠謀文献買い漁り

金少し溜り会には欠ばかり

ホノ☆☆市　築山快夢起

ケネデーへ彦左を気取るアイクにて

積善の余慶か知らぬが貧乏し

子の寝顔一人々々へ持つ期待

大阪市　須崎豆秋

食べることばかりに溺れ瘠せほそり

遺言を書いて心が楽になり

ホノ☆☆市　羽佐間柳葉

連続の失敗神まで誹りだし

帰化しても箸と味噌汁捨てられず

倉建てた下戸があるかと又破り

面子が騙されましたとも言えず

堺市　吉田圭井堂

親切が過ぎても教師勤まらず

どうすればよいか警官迷っとり

呉れるからもろた名刺がもめたもと

ＡＢＣのどれかの型で祝辞のべ

思い切り明治の声ではめ外ずす

幾久しくと再婚同士うけている

山口県　国弘半休

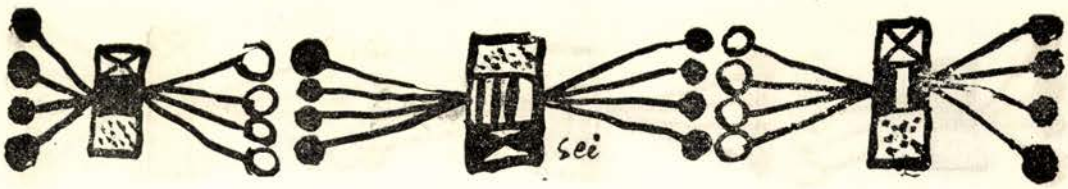
すきやきの給仕に給仕の箸がいり

洋装のみんなチューインガムが好き

防府市　長野井蛙

役得の不機嫌馴染の妓が見えず

筆にいう暴力自由の名にかくれ



サンプルと違うところは底を上げ
大阪市　太田良子

作業服ですんまへんなと診察台
アメリカへ一緒に行かんかは酔うている
惜しい様な縁を易者に見離され
舞初めの舞台は今や雪となり
岡山県　直原七面山

抱き合ったとこへ集金人の声
愛人は一人ですかと馬鹿にされ
鳥取市　河村日満

妻と子の中立に居てさげすまれ
里は雪都市は埃が立つと聞き
デモ用の靴金を打ち金を打ち
倉敷市　木村千容

つんぼうの勘いいつけたより確か
こころなく蜂いからせて刺されけり
私がわたくしがとてブチまくり
加賀市　野村味平

リットルでは酔えないコップじっと見る
チョビ髭があったばっかりにきらい抜き
晩婚の三三九度もてれくさし
大阪市　木村水堂

金だけで動かぬ意地を長屋持ち
金と暇もってる人の雪景色
お富士さんよりも女房の薄化粧
云いなりにならぬ良人に成長し

心強く思う恩師の酒談義
高槻市　福田丁路

殴らば殴り返さん目の動き
結婚のチャンスと自らPR
大阪市　真鍋一瓢

おくれ毛へ女のかたさちとゆるみ
一円は銭の音では落ちられず
二日酔日和が良いのまでが癪
反抗期まだ高校に籍があり
値上りにゃおくれじきつねうどんまで
大阪市　後藤梅志

髪かたち到々琉球人になりおった
肩書のある名刺しか呉れぬなり
何がなんでも仕たいことをする
老いぼれてきたこの頃を庇いあい
米子市　小西雄々

国会の答弁に似る倦怠期
毒舌を右翼は素直に理解せず
大阪市　山川阿茶

煩かむりしてがめつうになるつもり
寝返りを打つ政治家へ献金し
大阪市　金井文秋

キャッシュでも割引をせぬガス会社
伝書鳩使命の事は知らず飛び
倦怠期こけしもそっち向いたまま
加賀市　那谷光郎

先ずテレビ据えて雨漏り放っとかれ
まとめ役たのまれ拒めぬ足袋をはき
儲け口一肌脱げば詐欺だった
鳥取市　大西八歩

子をあやす顔は観音さまに似る
留守番もよし大の字に寝る炬燵
大臣を意識している低姿勢
K氏夫人の死を悼む

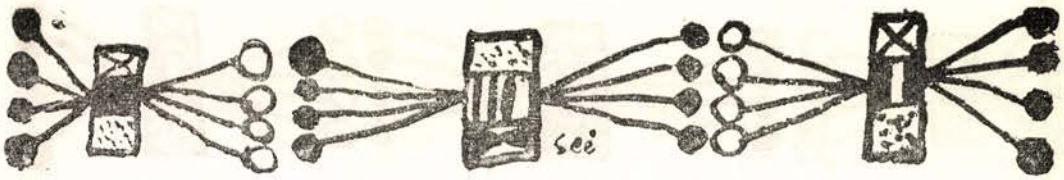
白菊の亡き魂に似て清し
下関市　桜川不水

婆さんやお爺いさんよと梅の花
風の音聞いて二あ人ぎりの酒
スクラムで稼ぐ長屋の夕の膳
岡山市　浜田久米雄

定年のしわは三十有余年
定年の背広十年前の型
出勤の時間しみじみありがたし
岩雲市　尼　緑之助

医者もスト右か左か火を噴いて
軍歴は木枯しのぬけたあとのごと
新卒は都会へ消える音もなく
鳥取市　杉谷湖山

屋上にKK古風な稲荷さま
列をした観光バスで春を押し
そのカモを絞れと女将から指令
京都市　大鶴喜由



三十三間堂宙に浮かべた春霞
フレンドがあることにしてやっと逃げ
東京都　山根白星

恐ろしい儲けを話す妻揚枝
ちょろちょろと小便小僧冬を垂れ
銀行の非情は鉄のドアーに尽き
官服の孤独真直ぐ家に着き
奈良県　飯降白香

馬鹿にされても定年までは女教師の
チビちゃんもボーイフレンドへプレゼント
奈良県　西辻竹青

真そこは友も裏切る智恵となり
大阪市　岸南柳

見のがせぬあくび一つに席を立ち
オイ兄弟なんて油断の出来ぬ友
旅の車中

出張にパパと云えよとつれてゆき
岡山県　福島鉄児

母急逝

忘れてた涙葬式すんでから
寒風の中に葬儀の列続く
岡山市　服部十九平

三輪の免許もとって寡婦が立ち
御大は赤字のことを知っていず
干からびた思想聖書を受けつけず
尼崎市　長谷川三司

春宵千金ネオンは恋のまたたきよ
ニューム貨のように老人ほっとかれ
人妻が恋しメロンの舌ざわり
二日酔い雨かと枕裏かえし
西宮市　若林草右

手袋だやれショールだといたわられ
宝くじ三味線片手に買う流し
一厘がまだ生きていた日歩を下げ
所得倍増見すてて首の座にすわり
高知市　大西迷窓

診断は正確且那はもうのぞき
子と去年見たいのししも太っとり
広島市　山田季賛

父ちゃんにすまぬミシンは強く踏む
この辺が観光地ですかと念押され
岡山県　田村藤波

恥かしい年でもなかろうとは嫌味
不器用な人だと思う花ばさみ
日直をして恋文を長う書き
児島市　木田恵二朗

たっぷりとくれたチップがホシだった
お色気がも一つ欲しい舞扇
京都市　松川杜的

旅楽し向いも仝し週刊誌
栄転の辞令を貰うて入院す
鳥取市　森本法泉子

週日のスキーは派手な姿で来
叱られて末座は少し座を移し
岡山市　津田麦太楼

貧厨も秋刀魚が燃えるあたたかさ
一旦停車お地蔵様もほほ笑まれ
吹田市　橋本幸男

ラヴシーンを見ている病院宿直者
堺市　高崎雄声

寒いから冠る帽子となりにけり
我もかくあらん旧友の変りたる
島根県　藤井明朗

子を捨てる悲劇女に生きる道
外は雪テレビも雪の別れの場
岡山県　永松東岸

お父さん稼げ稼げと子が太り
なれの果めいた姿の集金屋
ダンプカー地震を起しそうに来る
モンペ一枚内助の功に報いとき

病床吟

くりかえし読むは病む身に来た便り
病床の時計のねじをまたも捲き
倉敷市　野田素身郎

病中吟

吹雪いても妻なればこそ顔を見せ
見舞に来た子供が抱けぬもどかしさ
手術台に乗ってもけちなこと思う

大阪市　伊達堰子

汽缶車の堅さ判ったダンプカー
妙な人息子に医者が有りながら

大阪市　坂田東洋男

越境はしたが公立受けられず
凡人の夫に送る感謝の眼

大阪市　不二田一三夫

貧乏に慣れろと先輩作家なり
原稿紙にらんだままでピース空ら
近松も五十からだと励まされ
わたしにも妻がほしいと妻が言い
十七才牛のお乳で育てられ

兵庫県　酒井ひか平

三人姉妹男兄弟より稼ぎ
暴君にしてはしょっちゅう風邪を引き
糸やなぎ卒業送るようにゆれ

神戸市　丸川初甫

どん底の恩師へ弟子の発起人
倖せは還暦弟子に囲まれて
濡れた眼をかくすことにも女馴れ
灰皿はゆうべのままの柿の種

岡山県　池田古心

横丁へ曲ればドブの匂いがし

東京都　石居高志

軍隊に代る何かが欲しい世の
亡妻四十九日に
心して吹けや春風妻眠る

大阪府　早川清生

大臣の目に俺たちは数字なり
親のことを聞けば踊子押し黙り
芸人に嫁し蜜月の写真なし
未亡人会お櫛をからにして終る

岡山市　武部若菜

ふる里は寒し雑布音を立て
児等は根にもっていず叱ったのを悔い
春ですよと忘れた山が話しかけ

堺市　辻圭水

ウインクに大の男の弱かりき
こうすればこうなると男ためされる
人前で好きと言われても困り
婦人雑誌の智慧で女の大胆な
はじめから人の金をばたよりにし

西宮市　小浜牧人

淋しくなって屋上へ上り
鼻声を出して男の気を挫き
人が余って次長をつくり補佐をおき
蜆売り今朝の寒さを言うて売り
降る雪を出前は威勢よく走り
悲しきは隠してベターハーフかな

兵庫県　前川左文字

ダンプカーの方にも言分ある即死
終電車馴染の顔のだらしなく
ぼんぼんも十七才でおそれられ

岡山県　池上知恵美

猫よりはましだと言う子だけ残り
カナリヤの籠へ散りこむぼたん雪
ここからは雪を見ていたペンの色
特売場ここにも社用族の顔

大阪市　橘高薫風子

鼻が欠けても人形笑ってねばならず
バー楽し白百合の嘘薔薇の嘘
父親になっても膝を抱く癖が

下関市　中村九呂平

金になる垢だ大事に茶器を伏せ
息かけて拭けばガラスは正直な
独り入る温泉(おゆ)が不気味なガラス張り

大阪市　桝木蕗児

初詣で警官もおりスリもおり
尻餅をつくのがスキーとおぼえたり
スキ礼賛知らぬ美人に抱きつかれ

米子市　石坂新雪

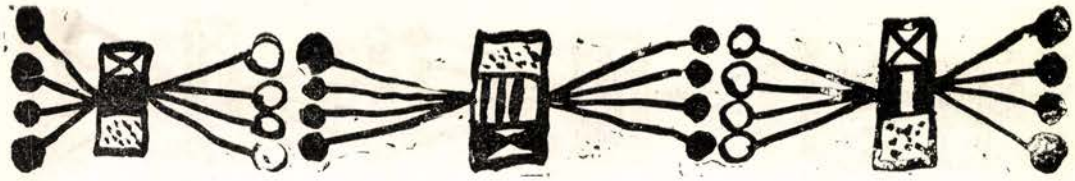
マネービル研究したと妻強気
殺人の署名在まで廻って来
病院の兎博士の名で飼われ

鳥取県　田中蛙眠子

レジャーブーム哲学書をひもとかん
美くしきものに老母の茶の点前
肩書の重さが面会謝絶にし
銀行で借りる度胸をよう持たず

岡山市　林葉丘

前途多難三十五才で嫁に来て



貧しさに耐え梅型にはる障子
ジャズ喫茶年令の差を感じて出
タコ焼を食う俳優で親しまれ
神戸市　仲　どんたく

老いて子にたよれぬ世とぞ土地を買う
南極へ行くスタイルでスキー発つ
通知簿が間違いやろうと親の慾
今東光水間寺住職となる
河内山ばりで和尚は就任し
平田市　久家代仕男

冬ごもる蘇鉄火傷をしてるよう
牛缶の味しか君は持ち合わず
都市計の杭が田圃へ打ち込まれ
その上に寺の修理費背負わされ
邪魔者は殺せとばかりダンプカー
岡山市　江国　幽谷

トン死してから有名な人になり
三十年道の凹凸みな覚え
じいさんが支那やロシヤの話をし
マージャンの鴨が欠勤してしまい
岡山市　光好　陽子

世間せぬ者の理屈は幼稚すぎ
敗北をしたように家出が戻って来
西宮市　野呂　鵜汀

足拭いて上る労働者の帰宅
そう言えば浜の子らしい顔の艶
香水の香りが負けた菊の花

冗談が奴の急所にふれて居た
母の死へ父が笑わぬ人になり
西宮市　樋口　舟遊

村正をひっさげて来たよな差押え
毎日ホール辻川玲子嬢出演
舞姿のこすフイルム巻き忘れ
雪ふってさっそく風邪を引いてる子
新潟県　高野　むじな

一年生本読む様に言う答
酔わぬ研究もしての酒の席
歌で言わにゃスポンサー気に入らず
大阪市　石倉　旅風

被害者に慰められて笑顔みせ
示談書を任せば書きかた問いに来る
五階からわいて降ってるビルの雪
酒出せば見舞いながらに飲んでくれ
ただひとつなれば胡麻でも埃めく
大阪市　魚住　満潮

続西成界わい（六句）

暴力追放通天閣の灯が嗤い
西成で誕生れただけは知って居り
ケツの毛まで抜かれたあげく中風なり
高校を卒業てやったを恩に被せ
返やすもの返済して坐り直すなり
所得倍増よせよせ酒がまずくなる
大阪府　林　昌男

外出の妻に手伝わされる帯

易の灯へやはりかなわぬ恋と知り
耳打ちに来たのは足が出る予告
愛媛県　村上　旭童

計算は苦手の奴にもうけられ
百姓の一そ背広でなけりゃよし
倉吉市　大前　鳴恍

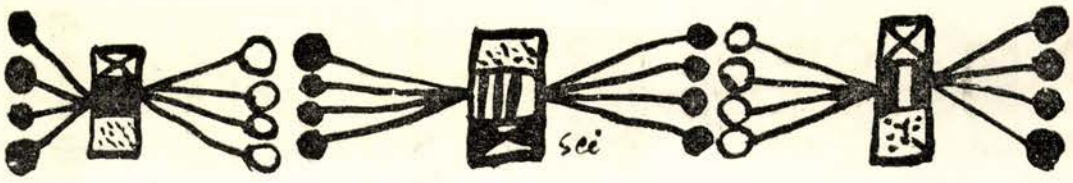
女医さんと思えど怖い顔になり
辞退しいしい上座へあぐらかき
三人の母とも見えぬ顔で舞い
お遍路の夫は妻にいたわられ
鳥取市　北村　三歩

ズバリズバリ云って案外もてており
流感に罹る
八度五分ランドセルのことふと思い
神戸市　傍島　静馬

他所で飲むときのおやじのエビス顔
トランジスターのリズムで少年靴磨き
こそこそと親馬鹿動く入学期
天皇は呵々大笑も出来ぬなり
あんちゃんと大学生を見まちがえ
大阪市　中谷　ハナ子

かぶりつき年も忘れる熱心さ
テレビ中継観客席に知った顔
岡山市　宗高　矢寸志

同僚に隠れて株の本を読み
バイト多忙専門書には塵が積み
大阪市　河井　庸佑



母親がどなれば子供までどなり
休校の家庭訪問に子があわて
大阪府　谷沢好祐

終着駅伸びと欠伸で立上り
男老いれば日和の傘となり
妻に先立たれ会社で朝のパン
三人で一人の娘が近視継ぎ
身に覚えあっても子には叱りつけ
ほめられてその心境になって来る
泉大津市　高津徹也

愛媛県　槙柴光

丁稚奉公回顧
お月見の頭赤ん坊までに下げ
大阪の水が冷たい拭掃除
おくもじを買いに天満へ走らされ
弁当を届け一幕観て帰り
とうさんのお供たまには奢りたし
商人に要らぬ勉強叱られる
叱られたのに講義録まだ届き
青森市　工藤甲吉

ぶっ通し五日吹雪いて米を借り
吹雪く夜の炉辺へ父はいま帰る
冬の戸を叩けば咳がきこえて来
ものすごい吹雪となって街は死に
吹雪く夜のひまを見込んで逢いに来る
西宮市　門永三舟

PTA評議員と云う顔で米る
玉野市　伊原明林

履物屋案外ちびた下駄をはき
妹にお金を借りて恋をする
松江市　小林孤呂二

日の丸も悲し右翼の手に持たれ
もの足らぬ短篇小説も寝つくため
免許証持っても買われない車
ご破算でおねがいします民社党
所得倍増論ふぶきのなかに消えてゆく
松江市　舟木与根一

教育勅語人を殺せと云わぬはず
癌とは知らず親身を感謝され
肩書がつき弁当を止めにする
神戸市　室田千尋

寒風に舟の七輪火をこぼし
呉服屋は奥行のあるたたずまい
豊中市　林夢虹

耳切ってみても淋しさ変らない
若き日の愛の重さの日記帳
一人来てひとり去る海辺、冬
導火線へ火を点じ女マスクする
酒にただれた舌へマスカットの青
西宮市　山本一傘

少々は要領使う主義に替え
廻り椅子めったに窓の方向かず
高知県　建沼康之介

死を見つめすぎてか妻を抱き寄せる
北風へ出て行くコップ酒を飲み
金のあるごう慢な瞳につきさされ
夫婦喧嘩バラバラ事件ふと思う
大阪市　今西生薑

へそくりが有るとにらんで機嫌とり
なすり合うお役所の手を又見られ
なさけなや僅か十五字辞書が入り
京都市　室井八九寸

釣灯籠みんな点って奈良は春
信仰で呼んで観光で使わせる
朝膳の銚子名幹事名幹事
奈良市　内海敬太

大学の朝は教授が来てあける
どっちも苦笑主義の違いなり
再起したのを新聞は振り向かず
数学がないので早稲田受験けるそう
岡山県　横山一声

女優志願女給になって帰って来
規則通り言えばあんたは固すぎる
小松市　関戸宗太郎

基地はまだ八分パチンコ開店し
社長落選嘱託職になり
夜の蝶昼の蝶よと脂ぎり
かつぎ屋にゴルフ姿を見てもらい
四苦八苦した税金のしわだらけ

東京座談会

柳界あれこれ（上）

――芝・武蔵庵にて――

（ゲスト）名古屋 伊志田孝三郎
冨士野鞍馬
塚越迷亭
高須啞三味

＝プロローグ＝

啞三味―冨士野鞍馬さんが東京に定着されてから、ボクと迷亭が鞍馬さんを挟んで、何となく懇談をする会を作り、まだ名はつけていないし、日もきめていないが、三人の都合で時たま集まり、いろいろ話しあっているんだ。そこへ君（孝三郎）が時たま出京するんで、君を入れた四人会が出来、今日でもう二回目を迎えたわけさ。

孝三郎　それは光栄だ。出京するたびに啞三味・迷亭には一方ならぬお世話になるのに、こんな有益な会に迎えられて、話しあえるなんて、本当にうれしいヨ。

迷亭　この三人会は、不定期だけれど、例会はいつも三人で、テーブルの一側があいていて寂しいんだが、君（孝三郎）の参加で、時たま四角のテーブルの四ヘンがふさがって楽しいヨ。

鞍馬　私も啞三味さん同様、身体障害者で、出京以来あまり外へは出ずにいますので、この会は楽しみにしているんですが、今日は何か主題でもあるんですか。（鞍馬氏は「書痙」で、顔が左に向いたように、首が傾いたままでいる）

啞三味　実は、今日の談話は、座談会形式の原稿にして「川柳雑誌」にくれないかと、かねがね麻生さんから頼まれているのでネ、各々テーマを出して、それを一つ一つ話しあってくれると、ありがたいのだが……。

孝三郎　それはそれでいいが、その筆記を、誰が取るのだネ、まさか隻手の啞三味が、それをやろうと言うのではあるまいネ。

啞三味　その御心配はありがたいが、ボクが頼まれたのだから、ボクがやるヨ。それで、テープ・レコーダーを用意しておいたから皆に遠慮なくシャベッテもらって時々要点だけ、ボクが質問して、メモをとるようにしたいのだが、どうだろう。

孝三郎―それは用意のいい事で結構だ。録音だけでは変な間違いをする事があるから、肝腎な所は、やはりメモする必要がある。ボクがある会で

まだ年も四十で居れば面白き

という句の話をした所、その筆記事に

まだ年も四十で入歯面白き

となっていて、ア然とした事があったからネ。

＝原稿依頼の事＝

迷亭　それで、啞三味がこの原稿を頼まれた事について、原稿依頼の事を、ボクは先ずテーマにしたいナ。啞三味の頼まれ方は、どんな具合だったんだネ。

啞三味　こんどの場合は、ひどく正当なんだヨ。何かのついでの私信で、ボクが「この頃は迷・鞍・啞の三人会を時々やっている」という事を、麻生さんに書いた、すると麻生さんから「いつでもいいから、それを原稿にして、ボクの雑誌にくれないか」といって来、後から編集担当者の不二田一三夫さんが、正式の原稿依頼状をよこしたのだからネ。

迷亭　それならナットクでき、啞三味が一生懸命になる気持も判るヨ。だが、柳誌の原稿依頼にはずいぶんブシツケなのもあるし見当違いなものもあるんでネ。

孝三郎　ボクなんか、迷亭、啞三味ほど原稿依頼はないが、それでも時々常識はずれのが来るヨ。何を、どのくらい、いつまでに書けばいいのだか、全然はっきりしないのなんか、依頼とは言えないからネ。

啞三味　そう、ボクん所にも、一度そんなのが来たヨ。それで、ボクは「どんな事を、何枚くらい何日までに書けばいいか」と問い合わせ状を出したが、それにはとうとう返事が来なかった。

迷亭　あきれたもんだネ。そういうのは、編集する人が素人で、そういう事がよく判らないからだろうが、それならそれで、此地へ提供するスペースを、一頁分とか二頁分とか言って来れば、此方には判っているので、それだけの分を書いてやるのだが、書いてほしいテーマも判らないのは困るヨ。特に毎月発行誌を送ってもくれていない所から、テーマ随意なんて頼まれたって、その雑誌のイズムもカラーも知らないのだから、どうにもなりやしないよネ。

鞍馬　そうなんです。私の古句研究家という事は知っていてくれるらしく「古句について何か」と頼んで来るんですが、おっしゃる通り、その雑誌の色合いが判らないと、ちょっと書きにくいですネ。特に私のものは、古句の分類なのですから、常に心がけて捜していて集まるのでして、ヒョイと

頼まれたからとて、オイソレとは書けないのですヨ。

孝三郎 あなたのものは、いつも敬服して読んでいるのですが、大変でしょうネ。たえず「柳樽」を読んでいるのですか。

鞍馬 「柳樽」ばかりでなく、万句今も「武玉川」も読んでいますが、書こうと思う主題があるとそれをよく研究してから、句集めにかかるのです。それで、よくいう斜め読みで、大体判ります。しかし、何しろ句ばかり読むのですから、目も頭も疲れてしまって、長くは続きません。毎日少しずつ、丹念に読んで行って、見つけるのですヨ。私の仕事を「あれはコレクションだよ」と、悪く言った人があるそうですが、コレクションでも何でも、ヤッツケ仕事ではない事だけは、認めてはしいですネ。

迷亭 それはボクら、みんな認めていますヨ。所で柳誌編集者も、この人にはこういう事を、あの人はこんなテーマをと、いうように、フダン勉強していて貰いたいですネ。鞍馬君には古川柳の事を、青竜刀君には諷詩論をぐらいは知っていても、後はさっぱり知らないのだから、ボクらに頼むだって、何を頼んでいいか、本当には知らないんだナ。

唖三味 そうして書き上げた原稿を、ボクなんか必ず速達・書留で送ってやるんだが、それに対して、返事の来るのはマレだナ。書留だから届いているのはアタリマエと考えてかも知れないが、一応「届きました」という返事がくれば、此方も安心するんだが、それを言ってよこさないんだ……。

迷亭 それも、柳誌経営者の常識の一つだナ。ちゃんと原稿を頼んで、それが届いたら、一応礼状を出しておいて、掲載誌と同時に感謝の意を表すべきだが、さて、原稿料をくれる所があるかな。

鞍馬 Aの所とBでは出す事になっていますが、あなた方には、どうですかな。

唖三味 ボクは、柳誌では貰った事はないネ。此間ある保養園の機関誌に書いた時、少し貰ったけど、これは柳誌ではないからナ。むかし「すげ笠」では、原稿料を出しますと、依頼の度に言って来たので、ボクはその都度「誌代としてお取り置き下さい」と辞退していたがネ。

迷亭 Bへ雀さんの事を書いたネ。唖三味と一緒だったろう。あの時は、くれなかったろう。

唖三味 ああ、くれなかった。

鞍馬 それは、寄稿ではなかったのですか。大新聞なぞも、寄稿には稿料を出さん事になっとるそうじゃないですか。

迷亭 いいや、あれは寄稿じゃないヨ。ちゃんと担当者がプランを立てて、枚数をきめて、口頭で頼んだものだヨ。なア、そうだったろう、唖三味。

唖三味 そうだヨ。雀さんの告別式の日に頼まれたんだヨ。

鞍馬 それはどうも、私はそう承知していたのですが、その後、社規が変わったのかナ。だがAの所では、現在私が貰っていますから、これは間違いありません。

迷亭 まあ我々は、それで生活しているのではないから、それは大した問題ではないがネ。それを商売にしている職業川柳家には、たとえ柳誌といえども、必ず多少は原稿料を出すようにしてはしいもんだと思うネ。

孝三郎 同感だネ。

鞍馬 さっき言った寄稿と、依頼原稿は、確然とさすべきだと思いますネ。大新聞なんか、寄稿されたものは、ちゃんと「寄稿」とことわっていますネ。

唖三味 今の一般柳誌は、ほとんど同人制だから、原稿料まではまだ手が回らないだろうが、行く行くは柳誌がみんな裕福になって、いろんな謝礼も、フンダンに出せるようになってくれるよう希うと言う事で、このテーマを結びたいんだが、いいでしょう。

迷亭 いいだろう。所で、最初のテーマはボクが出したんだから次のテーマは誰か出せよ。

＝句の混同という事＝

鞍馬 私は、今日の集まりのために、面白い事を調べて来ましたよ。それは、故矢野錦浪さんが、御自分の句として、短冊などにも書いていられた

使っても溜めても金は面白し

という句なんですが、実はあれは古句にあるんですよ。

迷亭 あれは、矢野が谷孫六になって金銭教育を始めた時、丁度手頃な句なので、言い出したので何て言うかな「教材」のつもりで使っていたのが、つい人に乞われるままに短冊なぞに書いてしまって、知らず知らずのうちに、自分の句のように思ってしまったらしいんで、そんな事は、ままあるんじゃないかな。

唖三味 例の佐瀬剣珍坊の

まっすぐに歩けば人に突き当たり

なんか、ボクは最近まで剣珍の句だと思いこんでいたからネ。

迷亭 それは、正木十千棒の句で、ちゃんと先に活字になっているんだヨ。

唖三味 それを、ボクも十千棒に聞いて驚いたんだが、先に活字になっている事は強いよネ。

孝三郎 所で、鞍馬さん、その出典をお教え下さい。

鞍馬 それが、調べてみると、何と三句もあるのですヨ。

遣うのも溜めるも金は面白し（柳ダル六十）

遣っても溜めても金は面白い（武玉川十）

借りても溜めても金は面白いやつ（武玉川十七）

というのですが、これでみると、前の二句が一緒にされて、錦浪さんの句になったようですナ。

迷亭 さっき言ったけれど、これは思い違いとか、何とかではなく、多少承知しながら、何となくそうなっちゃったというグースなんだが、よくある事なんじゃないのかナ。ボクなんかも

酔いざめの水に届かぬ手が寒い

って句を、つい此間まで自分の句だと思っていたからネ。

孝三郎 ああそれは珍茶の句だヨ。珍茶坊には、そういう句が多かったネ。

酔いざめの土瓶の蓋は鼻に落ち

もそうだが、うまかったネ。

唖三味 珍茶坊・孝三郎は紅ク

ラブ、そして珍茶・迷亭は高輪クラブと、どっちもつながりがあるんで、何となく句が似ているナ。

迷亭 うん、ボクもそう思うんだが、珍茶の句とボクの句は、よく混同されるヨ。

孝三郎 それは、一面にこういう事も言えるんじゃないかナ。自分の好きな傾向、好きな句は、どうしても頭に残る。おぼえているから、何かの時にヒョイと出る。それが混同のモトになるんで、古句を自分の句と思うんだって、それが同じだと思うがナ。

鞍馬 そうですネ。そういう事は言えますネ。その場合、古句は問題ではないでしょうが、現代人同志だと、先に句が発表されていなければダメでしょう。

迷亭 それはそうなんだが、懸賞屋でもない限り、好んで人の句は取らないからネ。

啞三味 自分の句を発表するという事は、要するに登録するわけなんだから、柳誌も柳人もみんなその気になってくれなくちゃいけないんだよネ。……では、この問題は、ここいらでいいでしょう。

＝古川柳味解釋の事＝

孝三郎 次は私が問題を提出しましょう。それは、B誌二月号の巻頭に出ている、Mさんの「古川柳の味」という論についてでなのですが、さしさわりありませんかしら？

迷亭 そいつは、かまわないだろう。厳正批判なんだから、ねエ鞍馬さん。

鞍馬 ええ、それは、少しもさしさわりありませんし、あれについては、私にも言いたい事があったのですヨ。

孝三郎 そうですか。それでは私から先ず言わして貰いますが、私はあの議論全体が気に入らないのです。ひどい論文ですよ。

鞍馬 第一、古句を引く場合はちゃんと出典を示して貰わんと困るのですヨ。然も、あの第一句

朝帰りだんだん家が近うなり

は、ひどすぎますヨ。あれは柳樽二四編に出ている句ですが

朝帰りだんだん内へ近くなり

が、本当ですヨ。

啞三味 そう、ボクもあれを読んで、変に思ったんだが、大体柳樽は江戸文芸でしょう。「近うなり」なんて表現は、しなかったと思うネ。そんな事、編集部でも気がつきそうなもんだし、校正子だって、直すべきだよネ。

孝三郎 あの論文を読むと、論じている事が、前後で異っていたり、草城の俳句を否定したり肯定したり、論旨もシリメツレツなんですが、特に古川柳の味と銘打っていながら、その解釈には、少しも現代的な所がないなど、言いたい事が多すぎるくらいです。

鞍馬 どうも、私としては言いにくい事なのですが、雀さんの事を書いた私のものを、巻頭にして欲しかったと思うのです。

迷亭 あれは、鞍馬さんが、少し自分を語りすぎているので…。

啞三味 ハハハ…。たしかにそうだナ。鞍馬さん、一本とられましたネ。それに、B誌としては、社の人でない人の追悼文で、巻頭を飾りたくなかったろうし……。

孝三郎 待てヨ。雑音が入りすぎるヨ。先ず私の言いたい事の第一は、古句解釈の心の問題なのですがネ。あの第三句の

押さえれば薄離せばきりぎりす

の解を、Mさんは「断念したゞリギリスが、突然ススゞから飛び出した時の、あっけない顔つきが目に浮かぶ、嫌味のない技巧の妙味に、表現の老巧さを思わせる」と書いていますが、本当にそうでしょうか？ これでは、三百年前の江戸人と、現代人の我々と、一歩もヘダタリがない事になるんですヨ。そうでしょう。

鞍馬 これは、柳樽五編に出ている句ですが、そういう解では、なるほどナットク出来ませんネ。

孝三郎 いや、私の言いたいのは、古句解釈の、そういう細かい点、いわゆるショウ・マッセツではないのですヨ。たとえ古句をゞンショウするにしても、それを現代人のイブゞの中でする。何て言うか、私には上手に説明できませんが、この句を「手を離したらゞリギリスが出てビックリした」と解するのでは、三百年前の江戸時代と明治の久臭伎時代と昭和の今日と、何の違いもない＝言うならば「時代の感覚」がない＝と言う事を、私は切に言いたいのですヨ

鞍馬 待ってください。それでは古川柳解釈が成り立たなくなるのではないでしょうか？

孝三郎 いや、何でもカンでもそうしろと、私は言うのではないのですヨ。どうも、変な言い方ですが、歴史的裏面のある句まで、その内容を現代的に解釈しろと言う意味ではないのです。例えば、柳樽のショッパナ（第一編の巻頭句）にある

五番目は同じ作でも江戸産れ

なんて句を、現代的に味わえと言ったって、出来ない事でしょう。

鞍馬 そうすると、古川柳鑑賞に、二ゞ通りのミチがあり、句に依って、鑑賞しかたを変えろ、と言う事になるのですネ。

孝三郎 弱りましたナ。古川柳研究家には、目の仇にされそうな言い分で、一方には誤解されそうな議論ですが、私はそうあるべきだし、もっとこの議論を押し進めれば、その鑑賞の仕方は、二ゞ通りあったって、三通りあったっていい事になると思うんですがネ。判ってくれますか、私の言い方、と言うより考え方ですが、我々は古人の言おうとした事を、現代の言葉で受け取ってやる。それでこそ、古句が現代に生きるのではないかと思うのですが、諸君はそうお考えにならんですか？

鞍馬 どうもむずかしい問題で古句研究家の私としては、一概に賛成できませんが、あなたの説が判らないわけではありませんヨ。

啞三味 ボクは、その説には賛成だが、それを全面的に、現代柳人に押しつける事は、どうかナ。

迷亭 それは、そういう考え方の人もあるという、一つの課題として、柳界へ一石を投じただけで今は別に結論を求めなくたっていいんだろう。

啞三味 では、この問題は、この辺で打ち切りとしましょう。

（ソニー・テープ・レコーダー使用　父責　在・高須崎三味）

後家さんとチョンガー

東野大八

このほどある知人に会ったら、Tさんの消息をきかされた。Tさんといえば、大陸の川柳人なら大抵の人は知っている名だった。殊に奉天川柳会の同人だったご連中なら、ああ、あの人か、とすぐ思いうかべられる女流川柳人だ。

私がまだ二十歳台で独身、血の気の多いころにこのTさんと出あった。というより社の仕事で会いに行ったのがこの人を知るきっかけになった。〃秋のこころ〃という一文が投書原稿の中にまじっていた。

瀋州で実兄が例の保安隊の反乱で殺され、そのあによめと奉天弥生町近くの家に住んでいる。私の夫は胸を病んで年若くして逝いた。その一人の子を抱えて実母と二人暮しのところへ、あによめがまた一人の子を抱えてやってきた。女だらけの世帯に、冬の夜となればぐちばかり、みんな未亡人なればこそ……。

「貴女はいい、病気の夫の手をにぎり合っては話ができたんだからその点、わたしは……」

とあによめはよくそれをぐちるのである。

—冬の夜の長さ寡婦と寡婦と居る

という句が、そうした話のあとについていた。二十歳台の後家さんとは勿体ない、とこんなことの好きな社長が一ぺんにこの文章にイカれて、どんどん書かせてみよう、筆も才気にあふれている、ということになった。

実物のTさんに会ったとき、私は一目でこいつはスゴイ、と率直に思った。若々しい緑の黒髪って奴を首の辺でバサリと切り、細面の顔は九条武子式の整然とした貴族風な美貌で、エンジがかった眼鏡をそこにかけていた。受け応えもキリリッとして、小柄なその身体にはピチピチした精気があふれていた。

「後家さんというより才女の見本みたいで色けどころかカミソリみたいです」

と私は社長に報告した。

「そいつはまずいな。女はいろけ第一でなくちゃあナ」

と社長もこれにはヘキエキした ようだった。

社で出したこともない原稿料や社長のポケットマネーで結構な反物を私はよくTさん宅へ運ばされているうち、私は男気のないこの一家のいわば一番頼りになる話相手になっていった。チョンガーの若さというものは、おばあちゃんや子供のいる一家の食事に坐り、二人の年ごろの後家さんと話をしあう、これはモーパッサンの小説ではないが、青春の飢餓を癒やすに申し分ない環境だった。

私が川柳をやるのでTさんをおだてにおだててはよく句会に引っぱり出した。年輩者の老人やいとムキッけき野郎どもの中へTさんが初めて顔を出したとき、句会は一瞬騒然となった。それほど彼女はパッとした若やぐ女性の魅力にあふれていて句もうまかった。

—頬紅は目立たせまいぞ春鏡

などは故井口呑湖さんの激賞句で宇和川木耳さんも、得がたい閨秀作家だ、とベタぼめだった。

あによめの子供さんが大病になった。私は頼まれてその子を抱きずめにして九州の病院まで運んであげた。そしてまた通州事件の何周年記念日かに当る日は、社用をかねて現地へ訪れ、兄さんの回向かたわらのルポを書いてきたりした。この親密さに、いろいろのことを私はTさんとの間について柳界や友人知己からいわれ、冷やかされもしたもので、「大陸川柳」では「大八ついに恋をした」なんてゴシップが書かれたものだ。

しかし、私はついにTさんに指一本ふれず新京へ転任した。そしてTさんも奉天放送局のある課長さんと結婚。ついに今日までそれっきりとなってしまった。

「東野君、どうもなかったってそりゃホントかね」

と社長が後日私をよくからかったが、実際の話、私はTさんという女に人間的にもついてゆけなかったのである。

「利口すぎてメガネをかけたあんな女は大キライです。しかも私より一つ年上でこっちは初婚なんですからネ」

私はキッパリそういってみせて明治の書生っぽのようにふんぞり返った。正直なところ、Tさんと二人で酒をのんだときなど、よく若気の至りでムラムラときたもんだが、そのあとはすぐ金ですむところへいってサッパリして寝た。それをちゃんとこのTさんは知っていたのである。

「どうしてそんなムリをするの、およめさんはもらわないの」

とこの人は憤ったような哀れむような眼つきと言葉でよく冷やかしたものだが、そのとき私はこうハッキリと答えておいた。（まちがわれると困るから—）

「私の理想の女性はおふくろです。おふくろの持ってる何かがなくては、ボクのおよめさんになる資格がないんです」

まったくの話、私は娼婦の一人一人と若さの始末はキッパリとつけていた。なかにはオヤと思うはどのできたご婦人もいたけれどもそのたびごとにかき抱くその肩ごしにはかならず、私をどこかでまっている真実の女性の姿をまぼろしのように空間に見出した。

私のおふくろは、大陸で成人して立派に独りになっている私に対し、ただ一言こういったことがあった。

「向うでいい加減なヨメはんはもらいなや。一生死ぬまでいっしょに暮らす女やという大事なことを忘れたらアカン。お前がホレるよりホレさすんや、男前のオチるお前やから、その点景より中味を買ってくれたわけやからマチガイなしや」

結局、Tさんは私にホントにホレてくれなかったからやめにしたのである。時効にかかったいま白状するとこれが最大の原因なのである。

「Tさんがおよめさんになった課長さんは眼を思って失明一歩手前なんですがね、入院してると見えるんだが時折家へ帰られると見えなくなるんです。田村さんのサービスも罪なことですね」

とある人が皮肉にこういってイヤらしい微笑をうかべた。生きる便法で男と女が退屈まぎれにどうしあうか、というひとときの兼ねあいで、よくぬきさしならぬことになるが、これで人生すべてを決定づけられるということはおたがいに哀しいことである。その点、私はうまくいったという結論になるそれを考えると金ですむ女のいない今日の若い衆はせんじつめるとお気の毒だ、というほかはない。

江口の遊君

冨士野鞍馬

二十五の内でしれよいおん姿
（タル三一）
二十五の内に傾城一人見え
（〃 三一）
二十五の内から一人八文字
（〃 三三）

これらの句に詠まれている「二十五」は、仏法でいう二十五菩薩で、そのうちの普賢菩薩が、江口の遊君、妙（たえ）に化して出現した。という伝説を詠んだのである。「八文字」は、太夫が八文字を踏んであるくので遊君のことである。それでまた、

遊女とはあんまりはでな化身也
（タル二六）
内心は菩薩外面は遊女也
（〃 五七）
江口の太夫内心も菩薩なり
（〃 一六）
江口にて仏も一度ひちりめん
（〃 三五）
ふげん様一たびひちりめんをしめ
（〃 二五）
緋縮緬けだし普賢の済度なり
（〃 六七）
現じょうこそあるべきに遊女なり
（万 安 五）
泥水に咲くは江口の運なり
（タル七八）

などと詠まれ、緋縮緬の湯文字は遊女のしめるものである。それで、普賢菩薩もそれをしめたのであろうと洒落ている。

江口の里というのは、淀川の支流、神崎川の川口にあり源平時代には、船の出入もはげしく、にぎやかな港町で、遊女屋が軒を並べていた。「梅ヶ枝の手水鉢」の梅ヶ枝もこの江口の遊女であった。

そこへ出現した、普賢菩薩の化身である太夫なら、

江口のおいらんこっちから拝みんす（タル一〇五・一五三）
江口の遊女ありがたい手管也
（〃 五〇）
普賢の開帳冥加金として三分
（〃 二八）
普賢様凡夫へ向きのよい済度
（〃 二五）
凡人へ普賢の済度もってこい
（〃 五〇）
普賢様わるく変じてやたらされ
（末 三）

と、凡人には、まことにありがたい済度であった。三分は吉原上妓の揚代である。

江口の太太方便をいっそつき
（タル二四・拾三）
方便に江口の客はかけられる
（タル四六）

それで、嘘をつかないで方便をいった。仏の方便は凡人を大悟にみちびくという。

江口では仏と一つ鍋も喰ひ
（万 安 四）

大勢の遊女は、仏と一つ鍋のものを喰ったことになる。

江口の遊女持りやうのちぢれ髪
（タル二五）

仏様の髪はちぢれてる。ちぢれ髪は味がよいというのに洒落である。

この有難かった化身の遊女、妙は、やがて普賢菩薩にもどり、六本牙の白い象に乗って、眉間から光りを放って消え失せた。という伝説になっているので、これをまた、川柳はおもしろく詠んでいる。

普賢ともならう四五日前にかひ
（タル 初）
うらに来て聞けば一昨日象にのり
（拾三・タル八六）
白象にのるまでおもしろい化身
（タル三二）
白象に乗って江口を断落し
（万 明 三）

象に乗るまでは遊女であったから買うこともできた。「うら」は二度目である。

饅頭を普賢も象に度々見られ
（タル一〇一）
象に乗るとて饅頭を普賢出し
（〃 九四）
象くしゃみふげんばさつをはねとばし
（〃 七九）
江口は白象糀町は鼠
（コリ 三）

象の食料まんじゅうにかけて、ヘンなところを詠み、山王祭の象と比べてもよまれている。

おいらのは象に乗ってと洗いい
（万 安 六）
天を仰いで江口の禿は泣き
（〃 安八）

その妙女についていたカムロも、ついでに詠まれている。

この伝説は謡曲「江口」になっていて、その終りに

「思へば仮の宿に、心とむなと人をだに、諫めし我なり。是までありや帰るとて、すなはち普賢菩薩と顕はれ、船は白象となりつつ、光とともに白妙の、白雲に打ち乗りて、西の空に行き給ふ。有り難くぞ覚ゆる、有り難くこそ覚ゆれ。」

とある。

もう一つ別の伝説に、ある時西行法師が、天王寺へ参詣しようとして出掛けたが、雨が降ってきたので、江口の里の遊女屋に雨宿りをたのんだが、きかなかったので、

肝疾患・疲労・二日酔
★総合強肝剤
ウロコ印
武田薬品
リポコール
（12種の成分を配合）
20錠・50錠・100錠

世の中を厭ふまでこそ難からめ
仮の宿りを惜しむ君かな

と口ずさんだ。それが、遊女妙にきこえて、

家を出つる人としきけば仮の宿に
心とむなと思ふばかりそ

と詠んで、西行法師を招いた。

そこで、一時雨宿りをしてる間に西行は、一条の法話を語った。それを神妙にきいていた妙女の姿は、普賢菩薩が仮に出現したようであった。という話がある。これは長唄「時雨西行」になっている。

村雨にとめぬ江口の普女人
（夕々一三三）

西行は女郎に一度手をあはせ
（〃 四八）

西行は初会かへしの歌を取
（〃 一〇七）

等と、それも川柳になっている。また、

象は傾城唐獅子は陰間なり
（万 安 七）

文珠よりいきな所は普賢なり
（〃 明五）

唐獅子の方は象はど粋でなし
（万 安 四）

知恵はあるけれど象はどしゃれはなし
（〃 安七）

と、知恵の文珠菩薩と比較した作もあり、菩薩にも気々女郎だの官女だの
（夕々二三）

は、観音の化身といわれた紫式部と並べている。なお、

遊女にはぼさつ下女には如来也
（夕々四一）

普賢は遊女大日は下女と化け
（〃 七九）

大日は真岡普賢は緋縮緬
（〃 二七）

と、大日如来が、下女お竹に化身したことも併せ詠まれている。

短歌と川柳

―相違と共通点

八木扇天郎

然るに其の次ぎの「古今集」時代になると俳諧歌なぞは一として見るものが無いのである。八代集中にも、僅かに「金葉集」が、浅薄極まる駄洒落の

卯の花は皆白髪とも見ゆるかな賤の垣根はとしよりにけり

なぞと云う、俊頼朝臣と年寄とをヒッカケた位の洒落を軽妙としていたのに過ぎなかったけれども、此集は比較的滑稽趣味に富んでいるのと、其に従来継歌と唱えて、日本武尊の筑波の連歌より始めて「万葉の家持郷と尼法師の連歌及び「後撰」「拾遺」等にも見えた上句下句を別人で咏み合うのが、「金葉」になって始めて連歌と称せられて、其連歌の収録されたのも一番に多いのである。彼の和泉式部の有名なる連歌

千早振るかみをも足に巻くものかこれをぞしもの社とは云ふ

なぞの類で其連歌から、殊に、滑稽的連歌から後世の俳句は孕胎し、川柳の本体たる前句附も、此滑稽的連歌から其分流をひいているのであるが、もともと、短歌は花鳥風月恋無常であり、川柳は、主として人事を諷詠するのであるから、人のよく知っている歌

人はいざ心も知らずふるさとは花ぞむかしの香ににほひける

の如き、貫之の鋭い皮肉の歌であっても、川柳ほどの鋭さはないし

わが宿の花見がてらにくる人は散りなむ後ぞこひしかるべき

の躬恒の軽い皮肉、諧謔の歌があっても、川柳の如き切実さは無いのである。しかし、短歌には短歌のよさがあり、川柳には、川柳のよさがあるのは勿論であるが、注目すべき事は、短歌にも川柳の如く、省略法を用いている事である。在原業平の

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

は、「月は昔の月ならず」「春はむかしの春ならず」で第二句第三句の用いざまを省略した句法であり、

よそに見て帰らむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも

と、遍昭独自の僧侶らしい軽妙洒落のうちに、「はひまつはれよ」と漫人法を見るのも、短歌と川柳にも同じ叙法であり、

小沢芦庵の云える如く、短歌は「思ひよれる一言を、五句に述べて言へる外なし、汝たちが今、をはぎを摘むという、これ一句の歌である。それを五句にのべて云うまでである。仮に、いましの心になって五句になして見せむ。とて

雪きえてのどかになれば山里のかき根にもゆるをはぎをぞつむ

かく思う心に法なく、言う詞に法なきもので、「ただわが思へる事を、聞ゆべきにつけて、さる心なめりと聞ゆるが法なり」と説き「雪きえて、のどかになれば―」とお膳立して、さて「かき根にもゆる――」とひき出して来るところに、既にひとつのかたがあり、法があるのであると、

川柳も全じではないかと思う。三句から成る川柳句も、結局全じ一句を凝めているのに過ぎないのではないか。

しかし、それが秀歌となり秀句となるのは、要するに、自然と人生の描写、自然と心境のマッチ、社会性の矛盾の対遮等、奔流する感興、その情熱の高度が高ければ高い程、秀歌となり、秀句となるのではあるまいか。技巧、表現、もとより、肝要な事ではあっても社会事象と心境との、強度なる交叉が、人を感動せしめる歌や、句ではないかと思う。安易に作られた句は、安易としか響かないのではあるまいか。

人類は悲しからずや左派と右派
俺に似よおれに似るなと子を思い

の名句が、永劫に、人の心を打つのも、万葉の昔、狭野茅上娘子の情熱の、エロス（性愛）、エトス（倫理）の奔流する感動の表現が、結局人を魅力するのでは無かろうかと思う。玉斧を乞う次第である。

（完）

饒舌の4B

麻生路郎

★宿命

たぬきして
とぼけて
まぬけて
おもしろ
おかしく
一生を暮らしたい

と云うハガキを滑後の狸通さんからもらった。昨年のことである。こりゃ、面白いと思って、早速凸版にしたが、執務多忙で、これをカットにして何かを書く時間がない。ついついそのままになっていた。しかし、このカットかカット箱に残っている以上、何かを書くべきであると、私のアタマのどっかから絶えず催促する。そこで、とうとうその何かを書くことにした。

大たい、私は狸通さんには一べんも会っていないが、一べんぐらいは会っているような気がしてならない。と云うのは三十年も、もっと前になるかも知れないが前田伍健君の案内で、狸通さんの家を訪ねたことがあるので、その錯覚からかも知れない。その時は狸通さんは留守だったが、伍健君が主じに代って二階へ案内し、沢山な狸の蒐集品を見せてくれた。軸ありの額あり、陶器あり、あらゆる狸族が二階の間をブチ通してかざられてあった。その当時の狸通さんは銀行の重役をされていられたように記憶しているが、その点はハッキリしない。それからずっと後に本誌で狸々を出したこともあり、伍健君等の狸に関する寄稿や揮毫を掲載したこともあるので、古い読者ならご存じであろうと思う。それやこれやで狸通さんとは親しく文通をしていたが、戦後はどちらからともなく音信不通になっていた。ところが、昨年伍健君が亡くなってから、再び文通がはじまった。今年の新春には狸がのれんの前でソロバンをはじいているPR賀状が届いた。道後温泉前で、趣味と潤いの店「狸のれん」を経営されているらしい。そのハガキに「牛を飼う主じは牛の寝正月」の一句がそえられていた。どこまでも狸通さんらしいと思った。ウラを返すと、(実際は表であるが)「小生待望の還暦をむかへ一層のそりと相成候宜敷御願申上候」とある。昔の記憶だと、狸通さんは私よりも年長者なんだろうと、勝手にきめこんでいたが、ようよう還暦を迎えられたことになる。これではたぬきねして、とぼけて、まぬけて、おもしろ、おかしく暮らす余地はまだまだ充分にあろ

續 川柳書架 (7)

川柳小話集

(比企蟬人著)

★本書の「まえがき」の一節に、「この本は、古川柳研究会の末席を汚す筆者が敢て不敏をかえりみず、古川柳のPR運動の一つとして、できるだけ多くの人に古川柳と言うものを正しく理解し認識していただきたいと思う念願から、おもしろく読んでもらえるようにとも考えて、編んだものである」云々。

★目次概容。

女ごころ・男ごころ・春夏秋冬・そのおりおり・飲む・遊ぶ・打つ

★昭和三一年十一月二五日発行。定価百六十円。一八六頁。東京都文京区森川町七〇高文社発行。

★著者は東京学芸大学教授。古句研究家。

川柳句集 三人

(水客・紫香・潮花著)

★巻頭には「序文にかえて」と題して丸尾潮花・黒川紫香・正本水客の全貌を紹介するために嘗て「川柳雑誌」に発表した「潮花を語る」(昭和三一年十二月号)「紫香を語る」(昭和三二年四月号)及び「水客を語る」(昭和三二年六月号)の三つの座談会記事を採録してある。

★目次では

正本水客作品(箸箱・風うごく・ひとりの眼・女なる・影法師・旅から)黒川紫香作品(親鳥小鳥・いのちあるもの・旅ごろも・すがた・山影の村・わだち・とじ紐)丸尾潮花作品(白い焔・ひとり・花櫛・忘却・家姪・ざくろ・かき船・流れ)

★昭和三十三年十一月三日発行。定価二百円。B6版一九〇頁。発行所大阪市住吉区万代四五丁目二五川柳雑誌社。

★本書は路郎門の逸材三人、しかも子どものころからの友達三人が三十年来の作品集である。

川柳集 お日さまお月さま

(中村晴魚著)

★巻頭には岸本水府氏の序文がある。

★本書の「あとがき」に

……川柳入門十周年でもあり、ここで一つ自分の作品を遺こして置きたいという気が湧いてきたので、とりあえず三千句近い中から六六六句を撰らんで世に問うてみた。(以下略。)

★一九六〇年二月八日発行。定価二五〇円。B6版一六七頁。発行所和歌山市東釘貫丁二和歌山番率川柳会。

う。折角ご自愛が願いたい。

前掲のカットでは、狸がソロバンを枕にして、云いたいことを云うているが、この言葉は狸通さんその人の言葉であると同時に多くの人間の欲求を代表した言葉でもあると思う。

しかし私は少しく違う。私は全然たぬきねの出来ない人間である。相手が真剣であろうとなかろうと、とぼけられない人間である。従ってみすみす損な立場に立たされる場合が多い。その点から云えばまぬけた人間だとは思うが作為的にまぬけるなんて、到底出来ない人間である。では、おもしろおかしく暮らしたいとは思わないのかと云うと、そうでもないところに僕が生きてゆく上のムジュンがあるらしい。

私は正直に暮らしたいと云って真ッ直ぐに歩いて、ナンボ損をするか判らない。お互いに仲よくしたいが、変な妥協はしない。なんでも筋をとおそうとする。ムチャな奴にかかると、そこに折り合いがつかない。いつかは判るだろうと、右と左に別れる。そんなわけで、おもしろおかしく一生を送りたい念願は狸通さんと同んなじなんだがその道程では絶えず難行苦行をしているようだ。しかも、そうした難行苦行にブッ突かって行くことを楽しんでいるようでもある。だから、狸ねもしないし、とぼけもしないことになる。どんな問題にブッ突かっても、先ず筋を通そうとする。そこに難行苦行がはじまるが、これは私の宿命だと思って諦めるより仕方がない。

★包装紙

私の机の上に、金沢の北国新聞がのっている。その市内版の一ページに「真心をつつむ包装紙」という大見出しで十五軒の包装紙を写真版にした連合広告が掲載されている。従来店舗のマークの連合広告は、どこの新聞でも、よく見かけるが、包装紙の連合広告は珍らしいというより私としては見初めだ。気の利いた企画だと思った。

昔は、三越の包装紙で包んだ買い物は電車に乗っても、わざと人の眼につくように膝の上に載せていたものだ。そして多くの乗客の視線が、その包み紙と、持ち主の上にそそがれたものだ。持ち主の奥さんにとっては、それが一種の誇りでもあったが、近ごろでは、そんな誇りは全然消えてなくなったとも云い切れないが、ウンと稀薄になったと思う。その代りと云ってはおかしいが、大会社に勤めている青年社員（BGなども含む）が会社のネーム入りの大きな状袋をコレ見よがしに膝に乗せているのを見かけた。これは会社の宣伝ではなく、オレはこんな大会社に勤務しているんだという一種の誇りのあらわれである点、デパートの包紙を膝に乗せているのと同じ心理だと云っても大して間違いはないだろう。しかし所うした現象も最近ではあまり目立たなくなって来た。こんなことも一種の流行だと云えば云えないこともないが、大して効果がなくなるか、そうしたことである程度の満足感が充たされると、もうやらなくなるのであろう。

★ピカピカの本を見て

一寸のひまをぬすんで、デパートの書籍部をのぞく。見渡すかぎり赤や青で、まばゆいばかりの色彩に眩惑させられた。私のような老読書人にとっては本と云う感じが少しもしない。昔、松屋町に赤本屋と云われて、本とおもちゃのあいの児のような本を売っている本屋があったが、近頃の本屋でも、デパートの書籍部でも、この赤本屋の本の感じである。

戦後、本を読む階層は殖えたらしいが、レベルは低下したのではなかろうか。日日、新聞紙上で出版広告は見るが、マジメな本は大して売れないのであろうか。シッカリした装幀の本は手にとりあげられないのであろうか。中味とは程遠い、けばけばしい装幀の本さえ見うけられる。いくら売らん哉の時代でも、もう少しなんとかならんものかと思う。

現代柳人録

（一）姓名（二）雅号（三）別号（四）現住所（五）生年月日（六）出生地（七）職業（八）電話（九）自信の句一句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配偶者の有無（一二）川柳に手を染めた年月

（59）西田放亭

（一）西田芳彦（二）放亭（三）芳穂（四）熊本市下通町三の七一（五）大正5年12月4日（六）長崎県佐世保市熊野町（七）食堂自営（八）――（九）**不遇なる詩人とやらの夜の散歩**（一〇）作詩（一一）有（一二）昭和二十三年八月

（6）奥津啓一朗

（一）奥津鉄也（二）啓一朗（三）痩松亭（四）東京都目黒区芳窪町四一（五）大正3年6月7日生（六）朝鮮京城府（七）東京電力社員（八）――（九）**いい抜けるすべもあるのに妻は詫び**（一〇）なし（一一）有（一二）昭和四年秋

（61）田垣方大

（一）田垣陸朗（二）方大（三）――（四）岡山県倉敷市水島寿町三丁目三一（五）明治44年1月17日（六）三重県伊勢市大湊町六三五（七）会社員（八）――（九）**百貨店では妻君が先になり**（一〇）謡曲（観世流）（一一）有（一二）昭和二十五年五月

（62）大高角嵐

（一）大高純一郎（二）角嵐（三）誘蛾洞東泉（四）大阪市住吉区西長居町一（五）明治44年11月10日（六）東京都中央区京橋岡崎町（七）会社員（八）――（九）**天を指す神父のギャグが臍を打つ**（一〇）狂言・朗詠・茶道（一一）有（一二）大正十二年十月

ウルトラニツサン
万年筆専用
専売特許
ニツサンインキ工業株式会社
大阪市天王寺区勝山通四丁目二六
電話天王寺㊼7977

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

くらしとは今日も乾いた風の音　熊本市　田口麦彦
マスコミへただ従順な輪転機　同
再会をした日の友も酒臭し　同
札束をにぎればぼくも保守の貌　同
図書館の椅子空想もみどりいろ　同
予備校へ颯爽と来る次男坊　同
親切でしたわけでないアーケード　同
貧乏長男まだ大安に縁がなし　同
テロだ左翼だセックスだと母を振りまわし　兵庫県　遠山可住
風邪ひいて寝れば我が家のスキャマ風　同
早期米播いて花見の服を縫い　同
温くおます雨を喜ぶのも二月　同
ブタ箱へ部下を送って当選し　同
茶碗破れた音は客間にまでひびき　岸和田市　内藤きさ子
折伏の部屋灯をつけぬまま終り　同
山茶花を散らし嫁の荷運び終え　同
鏡台へ顔も心も老けました　同
春の来る唄がやっぱり嬉しうて　同
甘く見られぬように叱る叱りよう　鳥取県　鈴木村諷子
須らくネオン遠くで眺むべし　同
お経より僧の若さを見ていたり　同
老も春両手で天を突いてみる　同
初恋を笑って話せる年となり　愛媛県　竹田青園
エプロンへかくしてくれるおつき合い　同
一人で暮らせば一日長いもの　同

伍健先生一周忌

御写真は笑顔のままで一周忌　同
教え子の恋へ嫉妬をするも年　大阪府　高橋尚史
グリル経営老母もドレス着るという　同
宮さまの手植の松という細さ　同
ポマードの香りに父の若さ知る　同
結婚の祝電はスキー愚連隊　貝塚市　護川梢月
とまり木で食べたおすしの高いこと　同
蜘蛛の巣も絶安親しきものと見る　同
サロンパス貼ってジャズだのマンボだの　同
先駆けの桜乙女と写される　愛媛県　大垣たもつ

苦笑善哉

ある川柳大会で

木山遠二

私の所から十二里離れたO市のS新開社で毎年一回、川柳大会が催されます。私どものグループからも、二三名位は大抵出かけることにしています。

会が済んでの帰途、同行の柳友に対し、私が必ず使う台詞が二通りあります。

その一つ

「今日のような大会には矢張り出るべきですね、成績は別として、あの雰囲気に浸るだけでも大きな収穫じゃあないですか」

もう一つは

「何しろ選者が一時間かそこらに千に近い句を見るんですからね、無茶ですよ、録な選が出来る筈がないです。其場限りのパッとした駄句が景気よく抜けて見たり、本当に味のある佳句が没の憂目を見たり、阿呆らしいですよ、だが、まあまあいいとしましょうよ、一年一度のお祭騒ぎと思ってね」

前の分は成績優秀だった柳友に対し、後の分は全没でしょげてる柳友に対しての台詞なんです。ど

思想は左嗜好は右になる療所　同
特売というまい妻のはしゃぎよう　同
見るだけで楽しいスタイルブック積む　同
労働は神聖なりと生活苦　大阪市　山田　蛙水
神経痛忘れるほどのいい天気　同
人形のケースを褒める妻の客　同
更年期妻は毛糸のパッチ履き　同
墓の守りも負担になるほど落ちぶれる　美祢市　安平次弘道
工場誘致お寺さんまでが本気　同
電化して姑の発言権が減り　同
予備校の広告春を暗くする　同
十七歳だけどうちの子牛を飼い　岡山県　太田　蓑流
誰か来んかいなこのわた届けられ　同
ねこやなぎもうふくらんだ釣天狗　同
わん曲の脚どこへでも和服着る　大阪市　藤冨　淀月
標札もあきれるほどの移転好き　同
鉄筋になって電柱親しめず　同
ヒナ人形飾るウィンド壮丹雪　兵庫県　河原みのる
つまり生きているのへ聴かす弔詞　同
春が来るまた斗争の春が来る　同
おいしかった西瓜の種を拾っとき　兵庫県　波多野　美由起
片言の通訳にママ呼び出され　同

弟子入りをあげ底持って頼みに来　同
抽出しへ子供は夢を仕舞い込み　宇部市　平田　実男
日曜の朝は起さぬうちに起き　同
恩給が老いて子供に従わず　同
叱られておれば霜やけかゆうなり　高知市　須藤　俊江
暖房のかわりおでんの湯気を立て　同
奥様はお暇指輪の掃除する　同
信仰の自由は先祖を焼き捨てる　笠岡市　出原　真奇
菜っ葉服ぬいだ非番に風邪を引き　同
歌に首振るほど鍬を振らぬなり　同
茶の間までテレビが香具師を送り込み　京都市　都倉　求女
金一升の空地が一面ゴミ捨場　同
カレンダー妻には妻のしるしあり　同
パチンコで今日のレジャーは終るなり　西宮市　末沢　花美
お見合の不満は母へ向けられる　同
よくもまああんなに笑える回復期　同
魔女という顔はなるほど美しき　兵庫県　常岡　孝風
詩人今日もかゆをすすって詩魂冴ゆ　同
仲裁者顔をたてるに窘らされ　同
テロはテロなりの理屈を吐く怖さ　羽曳野市　板倉天悟空
金儲けが趣味の男といて寒し　同
即席のラーメンまずし妻の留守　同

ちらともおべんちゃらではない、真実私はそう思うんです。だから云ってるんです。

選者がずらりと正面に並んで居ます、その横っちょのテーブルに沢山な賞品が並べてあります。

司会の人が出て、

「……受付で句箋をお渡しいたしましたが、どうぞ良心的に投句をお願いします……」と云って引込みました。ハテナ何の事だろう、と考えていると又出て来て「皆様には句箋の裏に是非記名を願います。無記名のものは残念ながら無効といたします。」ハハン成程、一人三句の制限を超えるなと云うんだな、とそれでヤッと合点しました。尤もなことだよ、堂々とやらなければいけない。私はこの司会者に好感を持ちました。

ところが其夜寝苦しい床の中で「待てよ、今日の選者の中には俺

心斉橋筋大丸前
電話㉗三三四四番

自動車自動車此処は紙治の泣いたとこ　大阪市　木村　草々
父ちゃんに云うぞと末の子は強い　同　同
百貨店妻の機嫌はパパパパと　同　同
卵酒とは幸運な風邪を引き　若松市　三上　春雄
八百長の時計で起す母性愛　同　同
人生を意気に感じた二日酔　同　同
年賀状皆しあわせな人ばかり　布施市　久米奈良子
子に飴を持たせたウカツ痛み入り　同　同
どの神も恵方にされたお正月　豊中市　土井　北桐
回札に若い若いと見直され　同　同
なんの鈍かろ女の名前すぐ覚え　八尾市　吉田　博一
いじらしいこと書いて死に急ぎ　同　同
旧正の実家へ翌でなく座り　仙台市　平野　光道
教えられた通りウソ云い試験すみ　同　同
くよくよするなと友は波にのり　竹原市　山内　静水
留守という受話機にバイの音が入り　同　同
痔の手術妻は喜ぶ酒を止め　児島市　伊丹柳瓢子
見舞客見舞いの品でもてなされ　同　同
笙の音に式場の空気清められ　布施市　坂上山椒坊
内職にテレビそっぽをむかれてい　同　同
停年は近し自動車免許とり　松江市　岡崎　祥月
退屈のない内職の針運び　同　同

鶏のとさか真赤な霜の庭　玉野市　小谷　仙山
運の良い人だと後妻美しい　同　同
少女の眼付きで男貝拾い　倉吉市　渡辺　乱坊
バスの揺れ胸の思いもみんな揺れ　同　同
盆栽の名人と云われ弟子も出来　兵庫県　岩井　千甫
濡れタオル下げたままでお目出度う　同　同
経済を離れて惚れる不仕合せ　加賀市　杉浦　酔年
塵一つない部屋で冷たい風通り　同　同
酒の座に種も仕掛けもない手品　兵庫県　沢田　恵甫
雪の事故期末手当が案じられ　同　同
爪揚枝くわえた人が支払う気　大阪市　加川　大芽
啄木の母のかるさと同じはは　同　同
末っ娘はさめざめと泣く型でなし　鳥取市　近藤　昭夫
KKにしても苦しい資金繰り　同　同
世の波に負けまいとて法螺も吹き　青森県　木村　凉人
長生きのおかげ電気で火葬され　同　同
全学連ダメよと坊やのおむつ更え　伊丹市　小川静観堂
また目刺焼くのか嫌いやないけど　同　同
新世帯婦唱夫随で鬼は外　大阪市　本村　文福
乗り降りに斗志を燃やしラッシュアワー　同　同
家計簿をひきしめ家のドル防衛　貝塚市　杉本　一鶴
肉体美豚の値段で見積られ　同　同

川柳雑誌社特製
書きよい　美しい
投句用　柳箋
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料（一冊分）八円

の知合いは一人も居なかったぞ。句箋の裏に記名させるなんて確に間違っとる。大体投句者を信用しない癖に選者だけを信用するなんて不都合だ句会者の片手落もひどいぞ。馬鹿にしとる」と気が付きました。

「およしなさいよみっともない。全没だからって、そんなこと考えるのさもしいわよ」と家内が申しました。

句会の席で顔見知りと出会ってグッと手を握るのも嬉しいが、未知の柳友と席に並ぶのも、また愉しいものであります。私の傍に若いしゅうの生きのいいのが、四、五人陣取って居ました。中の一人が

「駄目だっ、このセンセイの選に俺の句は抜けっこなし……」

いきなり其場へゴロリと寝転んでしまったもんです。吃驚しましたよ。その先生の披講が、だんだんと進んで、ついに最後の天の句を聞くに及んで私は「この苦いしゅ、一寸不作法者だが憎めない男

とっくり思案しとけと飲みに出る　京都市　大久保和三郎

民草をストと資本が踏み躙り　同

アンテナの数読みながら麦をふみ　兵庫県　斎藤たけお

成人式帰りにライター買うて去に　同

法螺の音に護摩一段と燃え上り　愛媛県　片上　光福

お金ではままにならない子の気質　同

小遣いも一応妻の手をくぐり　和歌山県　木下　一休

淋しい日沈めばコケシまでしずみ　同

良いことは神のお蔭と云う信者　須崎市　高橋　蟠蛇

膝枕させてアパート借る話　同

お嫁さん見に来た娘からかわれ　愛媛県　河本南牛子

氏神と墓も軽んじ新体制　同

足腰が痛んで冬の長い事　西宮市　樋口　寿栄

雪よりも炬燵の欲しい年になり　同

勧誘をことわりながら障子貼る　七尾市　松高　秀峰

雪除けをいい運動といい身分　同

あられもないことだとバレーわからない　滋賀県　土守　蜻蛉

元の娘にして返せとは別れぬ気　同

温泉を巡る労組の委員会　笠岡市　谷本鈍愚坊

肥桶が肩に喰い込む麦相場　同

毛皮着た女をまじえ梅さぐる　芦屋市　里田一ン十

寒釣が場所を替えると鳥が翔ち　同

背の君の好みで眼鏡かけずおり　西宮市　藤本　晴暉

銅像で睨みを効かす前社長　同

娘もう夫操縦法も読み　竹原市　杉原　愛鳩

宴会で踊るけいこに金をかけ　同

聴診器がっかりさせぬ嘘も云い　津市　嶋野ひろし

失業の昼飯を抜くパチンコ屋　同

鐘二つ望みがあるとおだてられ　山形県　菊地　白葩

もめているそばで娘はガムをかみ　同

腹割って話せば握手求められ　八戸市　狄守　和穂

橋の名を読んでわびしい一人旅　同

畳屋が来てよろこびの藁ぼこり　大阪市　堀　風船堂

湯をかけて出来る料理が世にはやり　同

子供までラジオでかせぐ世の流れ　大阪市　稲森けい女

一九三七四の予算はとれどもめっつぴ　同

天引きされて行楽の夢を持ち　愛媛県　村上　竹生

ペン習字屋へ通うたり妻若し　同

誘惑に打ち勝つ襟を高くたて　兵庫県　北山　越山

牡丹雪株も上っている暮し　同

決定へ受け取り方がみな違い　下関市　藤田　雪峰

何負けるものかと年令の差を忘れ　同

惰性とは蛍の光窓の雪　大阪市　木村　太郎

玉突の姿勢流線型になり　ホノルル市　並木東田楼

だナ」と見直しました。

同病相憐むとは名言ですね。

句会の事は一カ月も前からわかっていたのに、愈々其朝になってヤッと腰がきまり、急いで出席しました。会場には席題もチャンと出ていました。尤も今日の私にとって兼題も席題も全じです。兼席合計九題で三、九の二十七句を、ものせねばならないのです。

でもどうにか各題二句位が出来て、ヤレヤレと披講を待つ段取りになりました。

兼題「菜葉服」

披講の前置に選者は次のような事を云いました。

「中にはわかり切ったことを云っているのがありました、たとえて申しますと、

菜葉服汚れて居ても目立ない

ヒゲそり後に…
●美容衛生剤G11
●アラントイン
●水溶性ラノリン
配合
明色
男性
200円
アストリンゼン

駅弁も豆と昆布ありお正月　大阪市　松重　洋子
愛人のパーソナリテイ高く買い　守口市　西口　竹志
うれしい日父の音痴へ笑いこけ　松山市　沖原　光雄
遅刻する子の宿題は出来ていず　大和郡山市　中内　孚彦
薄幸の麗人琴で訴える　笠岡市　佐内　隆文
イヤホーン株を聞いてるとは知らず　鈴鹿市　吉田　俊和
足袋の裏汚して女世帯じみ　岡山県　安藤　祥男
トンブクでなおる風邪でもすぐにひき　宇部市　鎮浪　翠月
産制の世に数の子の馬鹿相場　羽曳野市　樋口　一峯
インスタントまだまだ家は薪御飯　大阪府　中岸　雄水
心境の変化とぬかし裏切れり　東京都　豊田　稔
組立の住宅夢の中で立て　松江市　岡崎　雪美
ジャガ芋と人蔘ならべ絵筆病む　泉大津市　高津　紡毛
独身というても仲居乗って来ず　笠岡市　松本　忠三
死んだ方がましと云いつつ薬服む　枚方市　小林　白鷺
国情より顔のニキビを気にしてる　大阪市　北村弥次呂
オルガンを叩いて歌う妻若し　香川県　三井　酔夢
外聞へ心と口は違って居　青梅市　三上　芙路
平社員トンボのような首を持ち　宮崎市　野口卯之助
栄転に内助も共に見送られ　福岡市　本村珍ちく
牛も亦耕耘機から追われる世　大阪市　中江ゆたか
足組んだ隣り気になる映画館　八尾市　吉内　青魚
拍手するだけの総会あっけなし　鳥取県　谷　無閑

靴をぬぎ又靴をはき汽車の旅　枚方市　福山えく呆
初大師香具師の効能みやげにし　大阪市　井石　悟朗
子沢山老後の夢を見て育て　小松市　月田北海坊
百姓でこそと七人娘をそだて　大阪市　川口　弘村
雪割りは疲れた方が鍬を立て　石川県　三宅　ろ亭
ねぎ汁が匂えば雪も夜の色　石川県　高山　涼髪
旧家なり見栄にキリキリ舞いをする　西宮市　鵜飼　鮎子
子も妻もあるにこんなに想わされ　大阪市　津守　柳信
落書きを机に彫って卒業す　東京都　中野　二郎
助産婦はもむ手も八丁口八丁　ハワイ　宮政　周防
代教の時は子供がよく学び　大淵市　尾花　群雀
共稼ぎお花も活けて休養日　玉野市　井上　旭峯
ハンストに堪えて仕事はしんどがり　和泉市　末田　晃康
目についた柱時計をほめて去に　京都府　塚脇　笑太
喪服着の血はあらそえぬ身のくねり　神戸市　吉田　隆史
お点前をサービスだらりの京舞妓　茨木市　高木繁太郎
屋上の寒さにこたえたお上りさん　大阪市　西本　保夫
踏切り地蔵油断ならぬという目付き　愛媛県　鳥井　川鳥
女房のブライド下駄を買うただけ　大阪市　種谷　敏明
生き甲斐をかせて来た吾娘今ぞ嫁く　富田林市　浅川　八郎
算盤の養鶏千羽は儲け過ぎ　五所川原市　盛　竜蔵
公僕のストで税金また上り　倉敷市　大須賀平々
復職の愚痴はみんなで聞いてやり　大阪府　見本　泉洋

これへ大向がドッと来ました。
刹那「アッそれは私の句です、待って下さい、云う事がありますと」と危く私の口から出かけたのですが「待て、邪魔をするな」と私のアタマがこれを押えました。
この句が選者先生にも、またドッと笑いこけた連中にも、勿論わかり切ってるに違いないでしょうが、私にはどうも、わかり切ってると思えないんです。もしそれ黒い服汚れて居ても目立たない
又は
白い服汚れて居ればすぐ目立つ
ならば、どうやら私にもわかり切ってると言えるんですかネ…。そのことを私は其場で言いたかったんです。

コーヒの味
モダン川柳
心斉橋大丸北の辻東へ
御門
TEL ㉗6684
御集会には階上御利用下さい

句評リレー

大阪市 正本水客 ● 鳥取市 河村日満
倉敷市 田垣方大 ● 熊本市 田口麦彦

大東京宮城邪魔になり始め

すゝむ

水客—戦前なら、ナントカ罪を構成して問題になるところであろう。宮城開放問題、移転問題などをはらんで、時代の推移をまざまざと感じさせる句。

私の長男がちいさい頃、東京へ連れていって、先ずキュウジョウへ行こうと言うと〃何処のグランド〃と聞き返えされてハッとした経験がある。下八「邪魔になり」と説明して了った処に、この句の物足りなさがある。

日満—私はむしろ上五の「大東京」の方に物足りなさを感じている。又「宮城邪魔になり始め」でもいい様におもうが、私の考えでは、「宮城邪魔にされ始め」の方が、宮城の広さが邪魔だとする原句に忠実だとおもうが、どうであろうか。

方大—宮城という侵すべからざる聖城さえ、邪魔になってきたのであるから、その発展ぶりがうかがわれ、「大東京」「宮城」という文字をつかった、スケールの大きい句であるが、その割に迫力にとぼしさを感ずる句である。それは邪魔という語に具体性がないからでパーを建てたい、なんてやったらもっと面白くなる、然し「パーを建てたい」とやったら、句の品位はぐっとさがるので、この句はこのままの方が、無難である。

麦彦—いろいろ意見が出されているようだが、私はこれはこれでいいのではないかと思う。というのはこの句の真意は、単なる「大東京」や「宮城」の表面上の意味だけではない、と私は見るからである。九百万余の世界最大の人口をかかえ、なおかつ年々才々ふくれ上って行くマンモス東京、そして合理化の嵐は不必要なものを容赦なく淘汰して行く。

その合理主義のシンボルとしての「大東京」そしてその中で「宮城」というもので代表される一つの伝統とか、過去の権威といったものが、時流にだんだん押し流されてゆく有様、これを「なり始め」ということばで、そういう時間的経過を示した、と見るのは余りにうがち過ぎた見方であろうか。作者がそこまで意識して詠まれたかどうかは知るすべもないが私はこの句をそういうふうに受取った。

水客—この句の〃邪魔〃とは大東京の発展に伴う地理的な意味と時代の流れによる心理的な意味と両方とも持っていると解すべきであろう。邪魔という表現にどうもひっかかるが、他に適切な言葉も見当らないようだ。

日満—句の内容は麦彦氏のいう通りで、私自身も受け取り方はそうである。然し句の構成からの話をしているのであって、このままおくにはというのが真意である。作者が勿論時の流れを意識しておらねば、こんな句は生れまい。私の句に「天皇陛下万才戦後なりとても」があるが、それなればこそ、この句を佳句として理解しようとの意からである。週刊誌で相当騒がれたことは別としてでもある。

方大—私は直感的に土一升金一升を思いうかべて、面積にしぼってしまって、麦彦氏のような受取り方が出来なかったが、確かに指摘されたようにも解釈出来ます、然し上五の「大東京」の「大」が拡大の方に考え易いのではないのだろうか。

麦彦—いろいろ意見が出されたようだが、意見を綜合すると水客氏の云われたように地理的と心理的と二様の意味を持っているという結論になりそうである。句の構成についてまだ推敲の余地があるという意見もあったようだが。

それだからといってどう変えるといった決め手もない、そうなるとこれはこれなりで鑑賞に堪え得るのではないかと思う。

○

ママママと呼ばせてママの

神経痛・リウマチに…
ルビー P 大日本製薬
オサドリン錠は西独クノール社が多年研究の結果，新発見した神経痛・リウマチ治療剤です．　その作用は確実で胃腸障害などの心配がありません．
(10錠) 350円・(20錠) 650円
オサドリン錠

河内弁

奈良子

水客—ママと呼ばせる家庭のかん境とママなる人物（河内生れ）との対照に弱さがあって〃ママ〃のたたみ言葉の効果が上っていない。

日満—水商売の「女将」を詠んだ句らしいがどうも私の方が鈍なためか、ピンとこない。上五の「ママ」の重語法にも問題はあろうが、中七の「ママ」から下五も何かしらパッとしないものがある。

方大—この句はママの対照に河内弁をもってきて、その不自然（だろうと思う）さからくる、面白味をねらったものと思うが、河内のことを、今東光さんの小説の中でしか、知らない私には、ピンとこない句である。然しこの「河内弁」を「田舎弁」と置き変えてみると、私にも前述のような句意として、わかるのであるが「田舎弁」では一般的になり、ぐっと弱くなってしまう、私の想像どおりであれば「河内弁」でもよいのであるが「河内弁」を知らない人には、何の関心も示されない句である。

麦彦—これは三氏の御意見で大体云いつくされていると思う。「河内弁」というものもよく知らないが、いわゆる田舎弁というものだろうということは知らない私にもほぼ想像がつく。方大氏のいわれるように分り易くしようとすれば句が弱まる、といったいわば「孝ならんと欲すれば忠ならず、忠ならんとすれば……」の類で本当に十七音字というギリギリまでに圧縮された詩型だけに難しいものである。また水客・日満両氏のいわれた重語法もこの場合やや無理があるのではないかと思う。

水客—「ママ」は日満氏説のバーのマダムなどの場合と、家庭の母と子の場合と両方に解される処にこの句の燃焼不足さがある。ママと上品ぶって呼ばせる人は、ザックバランな河内言葉を使っているという皮肉のねらいは弱い。

日満—水客氏の家庭の母と子の場合の「ママ」には私はどうしてもようとらない。それは中七の「呼ばせてママ」の「ママ」が、子としての句にとれないからである。何れにしても「河内弁」を採りあげてこの穿ち味は弱い。

方大—私は句意のウエイトを家庭説の方におきたい、最近はどんな地方でも、ちょっとしたバーなら、マダム、ママさん、なんて呼んで平気で東京弁と地方弁を、ごちゃまぜして酒を酌いでくれる、至極当り前の現象である。彼女達は「呼ばせ」なくともマダムママしか呼びようがないのである「かあさん」なんて呼んでいるのは、段々少なくなっている、そういう現実からこの句を水商売の句としたら、全く面白味のすくない弱いものになってしまう「呼ばせて」は対照人物を我が子と思いたい。

麦彦—バー説、家庭説と分れたようだが、私はそう限定せず、一般的にどこでもありがちなことであるから、軽い意味のうがちとしてとって差し支えないと思う。

お知らせ

バックナンバー御入用の方は、往復ハガキでお問合わせ下さい。

川柳雑誌社

○

人の子に靴磨かせる気にならず

東岸

水客—〃あれも人の子樽拾い〃現代版。上五「人の子」にある作意が、何か耳について戴けない。

日満—では自分の子ではいいのか？と反論したくなりそうになるのも、この句の下五のぶっきらぼうのためだろう。「気になれず」では、私に対しては大分やわらぐのだが。

方大—現実的には磨かせなかったら、尚かわいそうなのではないか理想的には、こんな子供に靴磨きをさせないような、政治が望まれるのであるが。

麦彦—重箱の隅をつつき出すようなことは句評の本来の機能ではないが、この句は正直にいって作者の気持そのまま十七音字にまとめ上げたまだナマの形にあるのではなかろうか。靴を磨く人たちにもいたわりの眼をもって接しようとする作者のヒューマニズムはよく分る。だが、文学としていわゆる「いのちある句」として登場するためには、いま一歩の推敲が欲しい気がする。

水客—下五「気にならず」は「…なれず」でも句の感じは変らないと思う、頭で作った句の感じは抜けない。

日満—私はむしろ頭で作ったというより、ナマの形という麦彦氏の評に賛成したい。

方大—誠実で正義感の強い、この作家をよく知っている私にはなる程とうなずける句でありますが、表現は少し弱い。

麦彦—饅頭（まんじゅう）がおいしいのは中にアンがあるからである、だからといってアンばかり食べさせられたのでは食傷してしまう。文学作品もこれと同じようなものではないかと思う、作者の主張というアンを表現というコロモで包んでこそ、おいしい文学饅頭が出来るのではないだろうか。こんなことは百も承知の作者とは思うのだが……。

○

浮気した気持で帰るヌード展

星二

水客—善良に飼育された亭主族のそこはかとなき反撥、少し感傷的になるなら秋の陽射と軽い靴音がバックにあるような気もする。軽いペーソスもあって、これはこれでいい。

日満—亭主族のそこはかとなき反撥とまでは賛成しかねるが、これはこれでいい点には私も一致。

方大—こういう気持になる旦那さ

んをもった奥さんは倖せである、実感句であろうが「フフ」と忍び笑いしたいような句である。

麦彦—軽いみつけの句、コント的なユーモアとペーソスの適度のミックスされた作品とでもいえようか。ヌード展の句はいままでにもたくさんあるはずなのだが、この句のような見方は案外盲点だったようである。ただ、こういった句はそれだけのものにとどまって余情を持たないのは致し方ないことといえよう。

水客—「浮気した気持」がこの句の焦点であり、異論もあるところであるが、諸説とも及第点というところである。

日満—いわゆる想像をたくましくさせる作品であり、「浮気した気持」がヤマである。

方大—妻君との世間話にも話題にできない夫君の微妙な心理状態をよんだ面白い句であり、素材の組合せもうまい。

麦彦—読者に理屈をさしはさませないで感じとらせるというのが「軽み」の句の特徴であるが、この点これは成功しているといえよう。

○

相談欄顔のみにくさには触れず　清生

水客—身の上相談を持ちかけている人が自分の顔のみにくさに触れないのか。或いは解答をする側の人が、わざとその点をぼかしているのか。更にもう一つ、結婚相談などの場合として、相手の美醜などは問題でなく心の美しい人を望んでいるという場合にもとれる。句の構成上からは、いずれとも言えないし、着想にも新しい発見はない。

日満—相談に対する解答なし、むしろ「顔のみにくさより心の清さ」とするだろうから、この場合は相談を持ちかけた方と解すべきだろう。そう解すればこの句案外批判的にもとれ、面白く味わえないのではないか。

方大—容貌に触れたらずばり解答の出るものを、理論的に解決策を出している相談欄の、空虚さを皮肉った句としてみると、面白いがこの句はそうと断定する素材の組合せになっていないので、批評するのがむずかしい。

麦彦—つまりこの句の云わんとするところは新聞の相談欄の公式的な解答（それにあたる人は努めて公式的でないようにしても結果的にそうなる）と現実とのギャップだろうと思う。人間感情の動物である以上、第三者から見て一番良いと思われることが夫婦とか親子とか友人とかの間では通用しないということが多い。しかも新聞の相談欄などは訴える側の事情も詳しくは分らないし、訴えられる側でもそれを具体的にどうしろということは判断できない。いわば乾の底から足をかくもどかしさ。この現実をとらえたかったに違いない。ただこういった形の句はいままでにも多く詠まれているので、いまさらという感じはしないでもない。句の形としてはこのままでもいいようだが……

水客—〃みにくさに触れない〃のは、相談を持ちかけた人と解答者と両説に分れたようであるが、相談欄とは、一つの読み物に過ぎないというむなしさを詠んでいることには間違いない。着想、表現とも再考が欲しいところである。

日満—前述に、相談に対する解答なら、としたが、これはどうも私の間違いのようである。各氏の意見からしてどちらにでもとれることは事実のようだ。としたら、この句このままではいいとは云えまい。

方大—今度はどちらにもとれる句が多かったが、この句もそうである、然しどちらかにウエイトをおくとすれば、相談をもちかけた人の方が若干強いようである。

麦彦—句がアイマイであるというのに三つの場合があるといえる。一つにはそれを詠む作者の位置がアイマイであるという場合（思想政治などの句の場合に多い）、二つには句に表れて来る人物がアイマイである場合、三つには表現上の欠陥によるアイマイさ、というように分類出来ると思うが、この句の場合二と三のどちらとも云い兼ねる。省略が過ぎても足らなくてもいけない、川柳というものは本当に難しい。

（担当・真鍋一瓢）

お上品でない

河内弁

不二田 一三夫

ママママと呼ばせてママの河内弁　奈良子

今月の句評リレーに出てくるこの河内弁というのは、南河内、北河内、中河内とあるが作者が布施市の人だから、この河内弁は中河内のモノであることにまちがいなさそうである。

この三郡のなかでも中河内が一番言葉が荒いようである。

喧嘩ッぱやい関東方面から流れてくる土工でさえも、この河内弁にはド肝を抜かれるというのだから、喧嘩ことばなら河内弁は横綱級であろう。

「なに言ってやンだイ」の、べらんめえ口調なんかおとなしいもので、

「なにをぬかしてけつかるねン」の、河内ことばにかかっては歯が立たない。第一発声法からしてテンデ問題にならない。

殊にだ、

「殺（い）てもたろか」という、ことばなんかダンプカーほどの重量感があって、聞いていても胸がすくような言葉の弾丸だ。

河内のおばアんと、船場のご寮はんがムキ出しに会話を交わせば、これが同じ大阪の人かと、地方の人は驚くであろう。

「早いな。コチとこの子伴、お前ンとこへ来とりまっけ」とは、

「お早ようさんでおます。ウチの子がお宅へ寄せてもろうてまっしゃろか」ということでこれはほんの一例にすぎない。

文化財的存在ヨロガワのミルと言う

一三夫

花と酒と女と

市場浸食子

暖冬だと測候所が予報していたが、大阪にも珍らしく雪が何回かちらついて、寒冬に早替りした今年の冬も、もう梅が綻び初めたし奈良のお水取りがはじまっている。これがすめば桜の花の便りが頻々で心を浮わつかせる。それと殆んど同時に桃の花も咲き出すし本当にこの世の春を、我世の春を謳歌する季節がやって来る。花札の桜の二十はやっぱり幔幕がついているせいかも知れないが、何んとなく陽気さを感じさせて来る。梅、桃、桜と詠んだ川柳も随分数多いことだろうが、やはり桜を詠んだ句が一番目につき易い、花の句を戦前の句になるけれど川柳雑誌にかつて掲せられた、好きな句を拾うて見た。

臥竜梅墨絵で来いと言うすがた　東魚

花の雨電車でぼやくばかりなり　白柳子

春はテロだテロだ桜の下の　緑之助

花びらは諸行無情の笠に散る　暁童

花が散る散るとて踊る人人や　花情

雪洞を下げて夜桜から帰り　緑雨

花見から信用のない人になり　かほる

・

花見にはお酒が付きものである。花より団子と言うけれど、呑めるものには「花より酒」と行きたい、とは言うものの呑み過ぎての乱暴な人にも困ってしまう、僕の酒は昔から妙な酒で、せんべいでも、飴玉でも結構頂戴出来るし、今もって胃潰瘍にもなっていない。頗るぐうたらな胃袋である。でもこんなの珍らしくなくて時々同じ胃袋の持主に会うことがある。酒にも色々と味があるらしいが、そんな鑑別が出来るように僕の舌は修練されていない、亡くなった伯父は酒豪であったが富久娘を好んだし、カネ女の姉婿も呑める方でこの人は菊正宗で呑まなければ家では呑まなかった、食道癌で手術をするほん前までお茶は通らなくとも特級菊正宗は食道を細々でも通過していた。

川雑の夫婦善哉の取材に潮花さんを迎えた時、没食子さんには酒の句ばかり目について、カネ女さんを詠んだ句を拾うのに苦労したと言っていられた。しかし酒の句の中にカネ女が潜在しているのもあって、僕のはそんなに悪い酒でないつもりだが、ただジャズルだけが悪い癖である、酒の句も戦前戦後の差別なしで川柳から拾って見た。

酒の味小豆の味を忘れかけ　潮花

カストリで酔うて宵寝の久しぶり　柳路

只一つ酒が生きよと尻を押す　没食子

生酔いが70円を待って乗り　生々庵

酒量の差客を残して横になり　喜由

酒止めて煙草を止めて愛妻家　牧人

酒酌いでしかしあなたはどなたです　緑雨

酒呑めぬ死に損ないのお元日　豆秋

昼の月お前も二日酔なのか　薫風子

・

花、酒とペンは進んで最後は女である。落付く所は女で終りかと思えば「あっはっは」と……若い頃泣き癖のあった僕は苦笑とも、微笑ともつかぬものが出た、お色気物語りは「アサヒ芸能」の独占ではない近頃は三文小説だけでなく、盛んにエロを発散さしている、ところが妙にそんなのが売れゆきが良好と言う、戦後は殊の外エロ万能の時代となったし、公私娼廃止、売春禁止法等と出来て、稚もすると気の荒くなっている若い人達を刺戟している。それはとも角としていや、女なくして何んの花ぞ、酒ぞとなりかけて来たので急いで句を拾おう。

女事務男の馬鹿を背に聞き　山雨楼

女もう裏門で待つ度胸なり　湧三

サービスの悪い女の厚化粧　豆秋

鼻くそを女指輪の手でいじり　春巣

磨かせてガム噛んでいる紅い唇　草右

女湯へズカズカズカとヘップバーン　春雄

大女見たくば見よと澄し込み　方正

女だけ明治の型にはめたが

お買物は…
清く
明るく
美しい

大阪梅田・水曜定休
阪神
電大代表(36) 1201

り　一三天

同権の見本女の外科医いる　春巣

★

吉田圭井堂

春と酒と女は云うまでもなく、三位一体で木枯し吹き荒ぶ寒夜の酒や女より、百花撩乱たる春宵の酒や女はタトエ少々いかれてるお面でも乙に見えるものだ。和服姿に粋な下駄履きで内輪に裾の乱れを気にし乍ら少し俯向き加減に歩いている春の女はどう見ても美人に見える。髪は烏の濡れ羽色ではなく髪は棕梱の雀の巣で耳には仏具の瓔珞たるヘナヘナの硝子玉をぶらさげ、目にはエチオピアの般若の面のようなアイシャドーを施し、ドンゴロスに首と両腕を通す穴をあけた袋に、我が中味を納め大根脚を丸出しに神代の遊戯蹴鞠りの足はこびで、中性化した男のやせ腕にぶら下って尻を振り振り濶歩している図は、どう見ても男をチャームする恰好ではなく、

実に凄じいのが前から来ると近づいて、よくよく見るとウチの娘であった。なんてことになると吃驚仰天、そぞろ今昔の感に耐えぬ仕儀ともなる。

今の女の姿で金色夜叉のお宮や不如帰の浪子を演らせたら漫画以上の漫画になる。昔の春の女が特に綺麗に見えたのは何と言っても一枚一枚薄着になって行く姿で、羽織を捨てた着流しに最大の魅力があった。曾て梅志さんが「素人くさくない素人どことなく粋なところのある素人」が一番男を引きつける女」と言ったが、全く至言で玄人くさい玄人素人らしい素人は私の愚妻も入れて、五千万人程日本に居るが、どことなく粋な素人は数える程しか居ないのではないか。そんな人が居たら私だって一遍苦労をして見たいと思う。

高田保じゃないが「春ともなれば王朝の美女を想い出す」が巷にはもう着流しの粋な女も垢抜けのした粋な素人も見当らぬ。芸者を招んでもあのかつらの下に紫の汚れた鉢巻をゞめているのかと思うと、偽もののだっこちゃんを当てがわれているような気がして虫ずが湧く。節分ともなれば街にはお化けの女があちこち歩いているが、丸髷とも島田とも銀杏返しともつぶしとも蝶々ともつかぬ鬢は、引き釣り髪は逆立ちの箒のようで、あれでも日本髪を結った積りかと呆れる。またあんな髪を憶面もなく結うて金を取ってる髪結いも、髪結いだと転た義憤をすら感じる。借り物の文金高島田に何の理由で付けるのかも全然知らぬ角かくしをつけ、どんな色にも染まりますと借着の白無垢で嫁入った翌日、新婚旅行の旅先でもとの恋人にばったり出会い、新郎を宿に置き忘れたなんてことも起るのは当り前。また酒にしたってそうだ。私は或る粋筋と昨今京都の名高い普茶料理をよばれたことがあるが、文字通り一滴の薫酒も無く残飯の炒じた玄米茶では如何に美人と一緒でも有難くなかった。どうしても頃は春、酒は灘の生一本に粋な女と、三位一体の道具が揃っていないと、此の世に無理までして長生きする甲斐がない。それだのに先日来大阪方面でまたまた大掛りな銘酒のレッテルや王冠の偽造団が出たと、その工場の写真まで新聞に出ていた。何でも四五年前の全国参院に立候補したのもこれで儲けた主犯だったとのこと、私はいつもおかしく思うのはその犯人は或る程あげられたが、その偽のレッテルや王冠を買うて偽酒に貼って一流メーカー酒としてわれわれに飲ませ、しこたま儲けた酒屋が一軒もあげられていないのはどうしたことか、われわれ酒のみは偉そうに言うても、ビールのように偽造と真物を直ぐきき分ける程器用ではない。そこをつけ込んでの悪質な酒やを見逃がす術はないと思う。われわれは酒の税金が幾ら高くともどうせ政府は何かで取らぬと承知しないのだから、運悪くわれわれの一番好きな酒をねらわれたのだと思えば諦めもつくが政府の懐に這入らず酒屋の蓄妾代に化けては寝覚めが悪い。女はエチオピアの般若だは酒は偽造の悪酒だは空は水爆に汚ごれてるはではちと可哀そうじゃないですか。せめて春だけは真物で水温む頃ともなれば地下でせっせとわれわれを楽ませる工作をしてくれている。春だけがわれわれを慰めてくれる。その自然の気候ですら千慰がひどいと言うては人工雨を降らせたり、オリンピックのスキーに雪が少いからと言って人工の雪をふらせたり、台風が癪にさわると言って水爆で台風の眼を粉砕したり、余計なことはしないで欲しい。酒も女も段々中味と違って悲しい思いをしている秋、この上大自然の春までまがいものでは真実やり切れない。

水爆がどうであろうとミサイルがどこへ飛ぼうと、月世界の土地が百万坪三百円で申込者が殺到しておろうが気候だけは昔のままであって欲しい。殊に春は尚更だ、万物偽物の世に春だけは崇高な春であって欲しい。

★

若本多久志

父母に早く死に別れた私の生い立ちは、いつも寂寞として満たされぬ何ものかを、「芳木詩集」——大正四五年頃の少年少女に人気のあった有本芳水氏の——を常に愛誦することによって慰められていました。その詩の中に——人知れぬ鉄道線路の横で名も無い雑草の白い花が二三本、誰に観賞される、ということもなく、可憐に咲いている」という一章が、たまらなく好きで、よく暗誦したものでした。

嬢土だ、肥料だ、日光だと手塩にかけて咲かしたきれいな花よりも、どこからともなく飛んで来て根をおろし、人知れず花をつけ、又静かに散ってゆく、こんな雑草の花に、心ひかれるものがあります。

○

白玉の歯にしみとおる秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり　牧水

酒を飲むなら、この牧水の歌の様に、独りしずかに猪口をなめ、興ずれば妓の一人もよんで、つめ引きの小唄でも唄う、四畳半のムードはたまらなく酒の味を甘美にし、仕事に追われて、そんな夢を追っているばかりです。

○

私の好きな女。それは——早く夫に死に別れて、一人か二人の遺児を健気にも細腕で育てている世の多くの未亡人です。そしてその気高い母性愛には只、頭が下ると共に、それらの人達の苦しみや悩みに、耐えている姿をじっと見守ってあげたいという人間愛を切実に感じます。

以上の三章が悲しき六十歳のセンチメンタルだとお笑いになるならばそれは読者の自由です。

同舟近詠

須坂市　高峰柳児

アルサロで知る人妻の稼ぎ高
妾宅は秘書をいつしか手なづける
いたわりの言葉をひがみはね返し
大臣の放言閣議硬ばらせ
弔辞読む演技あるいはすすりあげ

大洲市　米沢暁明

寒稽古女も強くなりしもの
母ちゃんが割ったは叱る人がなし
召上らない仏壇へ供えとき
知事賞を得よとて咲いた菊でなし

今治市　長野文庫

百歳の楠なおも伸びんとす
山手様様様様の貸本屋
どん底へ勇気をつける立志伝
母親の夢に逆らう子の書棚
マジックの署名本屋に嫌やがられ

和歌山市　秋月宏方

寝ていなさいと電気釜たいてくれ
候は辞典に眠る文字となり
鍬を持つ日の鉢巻はしてもよし

・句会礼賛・

長谷川三司

新年句会で傍島静馬君が七年間連続句会出席で表彰を受けられたが、余程の健康と余裕が無ければなかなかできない事で、今までは淡舟君が確かレコード保持者だったと思う。こんどの静馬君はまだその上を行くレコード保持者と云う事になる。

私も句会が好きで川柳雑誌の句会も御津八幡時代からつとめて出席し、以前に三年間連続出席した事もあったが、この頃はそうはいかない。去年はどうにか一年無欠であったがどうしても二三回は休むことになる。ほうぼうから句会の案内状を戴くが、全部には行けず三月か四月に一回ずつ顔を出してお好意に報いて居る。それでも月に三四回は句会出席の日ができる。この頃どの句会に行っても千篇一律で昔のままの型式でも結構ですが、少しは時代に添った催し方句会気分の盛り上りに意をもちいてもらいたいものだと思う。

お通夜のように一堂に集り焼香ならぬ句箋を差し出しお経のように読み上げて〃ハイ〃さようなら。これで今の川柳会はいいんだろうか少しは考えてほしい。

そのだん昔の川雑の句会は良かった、慰しかった。みんなが川柳を心から慰しみ真剣に一句一句を逃さじと披講に耳をかたむけ、披講の脇とりには潮花君などが居て選者の選句をもう一度あのいい声で隅々まで聞えるように読み上げ我々の聴ゴクをたのしましてくれたものだ。したがって句も生々と自然に〃ハイ〃誰れそれと呼名も大きくなり、句会のフンイキがいやが上にも盛り上り句会をたのしくしたものだ。

選者の披講中に披講席に背を向けたり、他人におかまいなしに私語したり、披講された自分の句が解らず披講席まで行って〃ハイ〃私の句ですと、一時間程前に作った自分の句が人に言われてもわからぬような不見識な句、不真面目さは句会の気分をぶちこわすも甚だしい。

選者も全国統一制があるわけでなく、吟社吟社に依って決められて居るが少なくとも公平無私、無色透明でなければならない。私の好きな句を戴きましたとか口の中でブツブツと前の方に居ても聞えないような披講や自からモウ選と名乗る愚選をされては何をか言わんやである。

選者はケン譲のつもりで言って居るのか知らないが、なぜ確たる自信の選が出来ないのか一生懸命に作った自分の分身である句がモウ選されてはたまらない。作者に対するブジョクも甚だしい。また選句の披講も初めから終りまで棒読みにされては肩がこる。

路郎先生は句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸であると言って居られる。

選句披講の場合でもその作者の心を知り、姿なり呼吸のままに披講してもらいたいものと思う。最近ある大吟社で句会のありかたにつき論ギをされたようですが、結論が出ず〃プラス〃の面は兎に角〃マイナス〃にはならない事だけは確だと云う事になったようです。

私はむしろ句会大いに良しいと言いたい。月に一度なり二度川柳のために一堂に会し語り合う一夕語り合わなくとも柳友のあの顔この顔を、あそこここに見る懐しさ、作家ひとりひとりの研鑽練磨のあと、秀句などを見ききするたのしさ、そこに川柳に対する収獲もあれば建設もある。

二十年も三十年も川柳をやって居て今さら句会の題詠吟でもなかろう、川柳は雑吟自由吟が本筋だと云う人がある。なる程結構な事で自分の思想なり生活感情を自由にお詠みなさい。大いにおやりなさいと云いたい。

だがそれがために句会があってなぜ悪いかと言いたい。句会に於ける題詠でも作家自身の体験なり人生観なりに依って自由に創造すれば何等自由吟と替らない。

私は句会が好である。だが句会が今のままで良いと云うのでは無い。主催する方も、もっとたのしい句会新時代の空気のただよう老若男女いずれにもおちつき、親しめる会にしてほしい。また出題についても考慮の余地あろうと思う。出題については私も経験がある。むつかしいものと思うが自分の体験なり人生観が詠える題であってほしい。

また選者だが、経歴と作句実力は必ず併行するものではないが、こと選句となれば経歴が選者資格の一つでもある。論功行賞的な選者や前記のような愚選者理屈ばかり言って実作のない選者などが今だ応々にして居るのが、今の川柳会の現象だ。そんな事が川柳なるがため川柳会なるがために許されていいものだろうか。

句会の催し方一つで良い句会にもなれば悪い句会にもなる。私はある尼崎の句会でだんだん出席者が少なくなると嘆いて居る、主宰者にこの頃この句会に笑いがなくなった（笑いと言ってもバレ句や駄洒落ではない）笑いのない川柳句会など無意味だと云うような事を言った事がある。そんな事が出席者の作句意欲にも影響し句会出席率にも響く。酒のついた題に酒に関係のないおしゃべりの句を取ったり、舞と踊との根本的な違いぐらいは知って居てほしい。

あの選者なら僕は出句しないと極端に云う人も居るが、私はそんな事はない、あの選者なら没と解って居ても私は私の句を出して居る。後でその選者の入選句と比べて見て一人ほほえむ。

兎に角私は句会が好きである。たのしく安心出来る句会が一つでも多くなる事を願う。

工業技術院長賞受賞
軽やかな書味 楽しいお仕事！
適した硬度をえらび下さい。
HOP 学生事務製図
トンボ鉛筆

「美しい」と「きれい」（二）

戸田古方

エハガキと一口にいっても、この頃のはずい分、それらしくない

すぐれたものも出まわるようにはなりましたが、それでも一目みてそれがどこであるかとわかることが絵ハガキとしての一つの大切な条件だったのでしょう。

昔はよく臨画といって手本通りに絵をかくけいこをさせられました。それこそ個性を没して、もっぱら手本通りに正しくかけたらよいのでした。つまり、その出来上りの上手、下手の目安はやはり、「きれい」か「きたない」かにあったようでした。

掃除をする時に「美術的に」と口ぐせのようにいう人を知っていますが、この「美術的」というのはちょっとオーバーなんでありまして「きれい」でさえあればよかったのでしょう。

「きれい」といえば、その代表は京は祇園の舞妓さん。失礼ないい方だが、白痴美の中にもありそうです。

表面に出る、出ないはあっても、味のある、なしが「きれい」と「美しい」のきめ手のように思われます。

千の利休が帚目もあざやかな掃除したばかりの茶席の露路へ枯葉を二、三、わざわざちらしたと申します。ゴッホのかいたモナリザの模写はダヴィンチのそれとは似ても似つかぬものでした。

味とは個性のあることでしょうか。

平面的な日本画の美しさもあれば、立体的な西洋画の美しさも美しさです。

ここまできて「美しさ」とか「きれいさ」とかの正反対からながめてみたくもなりました。

死骸というやつは、いうまでもなく、「美しい」とも、「きれい」ともいえぬしろものです。そういうものに対して人は「きたない」とか「みにくい」とかいうのでしょう。

死骸にはその上、おまけがついています。「気味わるさ」とか「こわさ」というものです。何故「こわく」「気味わるい」のでしょうか。

人を害する猛獣でも、自分を襲う人間の敵でも「こわい」のは生きている間のことで、死んでしまったら、何もようしません。「気味のわるさ」は古代以来の自然の恐怖、死霊を考えてのことでしょうか。屍毒を経験して、これを死霊といったのかもしれません。だから「気味悪い」だけでなく「こわく」もなるのです。勿論、そこから「みにくく」もみえたのでしょう。

しかし、この死骸も大家の名筆にのりますとすぐれた美術品となっています。そこに表現された、すぐれた真実の再現なのでしょうか。

真実とは美しいものです。

死相以上に気味わるくせまるものに般若の面があります。これにも国宝級の傑作が残っています。これまた真実の美の一つなんでしょう。般若のもつ美は、人間の最も深刻な、醜い欲望をズバリついているからなのでしょうか。

表現し得るかぎりの技巧をつかいこなして、これでもか、これでもかと押してきたのが般若の表情です。女性のエクスタシーを表したものという説もありますが、とにかく、醜いものも、それが真実であるかぎり、それをまっすぐ、目をそらさずに追い求めた結果、生れた般若はやっぱり美しいのでした。

山本富士子といえば現代美女中の美女、ところでそのクローズ・アップをみていきますと、案外ひどい肌の荒れ方にびっくりしたことがありました。これが山本富士子の肌だといわれると、なんとか文句の一つもいってみたくなりますが、そうした美女の肌であることをはなれて、ただ凸凹の面と明暗のある物体としてみてみますと、全然別なものがみえて来ます。「美しいもの」が、そこにもあったのでした。

「美しさ」というものは全ての余分な属性をとりのぞいた絶対なものの中にあるのかもしれません。

テレビで「日本美について」というのを見ながらメモしたものをかいてみましょう。

素朴さ
やさしさ
つよさ
わび
たけかえる（洗練された意味）
はなやかさ
かろみ

といったものです。日本で発見される「美しい」もののいくつかを公約数的にぬき出し、あつめてならべたものでした。出てくるものは京都や奈良の寺々の建物や彫刻や宝物、民家も民芸家も仲間入りしていました。写されたものは造型的なものばかりでしたが、日本美という以上、同じ土の中から川柳も生れて来たことを忘れたくはないのです。

川柳美ということばがあるのかないのか、川柳美の内容が以上列挙した要素とどこまで合うか、何かの思索に役立てばと思います。

最初にかいた「雪の朝」の中につかわれた「きれい」と「美しい」がはたしてそれでよいのか、ということ。

窓の外の雪景色をぱっと見た時に、自然に口に出たのが「おおきれい」であったのでしょう。その「おおきれい」には、鑑賞の心も批判の眼もまだうごいていません。純粋に視覚という感覚だけを通してだけのものが「きれい」なとなるのでしょう。一寸、間をおきますと、知的なものや、いろいろのものが動いてきまして「きれい」から「美しい」に進むのじゃないかと理屈っぽくなります。雪の白さと黒いものや、暗さとの対比はいっそう雪の白さを白くします。そんな強調が意識する、しないにかかわらず、感じられはじめると、もう「美しい」に一歩入ったともいえるのでしょう。

「美」となるためには「見る」でなくて「知る」に近ずかねばなりますまい。音の世界で「聞く」から「聴く」に入って行くのと同じことです。

少くとも、心がうごいてきて、美が出てくるのでしょう。心理学の段階では「きれい」はあっても「美しい」とはならない。哲学的考え方を要求して、はじめて「美」なんでしょうか。

今朝、電車の中で、買ったばかりの岡本太郎著「忘れられた日本」（中央公論社版、三六、一、二〇初版）をよみはじめていました。これは沖縄の文化を談る著者一流の麗筆になるものなのですが、そのなかに「動物的忠誠」ということばがありました。戦争末期、黙々と死んでいった沖縄の人々の悲劇についてある評論家の感想の中にあったことばなのですが、著者はこのいい方をエゴイスティックな判断だといい、民衆が動物的であるより、民衆にこんな真似をさせた軍部や官僚の方がより動物的であったと憤っているのです。

私はこれを読みながら、「きれい」とは動物的な段階で、より人間性がでてはじめて「美しい」ということが許されているのではないかとも思ってみました。（完）

ずるまま思い出

直原七面山

ある川柳大会で柳話を頼まれ『川柳ぐらいたやすく選者になれるものは外にないのではあるまいか。一、二年もすれば一かどの選者になった気で、選を自ら進んで担当している者もいるようだが、こうしたことが川柳の文学的地位を低下させ、川柳発展の阻害になっているのではないだろうか。』と話したのですが、早速ある柳誌で『七面山氏の発言には考慮すべき点も多少はあるが僕は反対だ。川柳発展のためにこそ、選はまだ早いからと云って選を辞退する人があっても、僕はあえて選を依頼している。』と云ってる人がありましたが、この人の考え方と私の目指しているところはまるでうらはらで、次元が違っているようです。

これでは〃選〃を勲章化し、商品化し、政治的取引きの具に供していると云う外ありません。

×

先日ある親しい柳人達と一堂に会していろいろ柳論を戦わしたのですが、そのときある柳友が『いつも思っていることなんだが、七面山氏には妥協性というものが全然無いね……それではネュウクツで仕方があるまい』と発言しました。

そのとき私は『こと川柳に関する限り、僕は自己の主義主張に対しては極端にまで忠実なんだ。他人から見れば、至極がんこで、ものの分りが悪く、妥協と云うことを全然知らぬ男のように思われるかも知れないが、実はそれが僕の唯一無二の長所なんだ。そう云ったら君らは驚くだろうか。それとも僕を狂人扱いするだろうか。僕が川柳人として生き永らえていられるのは実にそのためなんだが君らはそれを捨てて僕に死ねと云えるだろうか。僕にはどうにも出来ないことなんだよ。』と話したところ、『なる程なあ…、そう云えばそうかも知れない。』とみんな揃って頼りなさそうな返事をしていましたっけ。

もし私の作品の中に、少しでも人様からみて見所ある句があるとしたら、それは私のこうしたがんこさ、けっぺきさ、非妥協性から生れ出て来ているんだと理解して頂く外ありません。

×

最近私は課題吟をひねくり廻すことに全然興味を失ってしまいました。

私はひたすら人生をより深く見極め、新しい川柳の世界を創造し発見して行こうと日々おう悩におう悩を重ねています。

こうしたことは現在の私にとって一種の退歩でありマイナスであるかも知れませんが、目ざす一つの峠を乗り越すまでは私はあくまでこのままの姿勢を持ち続けて行きたいと思っています。

×

過ぐる日私は、武部香林先生をその寓居にお訪ね致しました。

そして御夫婦から貴重な川柳の数々をお聞かせ願いました。

そして私もまた私なりに、信ずるところを申し述べたのでありますが、その中で私は御夫妻にこう申し上げました。

『……私は終局において私の個性そのものの句を創り上げて行きたいのです。私の作った句を一目見たらその句に私の雅号が全然書いてなくても〃ああれは七面山の句だよ〃と誰れでも直ぐ了解してくれるようなそんな特異な句を……。例えばあのゴッホの絵のような。そうです私は川柳の世界にゴッホの境地を、マチス、ピカソの句境を切り開いて行きたいと念願しているのです。十七音字をもってものする川柳の世界で、それはおよそ不可能なことがらかも知れません。がしかし、いまの私はこの前人未踏の境地を開拓して行くことに限りない喜びと生き甲斐を感じているのです。』と。

実はこうしたものの考え方を基そにして、私のあの課題吟廃止論は生れて来ているのです。

それにしてもあの廃止論が川雑誌上ばかりでなく、柳界の各方面であんなにまで大きなセンセーションをまき起そうとは夢にも思いませんでした。

×

今後ますます数多くの句会や大会がもたれることでありましょうが果して、それらの句会大会から、どれ程実のある成果が生れ出て来ることでしょう。

句会が従来どおりの課題吟中心主義で運営される以上、私はそこに多くを期待することはどうしても出来ません。

これらの句会大会がただ空虚な一日のお祭り騒ぎに終らねば良いがとそれをのみ念じています。

二つの句意について

本誌の七月号に（昭和三十五年）野田素身郎氏の、

ひき逃げはそんな大物とは知らず

と云う句があります。

私はこの句を読んで、警察と云う職場に働いている関係もあってひき逃げ犯人を捕えてみたらとんでもない大物だったと云う風に了解していたのですが、たまたま氏と同席する機会があったので、氏に句の意を尋ねてみましたところ〃とんでもない、被害者が大物と云う意味ですよ。〃との御返事なので、びっくりして句を読み返えしてみますと、なる程氏の云われるように、被害者が大物と受けとれるのです。

そこで私は、この句は、一句で二句の役目をし、しかも、その意味が全く正反対にとれることに珍らしい句だなと思いました。

その後ためしに、この句につい

事務用品全般
事務用スチール家具
株式会社 心斉橋クニヤ
心斉橋北詰
電㉕ 4740, 4741, 4742

いていろいろの人に意見を聞いてみますと、十人の中八人までは、やはり私が最初感じたように、〃ひき逃げ犯人が大物〃と了解するので、実はこれこれだと説明しますと、〃なる程、そう云えば被害者大物ともとれますね、〃と云うことになるのです。

で、こうした句意の食い違いがどこから起ってくるのかと考えてみますと、これは、〃ひき逃げは……〃のはにあることに間違いはないようです。

従ってこのはは、断定的な言葉としては使用されていないと云うことになります。

だから句意のとりようで、片や加害者、片や被害者と云うように常識ではちょっと考えることの出来ないような正反対な意味になってしまう訳です。

そこで試みに、この曲者のはに他の言葉（文字）を代入してみますと、

イ、ひき逃げがそんな大物とは知らず
ロ、ひき逃げのそんな大物とは知らず
ハ、ひき逃げをそんな大物とは知らず
ニ、ひき逃げてそんな大物とは知らず
ホ、ひき逃げもそんな大物とは知らず

の五つの句が出来ます。

でこれらの句のうち、㋑㋺㋩の三句は三句とも原句と同じように、句意が到ってあいまいで、二つの句意に解せられるおそれが充分あります。

では㋩はどうかと云いますと、これはもうはっきり〃ひき逃げ犯人大物〃と断定して間違いありません。

そうしますと残るのは㋺ですがこの句だと、句主素身郎氏が主張されますように、〃ひき殺ろされた被害者が大物〃と断定することが出来ます。

そこで考えられることは、句主が自己の意を、よりはっきり、より正確に相手に伝達するためには、この句の場合、句意が二様にとれるような字句は極力さけて、㋺のように、〃ひき逃げて……〃とての字を使用すべきではなかったかと云うことです。

しかもそうすることが、句をより一そう輝かしいものとし、決定的なものとするならなおさらのこと。

大阪の思い出

たぬきつきの話

酒井ひか平

前に書いた、ゆうれい話があってから、一と月程後の御寮人の卅五日の命日の夜であった、天王寺亀の池派のお講の連中が例の「なんまんだ」の大ずずを廻わし一と供養して一ぷく、用を足したい者は立ち、足が痛む者は膝を伸ばす。大宝寺町南綿屋町角の広江洋服店のおばあちゃん（六〇）が小用に立ち、漸くして戻って来られた時、私は、おばあちゃんの眼が異様に光るのを見て驚いた。

すると彼女は座の中央へ、他人の肩をまたいで進み出るなり、いきなりくるりと自分の着物のお尻まくりをしてどっかと坐り、

「やい皆の者、耳くそをほじくってよーく聞きやれ、われこそは石橋の地蔵さまなるぞ、頭が高い」と云うが早いか、問題のお仏壇の前に進み寄り、天目にお供えされた廿程の紅白のまん頭を、それこそアッと云う間に食べてしまったさあ一座は、その間あっけに取られて見詰めて居たのが、蜂の巣をつついたような大騒動になり、てんやわんや。

「えらいこっちゃ、忠吉っとん早よお太子さんの水貰うて来なあかんがな、早よ早よ何にしてんね、あほ、市電に乗って行きよったら車庫へ入ってしまうがな、自転車で飛ばさんかい」一方、別家の大将二人がおばあさんを取り押さえる可く両方から左右の手を取った「無礼者下がり居ろう」と叫ぶやいなや、手を振り払う、すると二人の大将はまるで力道山にはじき飛ばされたように、もんどり打ってひっくり返える。恐わい中にもふき出すような一と幕もあり、折よくお導師さんが有難いお教を？念じ一応その場は片が付いたものの一時はどうなる事かと思った。

私は、余りにもあわて過ぎ自転車無盤で走って居る処を巡査に引っかかり、一と言二た言口返答をしてピンタを貰い、黒手帳に名前を書かれ鍛冶屋町へ戻って来たのは午後二時過ぎになり（風呂のふたやがな）と此処でも間抜け丁稚のレッテルを張られたが、川柳に**子沢山使いに出したのを忘れ**、と後年詠まれたが。

天王寺へ出した私を皆んなが忘れ果てて居たのには腹が立った。

二三か月寝込んだ後、広江のおばあさんは良くなった。

きつねつき
たぬきつき
ほとけつき

等々があるが、おばあさんの場合はたぬきであったらしく、奥の深い大家の雪隠で用を足す際、下から入ったものらしく、手洗いの水を口を付けて飲んだところからたぬきと見られ、ほとけの場合は手又はひしゃくで飲むと云う。

天王寺お太子の水は、こうしたつきもの下ろしに効能があり、船場島の内の旧家の棚には家紋の丁ちんと一緒に置いてあったものらしい。

大万川柳十周年 記念大会

日時　昭和36年3月19日
会場　割烹　大万

大万川柳が柳界の年中行事の一つに数えられるまでにいたったことは、路郎先生の名選に負うことはいうまでもないが、やはり松江梅里氏のたゆまぬ努力のたまものである。

他社の柳人もこぞって参加するところに大万川柳の魅力があり、しかも一年生柳人でも実力によってベスト・テンに名を出せば選者の資格を与えられ、この日ばかりはベテラン選者と肩をならべて、堂々の披講ができるという、大万川柳独自のルールも楽しいものである。

35年度東方横綱はまた梅里氏ときまったが、第八・九・十回の三連覇（ぱ）である。その三連覇も第四・五・六回にも達成しているので二度目の三連覇という大記録である。

ことしも雨である。大万川柳の大会と雨はどうやらつきものようである。

司会は若本多久志氏、開会の辞は土井文蝶氏、祝詞は中島生々庵氏、挨拶は松江梅里氏。

路郎先生は柳話で「真理をつかめ」と言われた。句のバックボーンは真理。名句はそこから誕生する。

欠席された選者の代選は、その順位によってなされることになった。

柳魂たぎる十題に、十六句入選の正本水客氏が堂々の第一位となり、十四句の川村好郎氏がそれにつづき、十二句の本多柳志氏がそれを追い、十句入選の木村十悟氏、永松東岸氏（岡山から出席）河井庸佑氏、林夢虹氏ら以下が肉迫し、それぞれ賞品を受け、路郎先生選の「自慢」の披講まで緊迫感にあふれる五時間であった。36年度の火ぶたはもう切られていた。

昭和35年度 ベスト・テン

一	松江梅里	二六・〇	大阪
二	須崎豆秋	二五・〇	大阪
三	橘高薫風子	二四・五	大阪
四	金泉万楽	一九・五	大阪
五	永松東岸	一八・五	岡山
六	津田麦太楼	一六・五	岡山
七	北川春巣	一六・〇	大阪
八	小浜牧人	一六・〇	西宮
九	本田恵二朗	一五・五	岡山
十	丸尾潮花	一五・〇	大阪

三賞　殊勲賞・津田麦太楼　敢闘賞・木山二路・技能賞・林夢虹

十一	武部香林	一五・〇	岡山
十二	内藤きさ子	一四・〇	岸和田
十三	長谷川三司	一三・五	尼崎
十四	不二田一三夫	一三・〇	大阪
十五	浜田久米雄	一三・〇	岡山
十六	木山二路	一二・五	笠岡
十七	市場没食子	一二・五	大阪
十八	林　夢虹	一二・五	豊中
十九	山川阿茶	一一・五	大阪
二十	西川　晃	一一・〇	大阪

川柳不朽洞会（四月現在）

指導
麻生路郎

賛助
長谷川一徹　中田守雄　白川朋吉　中村祐吉　田中辰二　岩崎愛二　中村直勝　麻生磯次　井上吉次郎　島浦精二　恒藤恭

洞友
田村孝之介　山本雨迷　山路閑古　柴谷宰二郎　麻生馥乃　橋本緑雨　高鷲亜鈍　沢田四郎作　東野大八　速水真珠洞　中島紫痴郎　戸倉普天　戸田古方　西尾栄　市場没食子　土井文蝶　若本多久志　川村好郎　中島生々庵　奥村丹路　上田翠光　木村孤浪　直原七面山　西森花村　河村日満　足立春雄　榎南夏六　石川侃流洞　安岡珊枝郎　牟田一哲　河村瑞川　木村千容　田垣方大　野村味平　木村水堂　福田丁路　真鍋一瓢　佐野白水　後藤梅志　平尾太希志　木口賀峰　小西雄々　菊田いさむ　山川阿茶　岩崎一伸　金井文秋　伊藤茶仏　那谷光郎　中島小石　吉田水車　大西八歩　石曽根民郎　石井白面人　布施筑川　桜川不水　浜田久米雄　菊沢小松園　山田季賛　山本葉光　若林草右　大西迷窓　浜畑胡蝶　阿形一杉　益永貞女　長谷川三司　大森娯句楽　服部十九平　青木遊星　福島鉄児　黄瀬美秋　岸南柳　三輪晩翠　大坂形水　井上湧三　西垣錦風　築山快夢起　市岡暁舟　白砂旋風　藤本満年　須崎豆秋　羽佐間柳葉　福田妄夢　吉田圭井堂　国弘半休　長野井蛙　友淵貴山　太田良子　小川恒明　徳永雅美　新川博也　尼崎緑之助　水谷竹荘　弘津柳慶　杉谷湖山　増田耕民　佐野卜占　小沢史葉　大鶴喜由　山口秋花　野本香水　小林文月　亀山晴峯　山根白星　冨岡淡舟　飯降白香　西辻竹青　浜畑胡蝶　山田烏荘　山本葉光　田村藤波

不朽洞会員

―特別会員―
中島生々庵　奥村丹路　上田翠光　木村孤浪

―特持会員―
寺井鋭々　古川魔花麗　前山北海　三輪晩翠　大坂形水　井上湧三　西垣錦風　築山快夢起　市岡暁舟　白砂旋風　藤本満年　須崎豆秋　羽佐間柳葉　福田妄夢　吉田圭井堂　国弘半休　長野井蛙　友淵貴山　太田良子　小川恒明　徳永雅美　新川博也　尼崎緑之助　水谷竹荘　弘津柳慶　杉谷湖山　増田耕民　佐野卜占　小沢史葉　大鶴喜由　山口秋花　野本香水　小林文月　亀山晴峯　山根白星　冨岡淡舟　飯降白香　西辻竹青　浜畑胡蝶　山田烏荘　山本葉光　田村藤波

―正会員―
吉田水車　大西八歩　石曽根民郎　石井白面人　布施筑川　桜川不水　浜田久米雄　菊沢小松園　山田季賛　山本葉光　若林草右　大西迷窓　浜畑胡蝶　阿形一杉　益永貞女　長谷川三司　大森娯句楽　服部十九平　青木遊星　福島鉄児　黄瀬美秋　岸南柳　三輪晩翠　大坂形水　井上湧三　西垣錦風　築山快夢起　市岡暁舟　白砂旋風　藤本満年　須崎豆秋　羽佐間柳葉　福田妄夢　吉田圭井堂　国弘半休　長野井蛙　友淵貴山　太田良子　小川恒明　徳永雅美　新川博也　尼崎緑之助　水谷竹荘　弘津柳慶　杉谷湖山　増田耕民　佐野卜占　小沢史葉　大鶴喜由　山口秋花　野本香水　小林文月　亀山晴峯　山根白星　冨岡淡舟　飯降白香　西辻竹青　浜畑胡蝶　山田烏荘　山本葉光　田村藤波

るのである。

出席者—路郎・一三夫・好郎・十悟・凡茶・阿茶・文蝶・八郎・庸佑・圭井堂・水客・多久志・水京・酔升・柳宏子・仙月・絢志・静馬・萬楽・東岸・舟遊・生薑・すゝむ・南宗・雄声・東天紅・徹也・夢虹・潮花・薫風子・計光・春巣・きさ子・白柳・生々庵・狂二・敬太・宏子・梅里

（F）

兼題「うれし泣き」　松江梅里選

（三才と輪吟だけ発表）

うれしなきもう離すまい離れまい　生薑
これしきの孝行へもう涙ぐみ　水客
迷い子も母も泣いてる交番所　静馬
うれし泣き涙は熱いものと知り

兼題「奇蹟」　不二田一三夫選

学問が奇蹟を奇蹟としておかず　阿茶
たまさかの奇蹟を邪宗持ちあるき　藤波
運のいい医者は奇蹟に行きあたり　藤波
遭難の奇蹟へマイク容赦せず

兼題「プロポーズ」　楠高薫風子選

ライターが一度でつけばしようプロポーズ　夢紅
もう尻に敷かれたようなプロポーズ　潮花
ぼくの子のママになってとプロポーズ　康之介
新劇のセリフめいたるプロポーズ

兼題「曲り角」　金泉万楽選

曲り角陽が温かい靴磨き　潮花
ここまでは運でこられた曲り角　すゝむ
贅沢な薬人生の曲り角　凡茶
栄転へおごってならぬ曲り角

兼題「足跡」　永松東岸選

足跡をたどれば空巣つまみ食い　康之介
宿替えへ足跡きれいに拭いて行き　夢虹
足跡を残して貝も見付けられ　凡茶
足跡をくすさず春の雨溜り

席題「狸寝」　林夢虹選

肝心のとこで狸寝ねてしまい　すゝむ
きき捨てにならんと狸寝がばと起き　十悟
狸寝も上手養子も板につき　柳志
狸寝のいびきうっかりして忘れ

席題「春風」　北川春巣選

わらび餅の旗が目につく春の風　きさ子
ビラ変えたホームを春の風がすぎ　柳宏子
ふところが寒いままなり春の風　梅里
春風を切って囲参京へ着き

席題「姿」　丸尾潮花選

落ちぶれて後姿に気を使い　水客
生きている姿通天閣からながめ　好郎
食うための姿拾い屋恥とせず　春巣
もう一度立たせて姿たしかめる

席題「つつ抜け」　内藤きさ子選

子供から姉の不縁がつつぬけに　夢虹
つつぬけになってる落第まだかばい　舟遊
つつ抜けを勘定にいれて云うてやり　柳宏子
つつ抜けがわかり真相みな話し

席題「浮気」　山川阿茶選

旅先の浮気桐の間まですすみ　徹也
浮気する蝶サボテンにさされたり　舟遊
浮気ぐせ養老院でもまだやめず　一三夫
あの浮気へ眼をつぶる程病みつけ

臼井三林坊　小倉へとち　本多柳志　高津徹也
稲葉鳩花　早川清生　原谷独仙　横山紫光
下山清潮　武部若菜　大谷月都　工藤甲吉
木田恵二朗　西出一栄　江国豌谷　門永三舟
松川杜的　酒田清子　光好陽子　伊原明林
馬場夢生　平井井平　徳永鬼美　藤村梨花
村上ゆづる　阿部柳太　河相すゝむ　梶谷冬生
森本法泉子　西田柳宏子　野呂鵜汀　小林孤呂二
小池しげお　辻圭水　櫃口舟遊　舟木与根一
竹内圭三　松岡委滄浪　高野むじな　室田千尋
松村万古　中松恒雄　辻白溪子　鳥木泰
津田麦太楼　杉本辰一　吉原紅月　林夢虹
浜野奇童　安部立美　竹内千里　吉木菁風
橋本幸男　野口迷羊　欄蘭　山本一傘
高崎雄声　児島与呂志　石倉旅風　杉前南宗
高橋操子　野々口美舟　魚住満潮　建沼康之介
藤井明朗　太野水葉　田中狂二　今西生薑
永松東岸　小浜牧人　林昌男　室井八九寸
野田素身郎　菱田満秋　村上旭童　川竹松風
永藤弥平　前川左文字　大前鳴恍　内海敬太
神谷凡九郎　池上知恵美　福田多可志　横山一声
清水望峰　平田三十郎　森田若人　関戸宗太郎
川端鬼酔　西尾青一路　岡嶋芳道　高山涼髪
木村十悟　橘高薫風子　北村三歩　安平次弘道
伊達堰子　甲村九呂平　米虫一乃字
坂田東洋男　多田ほなみ　傍島静馬
志水礼司　山田伊三男　木山遠二
不二田一三夫　岡沢凡志　中谷ハナ子
酒井ひか平　宮口笛生　村山光輪
長尾越鳥　桝本露児　野村岬月
深見雅堂　石坂新雪　平沢保美
松下京一楼　城内吾柳　森下愛論
津秋六花　西川晃　加藤繁雄
丸川初甫　梅木宗一　植村客遊子
戸田喜楽　田中蛙眠子　宗高矢寸志
笹野旭泉子　野田一念　河井庸佑
新岡回天子　山本立児　小島さぎす
池田古心　林葵丘　藤村〆女
石居高志　仲どんたく　田中烏雀
三村柳風子　久家代仕男　谷沢好祐

一路集

末座

市場没食子選

後援会末座へ義理の顔を出し　ひろし
末娘を貰い末座へかしこまり　白葩
茶菓子もう末座の方は空になり　可住
大過なく末座けがした二十年　どんたく
反対がないかと末座まで眺め　庸佑
慎ましく末座でお通夜もあぐら　繁太郎
末座から酌いで校長如才なし　むじな
末座へも社長の機嫌酌ぎに来る　弘道
酔えば又末座軍歌唄い出し　周甫
末座から声が低いと出る苦情　圭井堂
末座の唄った音痴から座がはずみ　光一
シャッターが末座の一人にまだ切れず　藤波
お流れを催促に来る末座なり　瑞歩
妓の帯か末座は手酌して晩み　光郎
末座から見る接待の同化ぶり　生薑
お通夜の末座へ内縁座らされ　花美
ペチャクチャと女末座に集って　蕗児
今日からは臨時雇と言う末座　蓑流
早客が一人末座へすわってる　川鳥
末座もう酒が切れてるとも言わず　鵜汀
火鉢の灰をいじっている末座　季賛
下心あって末座へいい愛想　文庫
総会が末座の動議からもつれ　淀月
末座から混んで入口もうつまり　孝風
末座だけいやに混んでる婦人会　天悟空
入口を末座にしてて邪魔がられ　平々
アカハタを唄って末座ごねはじめ　実男
おとなしく末座に腰の低い人　祥月
ハンサムは末座芸妓にもてること　雪美
大関も幕内尻でちとあわて　光福
末座からひょうきんなのが踊り出し　一鶴
末座から尻をからげたかくし芸　一休
若い妓の義憤末座へ酌ぎに来る　葵丘
末座から下手な余興が立ち上り　たけお
三味線が末座の方へ寄ってゆき　愛鳩
ハイフーチャンなどと末座が面白し　与根一
人通るたびに末座は席を立ち　鵜汀
婚礼の末座背広でかしこまり　山椒坊
末座から見ればどいつものろけ面　九呂平
気の乗らぬ話末座で腰が浮き　青園
争うて末座へすわる新入社　光郎
末座同志で気安う話をし　鮎子
如才ない銚子末座を廻って来　井蛙
尻上げぬ末座へ幹事酒を持ち　笑太
盃が返らず末座飯にする　蜻蛉
万場寂として末座の意見聴き　みのる
中座するつもり末座へかしこまり　文庫
講習へ常着のままに来て末座　草々
定刻に末座の方はみな揃い　十九平
自己紹介末座の方は名だけ言い　十九平
裕次郎張りの末座にくわれがち　恵二朗
名指された末座みんなを振り向かせ　八九寸
くじ引で決めた末座が気に入らぬ　雪峰
そこは婦人席と末座追い出され　雪峰
末座から表彰状を受けに立ち　旭峰

人

先着の気まま末座へ席をとり　ひか平

地

末座から人間臭い唄になり　代仕男

天

面映ゆく末座へ並ぶ色直し　和三郎

軸

末座での笑い上から仇名つけ　同

ブルジョア

長野文庫選

ブルジョアの気持で乗った一等車　照児
ブルジョアの恐怖は高い塀をつき　弘道
ブルジョアのわりに勘定高いなり　鮎子
ブルジョアのザーマス金ぶち眼鏡で来　葵丘
ブルジョアの型で熱海の駅を降り　和三郎
ブルジョアの隣の母娘が小そう住み　たけお
ブルジョアのなす事する事気にさわり　庸佑
ブルジョアの犬まで小面憎い顔　同
ブルジョアのこんなこまかいところあり　どんたく
足音もやっぱりブルジョアらしい音　秀峰
こせこせとブルジョアらしくない小言　蜻蛉
ブルジョアの知らない家計簿の苦労　可住
ブルジョアの襟度は安いのが買えず　同
ブルジョアの懇談血圧からはじめ　光道
ブルジョアの云い草いちいち癇にふれ　一鶴
ブルジョアは子まで鼻持ならぬ顔　光福
ブルジョア他人が馬鹿のように見え　卯之助
ブルジョアの息子で派手に飲み歩き　竜蔵
指定席さすがブルジョアらしく占め　繁太郎
口ほどにブルジョア金のない生活　山椒坊
ブルジョアが何だ裸のままが好き　蓑流
宝くじブルジョアの夢今一度　九呂平
ブルジョアの夢この一枚の宝くじ　酔夢
ブルジョアと云われ借金おいて死に　無閑
ブルジョアの名残りとめた庭の石　同
ブルジョアのつもりで芝生叩いて来　たもつ

色紙短冊
書画用品
大阪成ばし筋
丹青堂
電南七二一七二二

ブルぶらぬブルで歌詠み筆もたち　八九寸
ブルジョアは虫が好かぬと子のドライ　藤波
ブルジョア暇と金とを持て余し　青園
ブルジョアのやっぱり悩むことがあり　柴光
ブルジョアは金で始末をつけたがり　同
ブルジョアの暮し勿体ないことばかり　南牛史
ブルジョアで無くてよかった記事を読み　実男
ブルジョアの表の門は閉まり切り　保夫
ブルジョアがよけて通った赤い羽根　川鳥
ブルジョアの奥様らしい銀狐　雪美
ブルジョアを先ず上座へと座らせる　蛙水
ブルジョア朝から留守のように閉じ　草々
ブルジョア寄れば利潤のことにふれ　代仕男
ブルジョアの指輪で僕の家が建ち　愛鳩
小説のようにブルジョア馬鹿でなく　むじな
ブルジョアの子の先生の気が疲れ　十九平
ブルジョアの気分に代理で来てひたり　同
ブルジョアになった気で居る宿の椅子　天悟空
労組の中にブルジョアの息子居り　ゆたか
ブルジョアは他人名義で株を買い　生薑
低姿勢でブルジョアらしい顔もせず　旭峯
ブルジョアになる気もないしなれもせず　露児
ブルジョアに分らないだろボーナス日　えく呆
今日はブルジョアだよとふところを叩き　恵二朗
ブルジョアが何よと女給酔うて居る　雪峰
金で解決出来ぬ事ブルジョア慌て　圭水
ブルジョアのお腹が空かんのに困り　ひか平
ブルジョアのバスで来て居るネット裏　淀月
ブルジョアの犬も横へい面に見え　圭井堂
金でかたつけるブルジョアへの怒り　孝風

佳

ブルジョアの舌打ちとなるデモの記事　涼人

ブルジョアの不満ゴルフ族がふえ　宗太郎
口を効く割にブルジョア寄附をせず　井蛙
ブルジョアの金にあかしたコレクション　静水
ブルジョアの奥さん熱帯魚と遊び　古心

人

ブルジョアの漫画はビール腹に出来　光郎

地

ブルジョアの目にデモ隊の恐ろしく　一峯

天

ブルジョアの夫婦他人のように見え　鵜汀

軸

ブルジョアの家庭室外つつましい

移り気

菊田いさむ選

移り気な夫に趣味が多過ぎる　卯之助
移り気な人やとひざをつねられる　どんたく
失恋の味を移り気まだ知らず　鵜汀
移り気をこれ見よがしの厚化粧　一鶴
移り気を見抜いた客に誘われる　保夫
移り気は金の切れ目と割切って　九呂平
移り気を好き好きで封し込み　山椒坊
移り気と知らず甲斐性者とされ　無閑
パトロンの移り気愛情すりへらし　宗太郎
酒飲んで見たが移り気にはなれず　竜蔵
移り気を見せて契約金を上げ　実男
移り気は交換してから損を知り　弘村
移り気でいらち株屋のいいお客　生薑
特価品仕立てる前に気が替り　光郎
各派渡り歩いて元の末生流　八九寸

移り気もなくなり平凡な妻と老い　光道
人前で移り気話す倦怠期　圭水
移り気の女末路は二号さん　照児
移り気どころじゃないと妻に惚れ　市郎
移り気がまた髪型を変えてくる　鮎子
移り気とマダムに軽くあしらわれ　雄々
家や子も捨てた移り気まいもどり　周甫
移り気な蝶々を花はじっと待ち　葵丘
移り気がでたのか仕事さぼり出し　たけお
移り気を女難の相と辻易者　初甫
移り気がなくなり老いたなと自覚　孝風
デパートへ来て移り気が尚つのり　恵二朗
移り気へどれも美人に見える夜　雪峰
移り気な心見抜いたショーウインド　草々
上役の移り気もて余す平社員　季賛
移り気がまたこの職が気に入らず　庸佑
移り気を恐れもみ手の御用聞き　代仕男
電話口やっぱり最初の型にしときます　ひろし
人間の移り気うらむダッコチャン　むじな
自家用車もう違う娘を乗せたがり　可住
人一倍移り気な性質で妻は妬け　繁太郎
便箋はその娘の移り気知って居り　木魚
どれ見ても移り気のする百貨店　定月
履歴書を出して移り気見すかされ　藤波
移り気の彼も今度は腰をすえ　庸佑
移り気へもうパトロンが鼻につき　井蛙
移り気をうまく操つるディザイナー　文庫
今日はもうお釣りきっちり取って去に　ひか平
移り気に愛想つかせた離婚沙汰　文庫
移り気が先代からの土地を売り　旭峰
盲愛が移り気な子にしてしまい　恵二朗
移り気の多い女の目の動き　古心

移り気の女冷たい口を利き　井蛙
移り気な今日は蝶ネクタイで逢い　ひか平

佳

移り気でなかった事が遺書で知れ　実男
持っとれば儲かる株も直ぐはなし　圭井堂
移り気に拍車をかけるコマーシャル　涼人
移り気に女房のたな良く締まり　敏明
移り気は四十九日を待たず嫁き　嚶
移り気な心ネオンの色に似て　生薑

人

移り気のようでマダムにシンがあり　愛鳩

地

移り気が予約の品へけちをつけ　十九平

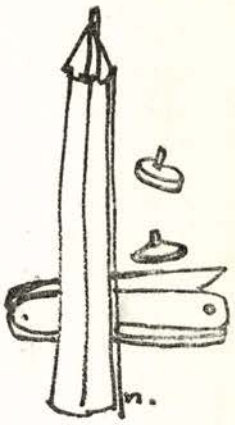
天

移り気を三面鏡に見透かされ　旭峰

軸

移り気な男お女将も呆れ果て

柳界展望



句会

▼本社四月句会は七日（金）午後六時から、上六の関西会館三階（天王寺電話局東隣）会場で開催春宵一刻を作句三昧に過されるよう柳友お誘いの上多数のご出席をお願いする。▼南区医師会文化部杏林川柳句会は三月二十八日（火）午後七時半から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は三月二十四日（金）午後五時半から黒田国光堂で開催。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）は三月二十三日（木）難波親和クラブで開催。▼大阪逓信病院句会は四月十五日（土）午後二時から五階会議室で開催。▼関西電力奈良支店文化部川柳会は三月二十五日（土）午後一時から発足記念句会を開催。▼大万川柳会（大阪市）十周年記念句会は三月十九日（日）午後一時から阿倍野区松崎町の割烹「大万」本店楼上で開催。以上路郎主幹出席。▼川雑岡山支部三月句会は十八日（土）日赤岡山支部で開催。▼岡山電報局ゆめ川柳会三月句会は十四日（火）光好陽子居で開催。▼川雑下関支部三月句会は十二日（日）下関駅会議室で開催。▼ひろしま川柳会第二回例会は三月十五日（水）午後六時から広島駅二階会議室で開催。▼国鉄中国支社川柳大会は二月二十五日（土）午前九時から広島鉄道職員会館で開催。▼岡山県下川雑各支部連合春季吟行大会は四月十六日（日）午前十時半から後楽園簾池軒で開催、兼題は公園・玄人・世論・別居。▼川雑奈良支部創立句会は四月二十五日（土）奈良高校で開催。路郎主幹の「川柳に就いて」の柳話がある。▼柳新芽を偲ぶ川柳大会は三月二十六日（日）午前十時から新津市駅前一平会場で開催。▼田中鳴風句碑除幕式並に八代川柳研究会十五周年記念川柳大会は四月二日（日）午前十一時半から八代市古麓春光寺広間で開催。兼題先生・旅・春・光・寺。▼第三回近県川柳大会は五月二十一日（日）雲仙ユースホステルで開催、兼題、雲仙・ショック・去年・裏・かたつむり、投句は百円封入の上五月五日迄に長崎市平戸小屋町二〇烏巣幸柳宛。▼作北川柳一周年記念句会は四月十六日（日）午前十時から奥津町大釣磐若寺温泉で開催兼題、下車・川風・新婚・握手、会費百円、投句は四月十五日までに八円切手四枚同封の上岡山県苫田郡上斉原村渡辺楽天方作北川柳社宛。▼臥牛くらぶ結成四周年記念川柳大会は四月九日（日）午前九時半から岩船郡雲母温泉清流荘で開催。兼題、鬼・舞台裏・人みしり・世界一・学生力士、会費百五十円、投句は新津市新栄町山田加勢夫宛。

消息

▼路郎主幹は三月八日大阪市立東高等学校図書室での「国語研究会」に出席、現代川柳の動向について講義をされた。聴講者は国語の先生方と市教育委員等で好評を博された。▼川村好郎氏（大阪府）は三月十二日（日）丸紅飯田川柳会の吟行句会に出席、近江阪本の芙蓉園に遊ばれ、早春の谷川の音を満喫された「この次はアベックで来よう京も春」▼梶川蘇堂氏（西宮市）は三月十六日、急に思い立って北陸路に遊ばれ、金沢から「残雪の下黒々と蕗の薹黄緑」の句信を寄せられた。▼津秋六花氏（宇部市）は昨年二月自動車の運転を誤り谷に墜落右足を負傷、引き続き五月には肝臓を病み難渋されたが、昨今は元気に

川柳

親ごころ子心

若本多久志著　麻生路郎序

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中からよく拾い蒐めたのが本書である。親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気登載された柳人三百余名、集句二千余句の愛情が如何に深いものであるかを知ることの出来る、実に有意義な書である。

価 150円
送費24円

風流

人間横丁

東野大八著

B6型　二五八頁

価 250円
送費32円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランな人生批判が、そのまるで雄筆のごとくほとばしるさまは凄い。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたる雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

高鷲亜鈍著

詩川柳考

B6型函入　定価三百八十円　送費四〇円

★著者は曽て創生期ごろの超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した／今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す／ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る／凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。（切手代用可）

発行所　大阪市住吉局区内万代西5丁目25　川柳雑誌社　振替口座大阪75050　電話大阪㊥6081

近くの得意廻りもされるまでになられた。▼高橋月南氏の句碑を近く奈良県生駒郡平群村椹原の正光寺前庭に建てようと深井凡々、山下岸柳両氏のきも入りで、月南氏を知る人たちの間へ話がすすめられている。月南氏は大連で「川柳大陸」を主宰され弘く川柳界に知られていられたが、内地に引きあげ後は奈良県平群村に十余年を過ごし、現在は神戸市灘区備後町五の十九に老後を静かに送っていられる温厚な老川柳人である。建立の予定は昭和三六年八月中旬で句費協賛費は一口五百円（記念品除幕式を含む）とのこと。連絡先は奈良県生駒郡平群村椹原、深井凡々（章）氏へ。▼三鴨美笑氏は二月病のため松江の病院に入院加療されて居られる。▼八木摩天郎氏（堺市）は三月十一日、母校の堺市立綿小学校の創立八十七年の沿革並に学区変遷座談会に出席、文化面に活躍の郷土出身者について詳細に述べられた。又、十二日には奈良県月ケ瀬へ観梅に行かれたが、梅はまだ二、三週間もしないと満開にならない状態であった由。▼川雑下関支部員藤田蘇人氏は山口駅長に、岡藤四郎氏は下関電務区長にそれぞれ栄転された。▼高須唖三味氏（東京都）は三月八日、上京中の脇田梅子女史と銀座でコーヒーを飲みながら歓談された。▼国際文化協会第一回文芸作品展は一月二十七日から二十九日までの三日間、長崎市中央公民館で開催、池田可宵氏等の川柳のれんが出品された。▼杉本一鶴氏（貝塚市）は主治医のすすめで毎日使っている試薬品の副作用の為か全身の倦怠甚しく終日気が抜けた状態だが、近作柳樽欄への投句には全力をふりしぼって居られ、元気快復して本社句会に出席出来る日を夢にまで見て居られる由。▼長谷川三司氏（尼崎市）は三月十七日所用で岡山へ行かれ、武部香林氏を訪問お見舞いされた。閑静な環境のせいか目の方も少し良く家の中では自分の事にことかかぬ御様子だったとのこと。▼原独仙氏（出雲市）の令息章峰氏は二月二十五日結婚、出雲市商工会館での披露宴には尼緑之助氏を始め柳人の多数が出席会場には各地から寄せられた祝吟の色紙短冊二十数点を展示し川柳色を大いに出して、八十名の出席者に感銘を与えた。▼田口麦彦氏（熊本市）は電々公社の大学委託研究員の選抜試験にパス、四月から一カ年間九州大学法学部教室に籍を置いて研究に専念される。▼奥津唐一朗氏（東京都）は二月二十四日胃潰瘍のため国立東京第二病院第二病棟に入院手術されたが、経過良好で三月十五日退院された。胃を⅔も切除されたので三度の食事を六度にも八度にもしていられる由。

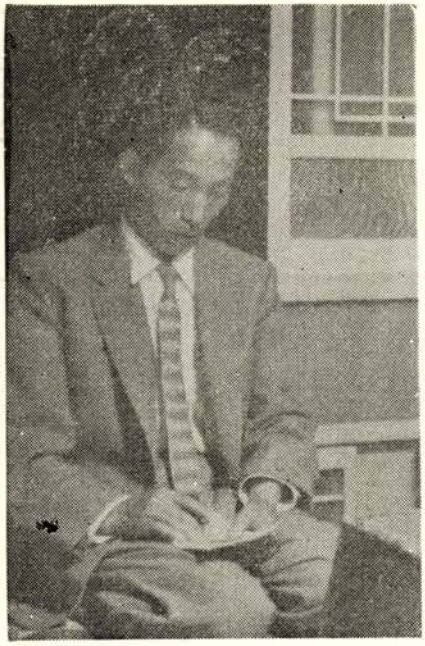
句集

▼大万川柳第十輯、十周年記念号（非売品）が昭和三十六年三月十九日大阪阿倍野区松崎町三ノ一〇大万川柳会から刊行された。

慶弔

▼松江梅里氏（大阪市）は三月四日午前十一時令孫を儲けられ泉さんと命名された。およろこび申上げる。▼後藤柳悦氏の母堂後藤ナヨ刀自（故後藤蝶五郎氏夫人）は二月上旬逝去された。年五十六謹悼。

不朽洞の人々



主店書堂秋文井金

予定通り行くのは齢の数ばかり

（文　秋）

本社句会で五年、雑詠で八年休みなしと云う記録を持っている私ですが、此頃になって川柳の深さには辟易して居ります。いささかスランプ気味です。

痩せているのは、三女一男に躰をかじられている姿です。川柳でもこれ位痩せる程勉強すれば、もっとよい句が出来るのですが……。

須崎豆秋著
川柳句集　ふるさと
価一〇〇円〒共
明和病院句集
句集　明和
価一〇〇円
送費一六円
取次　川柳雑誌社

不朽洞会から

電話番号変更

▼川柳宮城野社の電話番号が変更になった。電話㊥六七二五番

（薫）

★常任理事会——三月二十五日（土）午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催される。議案——川柳まつり・川柳吟行・其の他

★新会員紹介

三　月

▼高山涼髪（石川県）正
—一三夫氏推薦

▼安平次弘道（あんぺいじこうどう）（美称市）正
—半休氏推薦

（多）

☆

「西夏」文字

不二田一三夫

中国大陸の西北部に栄えた西夏(セイカ)国の文字は、難解複雑でその解明はナゾとされていたが、このほど、京大文学部言語学教室西田竜雄教授がその文字の構成方法や文法の解明に成功したことは、すでに新聞紙上でご承知のとおりである。

約千年前のことであるらしいが、六千百三十三字にわたる「西夏文字」で経典、文学作品などをつくったといわれている。

昭和二十九年、国語審議会が補正を加えた新当用漢字は千八百五十字だった。これからみて、西夏国の文字数は相当ぼう大なものである。しかも劃数においても二十劃近いのがたくさんあるようで、記憶術の本でも読まないとちょっと覚えにくいのではないかとおもわれた。

おもしろいのはこの西夏文字が組み合わせによって出来ていることである。たとえば〃沈〃は「水」と「重」〃胃〃は「腹」と「袋」〃洪水〃は「水」と「怖」というように、必ず二つの意味の文字が組み合わされているのである。

「腹と袋」で〃胃〃と読ますのはちょっと愉快ではないか。「水と怖」で〃洪水〃とは今も昔も変わりないようで、水魔に対する文化とはあまり進んでいないようでもある。

魚の弱いのを鰯(いわし)と読ませたり、木が二つで林、三つで森といったように、われわれも組み合わせの文字を使っているが、魚の文字が全部消えてしまったのはさびしい気がする。「鯨」はのこっているが、鯨は魚類ではないし、「鮮」もサカナではないから残したのであろうか。

めでたい時の「鯛」や、五月の空を泳ぐ鯉のぼりの「鯉」ぐらいは残してもらいたかった文字である。

太い馬が「駄」馬(だば)なんて、おもしろい文字だと思うが「だ馬」ではピンとこないようである。「いけない」ことを「駄目」と云うが、なぜ「駄」と「目」で〃いけない〃意になるのか、シロウトのぼくにはわからないが、このレジャー時代にこんなことを研究するのも、川柳に使う文字のためプラスになることが多いのではないか。

金泥集

課題「机」

麻生葭乃選

冷静になれと机のひややかに　若菜
いかめしいデスク昔の友でなく　同
きのうの事みんな消したい机拭く　同
お隣りの机も借りるめでたい日　きさ子
泣いた児へ机の角は叱られる　同
机買うてやっても畳の上で書き　同
机丈立派成績ビリでゆき　小石
花嫁の机今日から何をかく　同
花一輪生けて女の子の机　同
不慮の死の机へ学友花をさし　阿茶
チャブ台を机に高校首席なり　同
兄ちゃんと仲間の机ひとまさり　同
うたたねの机へ母は夜食もち　良子
ボーナスを机の上に置き忘れ　同
定年の机にうしろ髪ひかれ　一栄
一年生親が張り切る机買い　同
花一輪机の上にあるムード　清子
退社後の机無表情に並べ　同
机一つ置いて株式会社なり　春栄
ロカンボのリズム机も音をたて　同
母来たと留守の机にメモがあり　奈良子
経机父母なき孫のいとおしく　同
マンモスのビルも机で製図され　葉乙女
決裁を机で待って社長るす　同
横着者机の下は掃きのこし　周甫
定年が近い机をなでまわし　同
ミカン箱の机が生んだにあんちゃん　酔夢
大机なるほど社長らしく居り　同
何時の間か子供机に鍵をかけ　後江
あけ渡す机の傷をそっとなで　同
机だけポツンと待ってる山の事故　都詩子
課長留守今日は机が椅子になり　徳子
文机持たせて嫁った娘が無沙汰　知恵
思い出も傷も残さぬデコラ張り　白美
幼稚園昼寝の台にする机　由子
経机昼うぐいすの聞ける窓　葭乃

次回題「茶柱」　〆切四月末日

第一製薬
東京・日本橋

精がつく薬
パント錠

副腎・肝臓強化

副腎に効くパント錠は
精がつきます。疲れがとれます。

疲労・中年過ぎの精力、体力の衰え
二日酔・肌あれ・アレルギー性疾患

20錠・50錠・100錠

花地物壇

いのちある句を創れ

投稿規定　▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社　三月の会（大阪市）

3月7日　午後6時

会場――関西会館

会場が変ったのと句会案内等の遅、欠配がたたり、出席率の最低記録を作ってしまった。

新会場である関西会館は、静かなこと美しいこと明かるいこと、そして広いこと、句会場としては非の打ちどころのない大和室である。ガラス越しに上六近鉄の高層建築が目の前だ。

黒川紫香氏が「ストと改札口」と題して、スト風景の体験談を柳話された。

山川阿茶氏から尊父、令弟の年忌の供養の菓子が寄贈され、ありがたや、ありがたやの舌鼓を打つ。文蝶氏のコント柳話もあり和ごやかな三月句会であった。

不朽洞賞杯は不二田一三夫氏が握る。（F）

出席者―路郎・瑞歩・一三夫・文蝶・圭井堂・柳宏子・摩天郎・栞・八郎・愛論・すゝむ・紫香・静馬・生々庵・薫風子・潮花・梅里・水京・多久志・蕗路・文秋・紡毛・徹也・三司・東天紅・いさむ・舟遊・大丘子・菁風・白柳・たねお・南宗・恒明・繁雄・阿茶・庸佑・宏子・霞乃

兼題「先代」　麻生路郎選

先代が死ぬとかまえをぐっと変え　紫香
先代の亡霊にまだ叱咤され　薫風子
落ちぶれていても故郷では旦那はん　知恵美
先代の名前で来る年賀状　水京
先代に入れ知恵もした一昔　徹也
レジャーブームを先代は笑うらん　薫風子
先代のつもりで貸したのが不覚　圭井堂
先代は政治ぎらいで押し通し　摩天郎
先代の女好きだけ跡を継ぎ　一三夫
先代の眼鏡が狂うた養子也　生々庵
大器晩成先代に信じられ　恒明
先代を褒めると御気嫌ななめなり　恒明
先代の自慢の床へホームバー　夢虹
先代をたすけた母がえらかった　舟遊
先代は清濁併せて飲めた人　八郎
先代のかくし子が出た百か日　圭井堂
養子だけ先代の遺志まもりぬき　紫香
七回忌先代知らぬ社員殖え　阿茶
先代の悪口も言える人であり　水客
先代の包丁ばかりほめて去に　失名
禿げぶりも見事先代様に似る　三司
番頭の愚痴先代は先代は　蕗児
先代はと畳を叩くいやな義母　紡毛
有難くない先代をつぐ坊主　綾女
先代はケチケチ貯めただけで死に　失名
ごひいきの大根先代生き写し　たねお
先代が顎からにらむ応接間　静馬
先代は敷かれておらぬ養子にて　失名
先代と時代も言わずくらべられ　阿茶
先代の頃の社員を煙たがり　夢虹
先代に似ても似つかぬ下戸が出来　一鶴
先代のきらいなネオンつく社屋　どんたく
先代の苦労はばあやだけが知り　泉洋
先代は女中をさんづけ気に入らず　八九寸
先代の徳が不渡り食い止める　失名
先代の遺した二号もてあまし　生々庵
先代も若い時はと祖母かばい　弘村
先代の無言がいっそ偉人にし　一三夫
ltsぐらいで先代外遊し　路郎

兼題「小心」　清水白柳選

小心な娘だったが恋すれば　八郎
小心者また手土産を提げてくる　薫風子
小心の浅い知識を広う持ち　舟遊
大役に小心ウロが来て終い　恒明
ひかえ目にして小心者にされ　庸佑
小心なとこが女に好かれとり　多久志
小心をゆすぶるような事を言い　南宗
嘘一つ言えず小心事務の隅　愛論
金を貸す掛りへ小心者を置き　文秋
ドア三分目小心者がのぞき込み　東天紅
小心の温厚と言うかくれみの　どんたく
小心の泣くにも酒の勢を借り　生蓋
貧乏に暮らして小心者となり　牧人
小心者ですという挨拶のこわいこと　栞
小心な養子養子をよく務め　三司
小心を鉄砲鍋で見破られ　たねお
小心とわかる小鼻の汗を拭き　生蓋
小心に非ず用意周到さ　栞
小心の方へは皆が賛成せず　季賛
小心の無口が恐い程続き　泉洋
二十貫もあるのに夜道よう行かず　夢虹
おばあちゃん小心な兄の味方なり　阿茶
小心な男に似合う懐手　水客
小心なヤクザはすぐに人を刺し　菁風
小心を両親だけは知って呉れ　文蝶
小心はよう素見さず買うて出る　一三夫
損な性分でしてと小心酔いきれず　生々庵
小心がつい後になり先になり　東天紅
小心の鉢巻一番後で〆め　阿茶
小心の父をみんながけしかける　すゝむ
恋猫がうらやまし小心なよろめきに　紡毛
気の小さいのがブレーキの役をする　牧人
ヌードの切符にてれている小心　白柳

兼題「ガラ空き」　小川恒明選

ガラ空きで運転ちょっと荒くなり　泉洋
ガラ空きにハット気づいた乗り過ごし　季賛
野党席ガラ空きのまま鳴る拍手　すゝむ
ガラ空きの電車小唄を乗せてゆき　宏子
スクリーンはガラ空きなんぞ気にしてず　潮花
ガラ空きへ掏摸出直して来るつもり　南宗
俺だけの貸切りかいなこの電車　多久志
ガラ空きの食堂なのにまだ出来ず　新石
ガラ空きのまま発車する定期バス　庸佑
ガラ空きのバス車掌も腰をかけ　愛論
ガラ空きに席変わりたい指定席　いさむ
時代には勝てず歌舞伎のこの不入り　圭井堂
すしづめの隣りはガラ空き一等車　生々庵
ガラ空きになっても車掌座れない　舟遊
ガラ空きの映画冷房ききすぎる　阿茶
ガラ空きを気にして科白またもり　文蝶
ガラ空きとなるまで見張る執達吏　生蓋
ガラ空きへ感激のないホームラン　牧人
ガラ空きのバスがあとからついて来る　圭井堂
僕ひとり乗るガラ空きのバス止る　水客

兼題「予想」　金井文秋選

経験を生かして予想屋で暮し　泉洋
うら目うら目と予想屋泣かせの日となりぬ　一鶴
蓋開けりゃ予想を裏切る票となり　繁太郎
税務署が予想した程もうけてず　どんたく
株買うて将来性を温める　牧人
予想した程ボーナス入ってず　庸佑
予想記事どちらも勝てるように書き　牧人
絵にかいた餅と予想を信じてず　生蓋
傘持って出たから雨もまた楽し　恒明
あくまでも予想でつせと抜目なく　蕗児

はずれたらはずれた予想面白し　生々庵
予想表破り競馬を寒う出る　紫香
予想外でしたと拍手に涙ぐみ　愛論
予想表まるめてポイと風の中　三司
勝敗の醍醐味予想がみな外れ　一三夫
裏切りも予想に入れた票を読み　生々庵
予想外の大物落ちたトップ記事　摩天郎
予想屋の話に決心また変り　柳宏子
下役のあてた予想は忘れられ　栞
予想通り禁酒三日とはもたず　南宗
どう見ても予想通りにゆかぬ仲　南宗
予想屋は自分の予想よう買わず　舟遊
予想通り騰った株は買うていず　静馬
予想して来なかった見合わせ気に入ッ　生々庵
ライバルに負ける予想はしてなんだ　文秋

席題「貫録」　土井文蝶選

貫録の相違ニコニコしてるなり　菁風
貫録があって小使にもなれず　露児
貫録は座っただけでひきしまり　紫香
貫録をはめりゃスローモーに歩き　栞
貫録はつべこべ喋らなくてよし　恒明
貫録か和装の中に生きかえり　徹也
刑務所を出てからアニキと言われる身　露児
調べられてる方が貫録見せている　紫香
二代目の貫録舞台の由良之助　阿茶
失業してその貫録をもてあまし　露児
チンピラのチト貫録が不足なり　三司
貫録があって文句を言わせない　舟遊
床柱貫録のある咳払い　梅里
貫録充分ふんどしかつぎは言えず　静馬
貫録はまず聞く方になって居る　菁風
貫録に押され虚勢のただ空し　紡毛
とりまきをつれて貫録つけたがり　阿茶
貫録はあれど血止まままならず　瑞歩
貫録をささえる金をかりて来る　潮花
貫録は音がしそうな歩き振り　恒明
すぐ顔に出て貫録の程が知れ　文秋
貫録を見せて女に嫌われる　三司
貫録がよすぎて若長の気に入らず　生々庵
貫録があって湯ぶねを狭うする　文蝶

席題「中年」　八木摩天郎選

中年になったと思う肩が凝り　柳宏子
中年のよろめきだから不安がり　圭井堂
手相観に中年からとおだてられ　圭井堂
幹部みな中年と言う社の若さ　圭井堂
中年の恋だんねと姉女房　生々庵
中年の頃は浮名を遍わせて　大丘子
中年になって女に持てはじめ　紫香
中年になり失敗にたじろかず　白柳
中年の過去を忘れて出直す気　文蝶
中年のチップ要領してかかり　失名
中年になって子無きをあわて出し　一三夫
中年から父そっくりのはげになり　生々庵
恋らしい恋中年になって知り　三司
中年になって女の持つ度胸　すゝむ
中年に出てくる病気とおどかされ　栞
中年になってぼんぼんぐれはじめ　静馬
中年の恋で妻子と別れる気　いさむ
中年の恋はあせりをチラと見せ　多久志
中年のよさをマダムは強く言い　栞
中年になって嫁がぬ肚を決め　静馬
中年のずるさを妓心得る　柳宏子
中年のムードとやらを汚なく見　一三夫
中年へ恋のムードがあますぎる　潮花
中年の頃はと女将ぬりながら　摩天郎
人並みのことが出来てと仲人口　柳宏子
人並みに子供だけは作ってる　水京
人並みの生活させてと赤旗をふり　水京
人並みにせめてと思う親の欲　すゝむ
人並みの事も出来ずにほらを吹き　南宗
人並みの電化に前借り嵩んで来　静馬
人並みの亭主に並みの妻となる　徹也
人並みの文句を並べ行えず　大丘子
人並みに育てましたに不孝者　摩天郎
母親の願いはせめて人並みに　多久志
人並みに無粋な妻も嫉妬する　いさむ
人並みに株を買うたが下りきり　瑞歩
人並みで満足出来ず踏みはずし　阿茶
人並みと言うのが子には重荷なり　すゝむ
人並みの口は利いても出し渋り　梅里
人並みの暮しで馬鹿も言えるなり　三司
人並みでなかった事が今の職　徹也
人並みに甘えて見たいひな節句　東天紅
人並みへ親馬鹿振りを見せられる　恒明
人並みに寄付金だけは集められ　南宗
人並みの苦労したよにボンは言い　柳宏子
人並みという生活へストをやり　一三夫
人並みの基準が違っている世代　すゝむ
人並みと言う限界にきりがなし　菁風
人並みにできる心算で受験させ　瑞歩
人並みと言うその人並みがりたはずれ　生々庵
人並みに左側歩けぬポリスなり　静馬
左に巻いてて人並みの口をきき　潮花
名人に人並み以下のとこもあり　一三夫
人並みに育てて八月児の自慢　圭井堂

雑川　阿倍野支部句会（大阪市）

金井文秋報

駄菓子屋の入口にある三輪車　梅志
関東煮こんにゃくいっち嵩があり　文秋
餌売って老のよるべを鳩と生き　堰子
再起する試歩なり母の肩を借り　一三夫

本社句会　全出席者（三月現在）
愛論・圭井堂・恒明・文秋・一三夫・梅里・すゝむ・徹也・露路・東天紅・柳宏子・阿茶・いさむ・静馬・三司・多久志・舟遊・生々庵・菁風・庸佑・八郎・潮花・水京・董風子・繁雄・宏子・霞乃

しゃばに出て再起の言葉重荷なり　計光
住みなれた街を瞼に発つ再起　すゝむ
眼帯に再起の不安ヒシヒシと　生萱
再起した顔晴ればれと帥へ対い　奈良子
死んだ気でやると再起の決意見せ　庸佑
前科と言う名が再起の道はばみ　光福
ぶざまの気楽さ再起忘れはて　山椒坊

雑川　淀川支部句会（大阪市）

木村水堂選

雪だるま好きな御方に似てしまい　句念坊
もう冬が終った頃に編み上り　幽谷
倍増論が何うの斯うとたき火の輪　六竜子
試験官みな額の顔に見え　東洋男
後添えが狂った息子にしてしまい　陽子
狂ってる男地震へやはり逃げ　清生
何が映っているのか狂った眼　三十郎
バイバイをして明日あると疑わず　若菜
明日という日があるからのなまけ癖　生萱
明日までの命のように飲み漁り　水堂
平凡に生きるか明日を考えず　さぎす
あすと云う日があり奇蹟信じよう　一鶴
明日のない生活ネオンの空しさよ　花村

雑川　にしなり支部句会（大阪市）

後藤梅志選

かいろ灰父も年寄りくさくなり　太郎

腹巻のかいろへそくりも暖める　良蓮
もう牛も見かけない町になり　言也
少年の瞳の中にいる仔牛　利男
稼ぐだけ稼いでタフガイ婚約し　白柳
グラビアを埋めるタフなり週刊誌　大芽
孔雀のように晴着広げて見せてくれ　満潮
同じ晴着近所の人も知って居り　柳志
母も手を通して見たい娘の晴着　太路
和装洋装晴着揃えた空の旅　竜昭
狭すぎる部屋に女房太りすぎ　風草
よう従いて来た女房も変り者　晃
ありがたや節に女房腹を立て　草々
雪に跡のこし猟師も鹿も消え
バスガイドと顔馴染らし鹿の顔　生薑
団体のうしろへ鹿も並んでい　牧人
ちょっと折ってみたいな鹿のつの　慎太郎
パンビちゃんなどと呼ばれて鹿あわて　唯義
どの鹿が偉いでもない奈良の鹿　今雨
神鹿に思い上ったふしがあり　梅志

雑川　**玉造支部句会**（大阪市）

西出一栄報

火の玉の恋が家裁の庭に立ち　一栄
火のぬくみ幻覚にみる迷い道　柳安子
見栄はまだ捨てる気がない火の車　文秋
火が弱しタコ焼店をたたむとし　章子
凍て土を転がって行く莫の火　喜久堂
今までの無事が不思議な火事現場　凡九郎
抜打ちに学友来れば勧誘に　由子
抜打ちの税吏へ帳簿うろたえる　清子
抜打ちの転勤友の目を逃れ　直人
抜打ちの構え殺陣師の云う叱言　六竜子
デイトらし仕度へ課長も気をきかせ　正一
場底のようでないなあ絵看板　守信
絵看板もう春先の人が立ち　梅志

雑川　**ハワイ支部句会**（ハワイ）

築山快夢起選

若夫婦の内緒姑はひがんで見　風草
これしきと思えど母の内緒金　拝山
内緒で買ったドレスを持て余し　内海
内緒に貯めて孝行あてにせず　旋風
内緒とは知らずオフィスで礼を云い　平八郎
何時までも内緒で居れぬ腹になり　紅茶
頑固者近道などに目もくれず　弦月
頑固さは明治の殻を脱けきれず　斧平
年金の余生へ頑固まだつづき　暁舟
あと口の悪い頑固に寝そびれる　泉水
頑固者隣り合せで睨み合い　エス子
頑固者逆らはぬ子が怖くなり　青風
監督の頑固経験だけを云い　須磨子
娘に家出されて頑固が慌て出し　柳葉
下積は頑固の故と気がつかず　緑星
頑固さはまだ隠退へ踏みきれず　魔花麗
頑固さが店の看板変えさせず　いっ生
良縁と明治の頑固が邪魔をする　快夢起
敬遠を意識しながら父頑固　浅太
御隠居の頑固は今に年とらず　紅溪
内緒では言えず呑んでは寝てしまい　銀水
内緒ですと云わぬが花のプレゼント　玉屋

雑川　**広島支部句会**（広島県）

平田越舟報

我家の大事へそくり子まで出し　浄然
首横に振れば空地がまだ上り　上利
冷酒よ胸のもやもや消してくれ　昌幸
金持の空地だそうな見て廻り　美之
冷酒に肴は要らぬ飲みっぷり　洋児
一と息の冷酒の味手で拭い　二三夫
口笛にしても音痴の域を出ず　一荷
貯めるのも限度があると知らず歳　自然
お父ちゃん鳴るよと口をとがらせる　方川
貯める慾電化の慾によろめかれ　越舟

雑川　**大聖寺支部句会**（加賀市）

野村味平報

まんじゅうたべていこうと銭さがす　超（中学二年生）
持参金すぐ口に出す女房面　静夫
テレビ買い頭なやます月末よ　とし子
銭故に浮世の風は裏表　大溪
七癖も二倍にふえて女房老け　佐和子
癖までが父親に似てとはろりとし　美代
女癖知っていながら女負け　一路
癖直す小言へ親の癖が出る　久雄
酒くせが悪く警察におぼえられ　素百々
看病をする気で去ねと嫁がされ　味平
えらそうに言って看病寝てしまい　酔羊
叱るより教えなさいと叱ってい　花江
催促の言訳雪よもっと降れ　金仏
借りた本催促うけて読み始め　魯木
もう我慢ならぬ催促主人が　栄光郎

雑川　**京都支部句会**（京都市）

田中烏雀報

月明の街角さらば放尿す　紫蘭
街角を気負って折れて振り向かず　和三郎
退職金で出した店がある街角　烏雀
街角の地名打たれたままのこり　千潮
雪の街角待ってる恋は重態である　司郎
不器用な妻で手酌のくせがつき　美佐緒
目刺の眼手酌の影にあるうつろ　幸男
記憶喪失そんな出口を求めたし　礫
浮いたウワサなけれど木屋町を歩き　禎一
肩ふれ合う丈でそぞろに歩く　案生子
ついて行くそぞろ歩きはうつむいて　親生

雑川　**備前支部句会**（岡山県）

永淞東岸報

よそ行きの言葉で雑煮祝っとり　草二

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

4月号発売中　130円（〒12円）

特集
澱粉の種類と消化性の相違
人工甘味料の性状と将来

講座
食品官能検査
界面活性剤の利用（6）
パン機械の種類と特徴

◇海外ニュース　◇特許ニュース
◇意匠ニュース　◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

大阪市北区木幡町5-54 電(345)5231-4
食品と科学社
振替 大阪6702番

明治から同じ味の雑煮食べ　吾空
甘酒をほんとにほめた三杯目　正洲
甘酒をよばれ漬物の味をほめ　一声
聳え立つビルも小粒の砂を積み　胡風
大男小粒のおできに悩まされ　輝次
豊年に小粒の米が上を越し　竜泉
ジェット機の小粒が大空二ッにし　秋月
トランジスター買ってステレオ欲しくなり　博

春の土堤子牛は思うまま走り　あやめ
小走りに来る妻を待つ煙草の火　東岸
全快の子を走らせる凧の糸　芳月
朝寝坊走ってバスを止めて乗り　喜百
再会へ走る列車のもどかしさ　水仙
山裾をくの字に縫うてバス走り　伊久野
捨てられる予感小じわが気にかかり　賤女
大望をまだ捨て切れぬ年であり　久米雄
捨てるには惜しいと仕舞う大掃除　明良
泣き声で赤子の気持知る賢母　誠司
焚火の輪鶴の一声ぱっと散り　三六

雑川　浜寺支部句会（堺市）

川村好郎報

寒まいり添わせて欲しいのも混り　多久志
寒まいりきびしやな手の鳴る法善寺　梅里
寒まいりこんな所に居る乞食　文蝶
寒念仏こよいも同じ声で呀え　生々庵
六根清浄凍てる大地に寒まいり　梅志
寒まいり今年は若いのもまじり　東天紅
寒まいりそっと熱燗ひっかける　狂二
どこをどう廻って来たか寒まいり　圭井堂
寒行のうちわ太鼓へつつむもの　徹也
寒まいり紅の鼻緒も切れたまま　武助
ほろ酔いの息子に出会う寒まいり　末一
寒まいり暖冬異変が気に入らず　貴山
流感をつれて帰った寒まいり　雄声
旅慣れぬ床におこたの早く冷え　裕邦
こたつから今日の会計渡される　栞

もうこたつあときにして寝る夫婦　好郎
増取を貯金ときめるいいくらし　凡子
一線を堅く守って高姿勢　左久良
喜寿米寿帰省することもなく　古方
手不足へ本宅までも駆り出され　白柳
手不足へいちいち物を取りに降り　南宗

カメやマ
亀山ローソク

雑川　米子支部句会（米子市）

小西雄々報

結納にもう泣けてくる老母なり　蛙眠子
機械化へ牛は小さくなって生き　ユリ子
牛の声聞いて平和な村は明け　吾柳
ミス日本牛乳風呂でみがき上げ　幸子
牛の尻たたく農家が置き去られ　一保
角の無い牛が落ちつく缶の中　芋人
セリ市へ牛も晴着をつけて来る　節枝
スキ焼の鍋へ売った牛の顔　鶴丸
牛売った金受取って拭く涙　雄々
人間を肥らせ牛は骨になり　素瓢
いざと言うときには牛を売る覚悟　布堂
成人を祝う酒屋に議員さん　一男
恩師の碑洗い成人報告し　虞究
絵にしてもみたい荒野の一軒屋　一机

雑川　高知支部句会（高知市）

大西迷窓選

想い出の深き小川のなつかしく　政史
にわか雨小川のかにも宿を変え　敏路
ひと筋のせせらぎ残し銀世界　貞美
夕陽もう沈む小川に馬洗う　かつみ
丹前が汚なくなって梅が咲き　康裕
丹前の派手な模様も旅の宿　幸四郎
丹前を着て定年を考える　酔雀

初便り丹前を着て読みなおし　千代
父の気をよく知る母はさからわず　木精
せっかちの母へ父ちゃん呑気なり　厳道
先妻と別れた理由を気性にし　雪峯
かかり子の気性ばかりが気にかかり　久江
苦労性気付かぬままにしわが増え　蟠蛇
気性もう見放かれている借りられる　迷窓
マスクして居れば美人と云うてくれ　呑洋
顔知りへ笑いかけてるマスクの目　砂丘
欠勤の言訳らしいマスクが来　俊一郎

雑川　奈良支部句会（奈良市）

内海敬太報

小雨降る町にうごめくデモの群　宏敬
こんな記事かかねば売れぬ週刊誌　啓林
いたずらを餓鬼大将の顔でする　仰天
質悪い男のいたずら酔うて居り　敬介
いたずらに検挙をされたデモ参加　三知
通勤のアクセサリーに週刊誌　源太
いたずらの数学案外出来るなり　敬太
毎週の買った週刊誌山とつみ　信一郎
スタンドの灯で読んでる週刊誌　宣太
いたずらが過ぎて親の目と出合い　大将
道一杯迷惑考えぬデモの群　鋭太
週刊誌夜汽車の旅の友にする　笛生

雑川　南海電鉄川柳会（大阪市）

辻圭水報

締切り後編集泣かせの作ばかし　南天郎
これ以上スピード出すなら降してや　句念坊
スピードでさせた仕事で値切られず　宏子
転勤の挨拶盆栽でもいじります　和郎
恋人にフルスピードの腕を見せ　泉秋
母危篤今日のこだまのおそいこと　みなつき
黄信号走って渡ってパチンコ屋　圭水
改札をトップで出るも若さ也　路郎

大阪逓信病院川柳会（大阪市）

橋本幸雄報

還暦の余興は孫の鳩ポッポ　草右
余興でっせと前置きをして口説なり　愛論
余興からいきな色気を見直され　宏子
信号燈牛はちつともあわてない　露児
初荷挽く牛の時代をなつかしみ　竹青
ますかけの子の手さえ寡婦生きる　好治
運勢が向けば向いたで敵が出来　没食子
人知れず運勢も見る三十娘　ハナ子
初出日は只そわそわとしてかえり　竹志
初出の娘島田姿で叩くレジ　風船堂
挨拶にマゲが気になる初出の日　けい女
初出勤何はともあれ飲みに行き　よしを
日本髪冷かされてる初出の日　春雄
つまずいて見て運勢のあるを知り　幸男
初出勤机のカギを忘れて来　路郎

帝化川柳会（大阪市）

谷沢好祐報

着飾って雨が気になる借衣裳　柳彩
雨合羽着てまでおやつ買いに行き　雄水
おかめ笹に誘われ氷雨の戎宵　蒼芒
君達がうらやましいと社長言い　孝夫
小使も兼ねる社長でペタル踏み　京一楼
頭だけ社長と同じ型で禿げ　晴暉
下積みの苦労我が家の酒になり　風柳
縁故には勝てず下積み二十年　昌司
下積みの頃の家計簿なつかしみ　九柴
学歴の差を下積みは口惜しがり　雅堂
下積みのみかん四角になって着き　好祐

明和川柳研究会（西宮市）

樋口舟遊報

雲迅し父に不信を抱いた日の　新子
男親大きなズボン買うてくる　舟遊

正直な子にはやさしい父だった　蝶花
偉すぎた父が重荷になり始め　すゝむ
ガムを吐き捨てて女優は出番なり　幸
エンジニヤの癖はなんでも記録する　菁風
紛争も残る記録に裁かれる　大丘子
土の香にまずしい記録つみ重ね　千尋
試歩の道奇蹟の跡を振り返り　弦月
振り返りもせず反動内閣が出来　敬太
振り返るところを待っているカメラ　梅志
和服着てその印象も病み上り　六童子
病み上り蟬を放してやれと云い　薫風子
並木道行けば出て来る時計台　三舟
ピーナツをぽりぽり並木道をいき　球絵
横降りになって並木が荒れくるい　寿栄
並木割き行く様に単車行く　花見

333川柳会（堺市）

林冗歩報

ダンプカー救急車だけよけており　文福
ダンプカー帰りゃ優しい父であり　新石
ダンプカーでも特急にはねられる　雪山
久し振りあいさつ忘れ話しこむ　八江子
久し振り会った教師にまた説かれ　元二
はげあたま同志久濶叙しており　冗歩
久し振り大風呂敷をまたひろげ　雄声
有名人思い出までが金になる　楓
クラス会もう打あけてよい話　圭井堂
思い出の池の深さへ石を投げ　貴山
出発の子多し親は金がなし　綾女
出発へ二号は次の駅で待ち　狂二
出発に幹事一人がいそがしく　務
発つ前におしっこさせる幼稚園　南宗
出発のベルに母親まだ降りず　一楽
見送らぬ肚で時間は聞いておき　好郎

富柳会句会（富田林市）

阿部柳太報

洋モクのマダムに別なスキャンダル　きはち
アルプスも銀座もピース四十円　長洋
紫煙の輪ゆれて我家の春近し　周一
妹にも片手拝みのタバコ代　吉太郎
村芝居切られの与三が巻タバコ　美代
割勘の花輪で義理が一つ済み　六竜子
大臣の知らない花輪も街に立ち　増治郎
恋がたきそれでも花輪は送って来　とみえ
色あせた花輪に暮れるドサ廻り　とも子
月賦三千円子らはテレビに無中なり　善照
テレビ見て今宵宿題残して寝　ふじ
思いやりの金が鳴ってる慈善鍋　紅月
駅に来て土産の届く思いやり　柳太
ボーナスへプラスAのおもいやり　東雲楼
三界に家なき妻を思いやり　摩天郎

コクヨ川柳会（大阪市）

この度は御栄転でとおちょくられ　亀心
栄転の課長の歩きかた違い　正敬
植木屋ほふところ手して値を決める　北斗
懐手明治のにおいちょっとみえ　柳波
懐手しているすきを追い抜かれ　ほたる
子は既に大阪弁に馴れており　狂史
正月に大阪の青い空を見た　留鈍
ああさよか軽くいなしてなにわの娘　理休

たけるべ川柳会（岡山県）

野々口美舟報

考えて見てもきまった智恵袋　牛骨
考えた末は女房の智恵を借り　只世
北海の果から五円のはがきが来　一喜
挨拶はあとから孫を抱きあげる　賤女
打ちあけるつもりの酒に酔いきれず　山彦子
考えて歩けば小石に馬鹿にされ　喜楽
栄転へ附箋がついて来たはがき　美舟

昭和三十五年度

大万川柳

麻生路郎先生選

―右から天地人の順―

「養子」　第百九回
ジャンパーで養子四十の肩の巾　三司
養子に来てからも偏食治らない　万楽
時代なり天衣無縫の養子が来　薫風子

「入社」　第百十回
新入社オールドミスに指図され　陽子
入社して三月社長をまだ知らず　南天
この通り入社しました社用箋　柳志

「かけ持ち」　第百十一回
かけ持ちの仲居酌いだらもう居らず　春巣
かけ持ちで稼ぐからだを母案じ　二路
かけ持ちへわがままを通すほどに売れ　狂二

「大入り」　第百十二回
大入りを口で受取る結髪部　きさ子
大入りのここは扇風機に外ずれ　万楽
大入りの袋で飲むも久しけれ　没食子

「朝寝」　第百十三回
昼風呂へ歯みがきと来たいい女　清人
当然のようにお師匠さん朝寝　潮花
末っ子に朝寝の布団めくらせる　圭井堂

「替えズボン」　第百十四回
替えズボン定期忘れてひきかえし　梅里
下駄履きで気軽るに世話やく替えズボン　葉光
長男にまたもとられた替えズボン　きさ子

「年上」　第百十五回
傍に居ただけで年上叱られる　南宗
年上を貰う気でいたのもはたち　潮花
弱い息子へ姉女房を探がすなり　夢虹

「先生」　第百十六回
親馬鹿の顔先生に覚えられ　東岸
そろばんの先生さんま焼きながら　豆秋
先生の髪についてた御飯粒　喜仙

「味」　第百十七回
味はめてやるとおっさんニヤツとし　豆秋
落ちぶれて味には触れぬ父になり　二路
味のこと言わず学者の飯がすみ　万楽

「ガールフレンド」　第百十八回
ひとり子へガールフレンドばかり来る　香林
ガールフレンドじれったいこと大嫌い　和友
そのかみのガールフレンドから融資　没食子

「ベッド」　第百十九回
親友の見舞ベッドへ腰をかけ　東岸
ベビーベッド大きな欠伸して見せる　恵二朗
握手して明日は手術というベッド　万楽

「女優」　第百二十回
好きなればこそ新劇女優どうも貼る　水京
ぼくの富士子さんを雷蔵が抱き　夢虹
萎びてもスターで通る蝶子なり　麦太楼

酌よし　千日前大劇裏　TEL(63)二七一〇
味よし　アベノ橋近映地下　TEL(77)〇一四七
梅里の店
大萬

★大万川柳（第百二十二回）を募る
兼題「ホームバー」　路郎先生選
締切・四月十五日（五句以内）
発表・四月廿一日（店内掲示）
投句先　阿倍野区松崎町三ノ10　大万川柳会宛

柳樽室

★すっかりあたたかになったが、私はまだ、掘りごたつの上で仕事をしている。夜は電気ごたつと電気座布団のご厄介になっている。雨戸と、二重のガラス障子を透して、冷気が腹を冷やすので、更にカーテンで冷気をふせいでいる。誰の眼にも元気になったと云われているが、こんな状態では余所では泊まれない。もっと、もっと暖かくならねば旅に出ることは思いもよらない。「旅と宿」という雑誌に随筆をかかされたり、あっちこっちで外遊の話が出るたびに、尻がムズムズするが、地下鉄の階段で後押しをたのむようでは心細い限りである。

★心細いと云えば、日本の郵便の遅いのにはウンザリさされる。郵政省も郵政省だが従業員も従業員だ。同じ大阪でも何十日もかかるのがあるし、同日に発送した雑誌がAには着いてBには着かない。毎月のことなので申訳のしようがない。ハワイの読者から、四十五日経っても着かないので、「今頃は川雑さん、どこにどうしてござるやら」とサワリもどきの手紙で皮肉られても、ただただ恐縮するばかりだ。池田君も郵政大臣もシッカリしてや。一人一殺がアタマに浮かぶ郵便マニヤの十七歳の少年がソコラにウロチョロしていないとも限らないからね。

★アベノ支部の御大が、病臥したままなので、句会場の近くに住んでいて気が気でなかろうと思い去る十五日夜の会が、私の休養日の水曜日に当るので、出かけて見た。今日は私も参会者の一人だと云ったが、矢張り選をさされ、柳話もした。柳話は豆秋君の句の鑑賞をした。これも病臥している豆秋君への思いやりである。

★前号では、身体傷害者の高須啞三味、武部香林両君の告白記事が載った。ひしひしと身に迫るものがあって読みながら私は涙した。しかし、眼に見える身体障傷害者と眼に見えない身体傷害者のあることも考えられるので、それ等の人たちは私たちは出来るだけ暖い心で手をさしのべる必要があると思った。と同時にそれ等の人たちも、心のなやみを存分に句の上に吐き出してもらいたいと思う。

★私も今一ト息のからだで懸命に川柳のために働らいているので出来る限りご協力をお願いしたい。

（路郎）

▼ペンの散歩▲

▼ことしのさくらはスローテンポだそうである。どうせ咲けばすぐ散るさくらだ、ゆっくりわれわれを楽しませてくれたらいい。三月三日のヒナ祭りの日から釈迦の生まれた四月八日―灌仏会（かんぶつえ）―の花まつりの日まで〃春の、花いっぱい月間〃が催される。＝庭から道まで、花いっぱい＝

▼本号を、よみものの花いっぱいにするため、路郎先生にもゴムリ願っていつもよりウンと書いていただいた。

▼特別読みもの「柳界あれこれ」は、伊志田孝三郎・冨士野鞍馬・塚越迷亭・高須啞三味四大家による東京座談会である。まずは詰界の圧巻であろうと自負するものである。これからもずっと本誌を飾ってくださるのでご期待ください。

▼リバイバル・ブームでわが家の「古畳」や「古女房」の株も上がったが、なんとかして若い人たちについていき、ワケのわからない流行歌にもとけこんで、貧しいペンの老朽化を防ぎたい。

▼前号の女流作家による「よくぞ女に生まれける」は好評だった。編集局と執筆者がピッタリ意気のあったときはいつもヒットする。だがそのチャンスがなかなかつかみにくいものなので〃よし書いてやるぞ〃という意欲がないと凡打におわるようである。本号は印刷所と郵便局さえスローテンポにならなければ月末にはお届けできるとおもう。

（一三夫）

★四月句会　―川雑支部

★宇部句会・2日（日）一時半、題、即席・混雑・紙くず・エンジン、所、宇部市東区恩田長沢津秋六花居、★淀川句会・11日（火）六時、題、曲り角・若返り・ダンプカー、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局、★米子句会・9日（日）一時、題、割勘・欲・報告所、安来市の予定、★明和研究句会・23日（日）一時、題、肩・童心・週末、所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、★かゞみ句会・2日（日）七時、題、陽気・刃物・左前・まずい・インスタント、所、池田古心居、★京都句会・16日（日）夕、題、契・飲代・田螺、所、四条縄手仲源寺、★玉造句会・10日（月）七時、題、反省・フィアンセ・一二杯、所、市電玉造南百米大阪信用金庫、★阿倍野句会・19日（水）六時、題、人垣・留守・ポイント、所、旭町二丁目金塚会館、★にしなり句会・16日（日）六時、題、古傷・春の音・寝巻、所、玉出新町通一ノ一一後藤梅志居、★南海電鉄句会・27日（木）六時、題、ダンプカー・注意・憲法、所、難波高架下親和クラブ。

麻生路郎先生著

川柳とは何か　送価 二五〇円 三三円

―川柳の作り方と味い方―

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽――そうしたもろもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は――以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所　川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27　振替東京29507

お酒と疲労に！

悪酔・二日酔をふせぎ
綜合的に体力を増強します

肝臓にはヤッパリ

強力ネストン ゴールド

マルゴ印 田辺製薬

30錠・100錠・300錠

倉敷紡績株式会社

東レテトロン65% 高級綿35%

クラボウ

テトロンシャツ

姉妹品 クラボウテトロンブラウス

あなたの句帖が出来ました

★路郎好みだけに、すばらしく気がきいています。句会でお使いになるなり、抜けた句の整理にお使いになれば、何冊かで、あなたの句集の礎稿が出来ます又柳友への贈答に、句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。

一冊五五円（送料 各八円）
十冊五百円（送料 五〇円）

★ご送金は川柳雑誌社振替口座七五〇五〇番をご利用が便利で安全です。（切手代用可）

麻生路郎著 好評噴々

川柳の味わい方・五百数十句

価二五〇円 送料三二円
上質B6版 二五〇余頁

あなたの書架にゼヒお備えを!!

大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地
川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇
電話大阪㊗六〇八一

募集

課題吟募集

階段（十句以内） 丸尾潮花選
年季（十句以内） 津田麦太楼選
ハンドル（十句以内） 魚住満潮選（四月十五日締切）
民謡（十句以内） 小西無鬼選
海岸（十句以内） 小浜牧人選
眼鏡（十句以内） 太田良子選（五月十五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内） 麻生路郎選
川柳塔（雑詠十句以内） 北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他） 麻生路郎選（毎月十五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼「課題吟」は誰でも投句が出来る。
▼「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 三十六年 第四号

定価 七〇円（送料四円）
半カ年 四四四円
一カ年 八四〇円

（禁転載）

昭和三十六年 三月廿五日印刷
昭和三十六年 四月一日発行

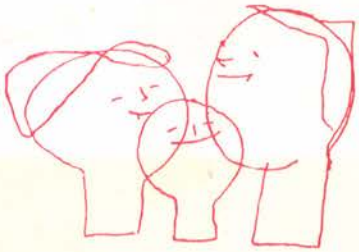
大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地
編集兼発行印刷人 麻生幸二郎

大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社
電話大阪㊗六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇

printed in Japan

昭和廿二年七月一日　第三種郵便物認可
昭和廿六年四月一日　発行（毎月一回一日発行）
編集兼発行人　藤本喜二郎
発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地　電話大阪(69)六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番
定価七十円（送料四円）

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓮葉

大阪なんば・TEL ㊥551－2

6月11日まで

あやめ池
世界
スリラー博

楽しさあふれる あやめ池

■おなじみの怪奇名作小説を興味深く立体にした世界スリーラー館　ショッキングランドはよそでは見られないスリルとショックのミックス　探偵作家クラブ監修世界推理百科ホール　警視庁特別出品鑑識科学器械の実演　円型大劇場"春のおどり、などオッカナ・ビックリ・オモシロ集
■このほか　水上ジェットコースター　園内一周夢の観光列車　ロープウェイ　スポーツランド　動物園　大自然博物館　ウォーターシュート　など　1日たっぷり遊べるステキな施設いっぱい

入場料 円型大劇場"春のおどり、つき割引前売130円当日140円（小人70円）　あやめ池駅のすぐ前が会場

近鉄あやめ池遊園地

一番よい酒
うまい酒

清酒
菊正宗

宮内庁御用達
株式会社　本嘉納商店
神戸・灘・御影